

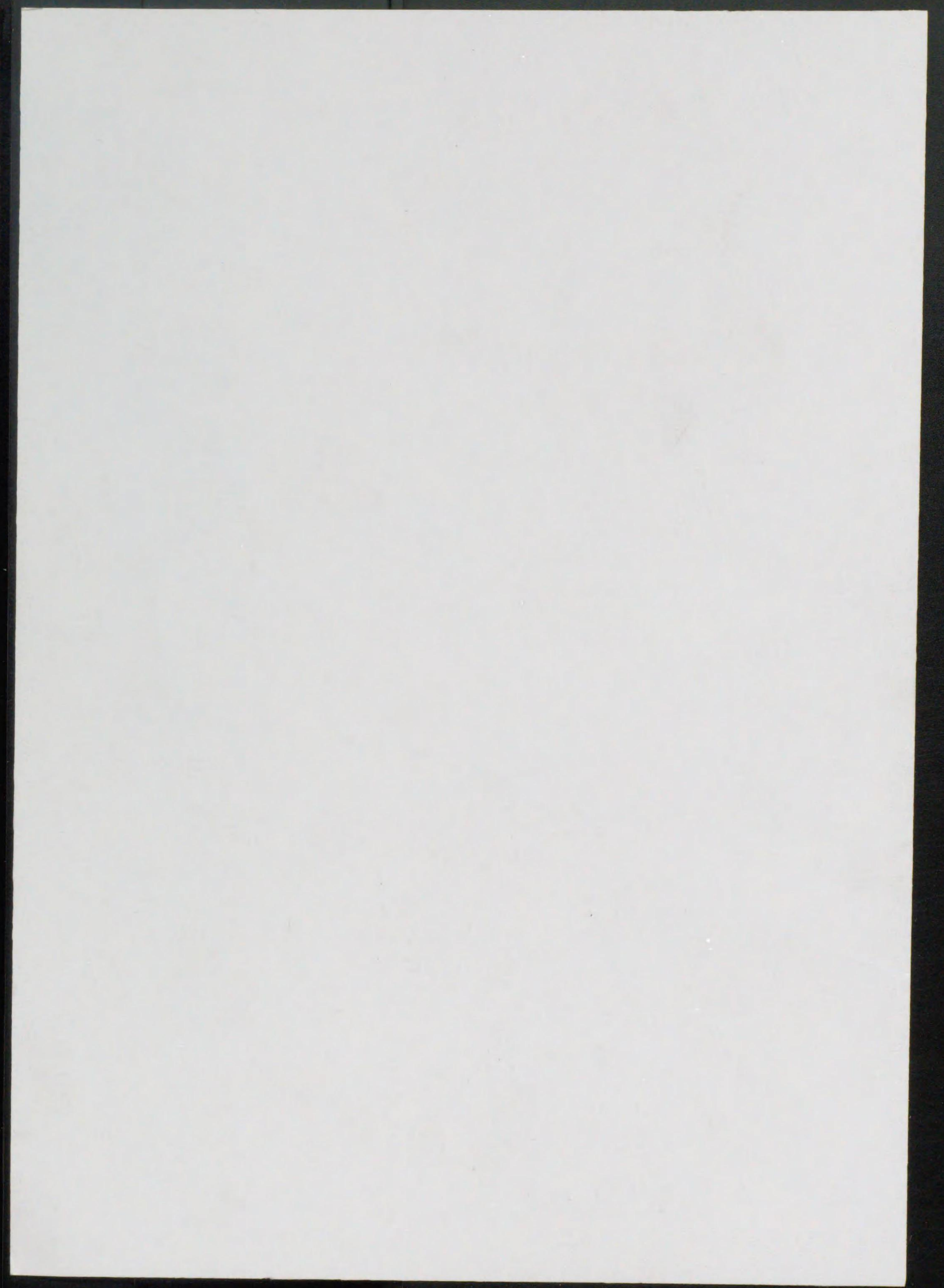
639-114



1200501566011

639
4

口
複
写



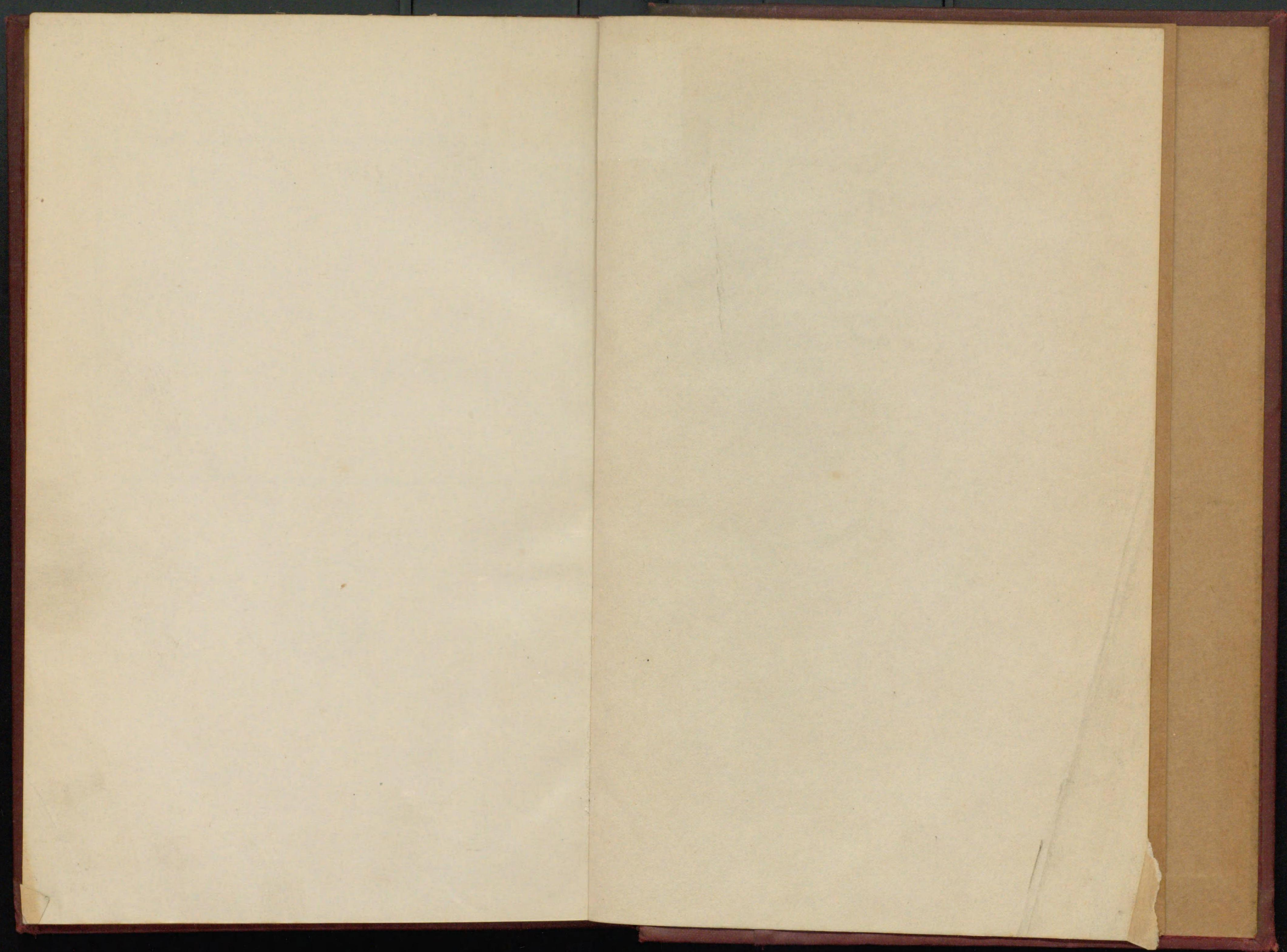
9. 2. 27

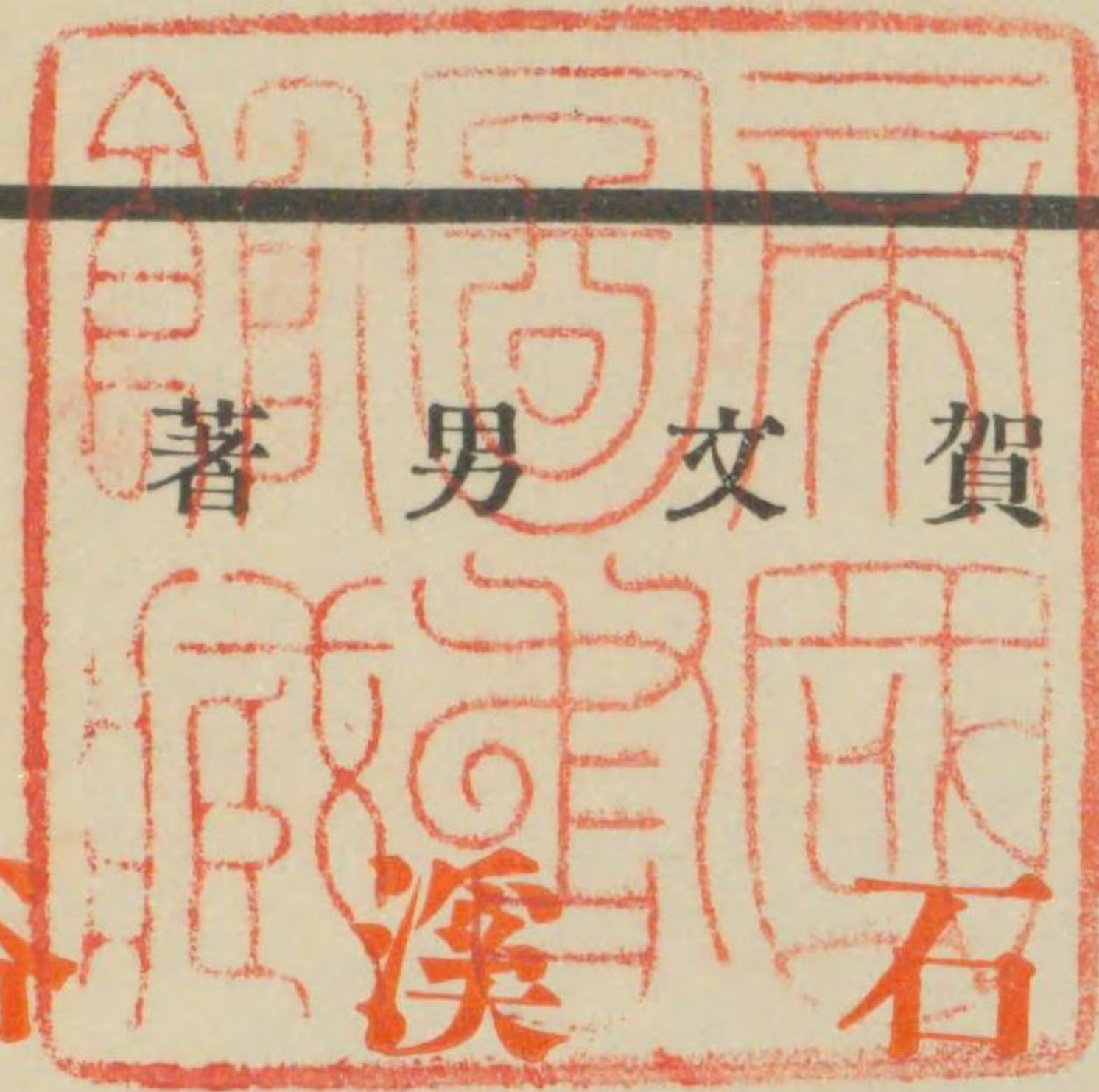
2

639
114

赤石溪谷

平賀文男著





平賀文男著

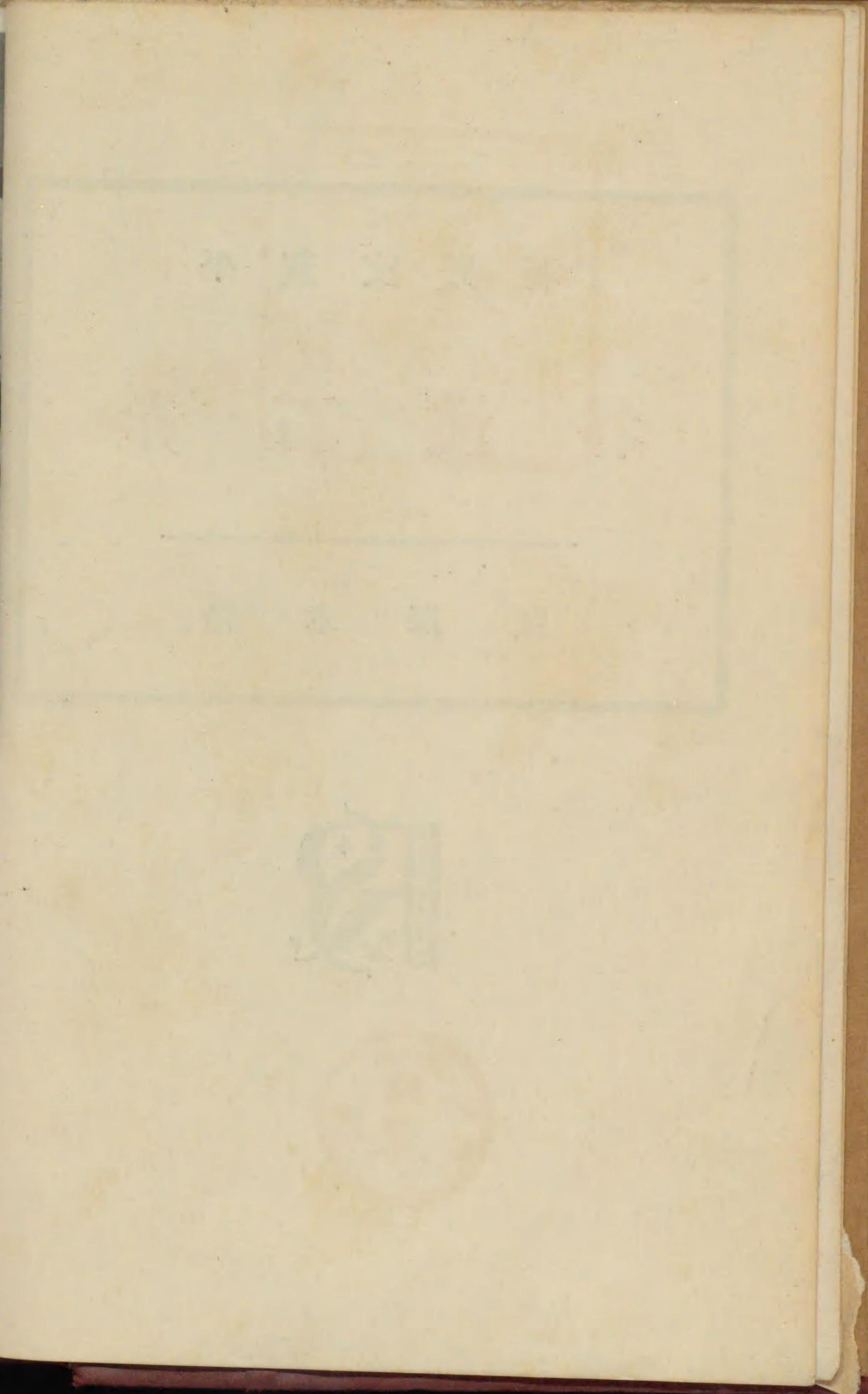
赤石川漢谷

隆章閣版





赤石岳東面五月著者





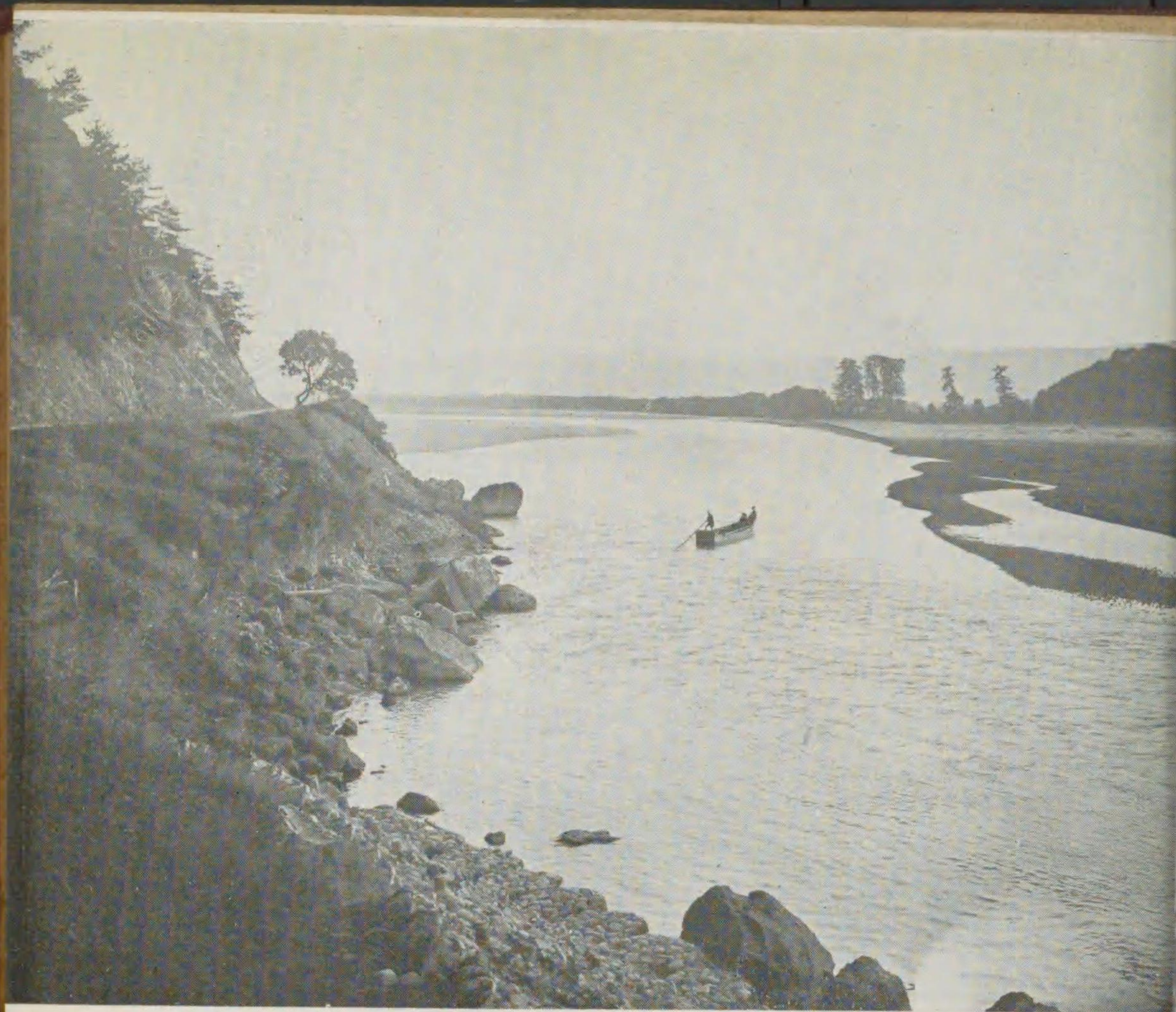
聖平附近よりの上河内岳 一月 村井氏

聖岳よりの赤石岳 一月 村井氏

初夏の間ノ岳 石室附近より 五月 著者



冬の間ノ岳 兒島氏



大井川の下流 著者



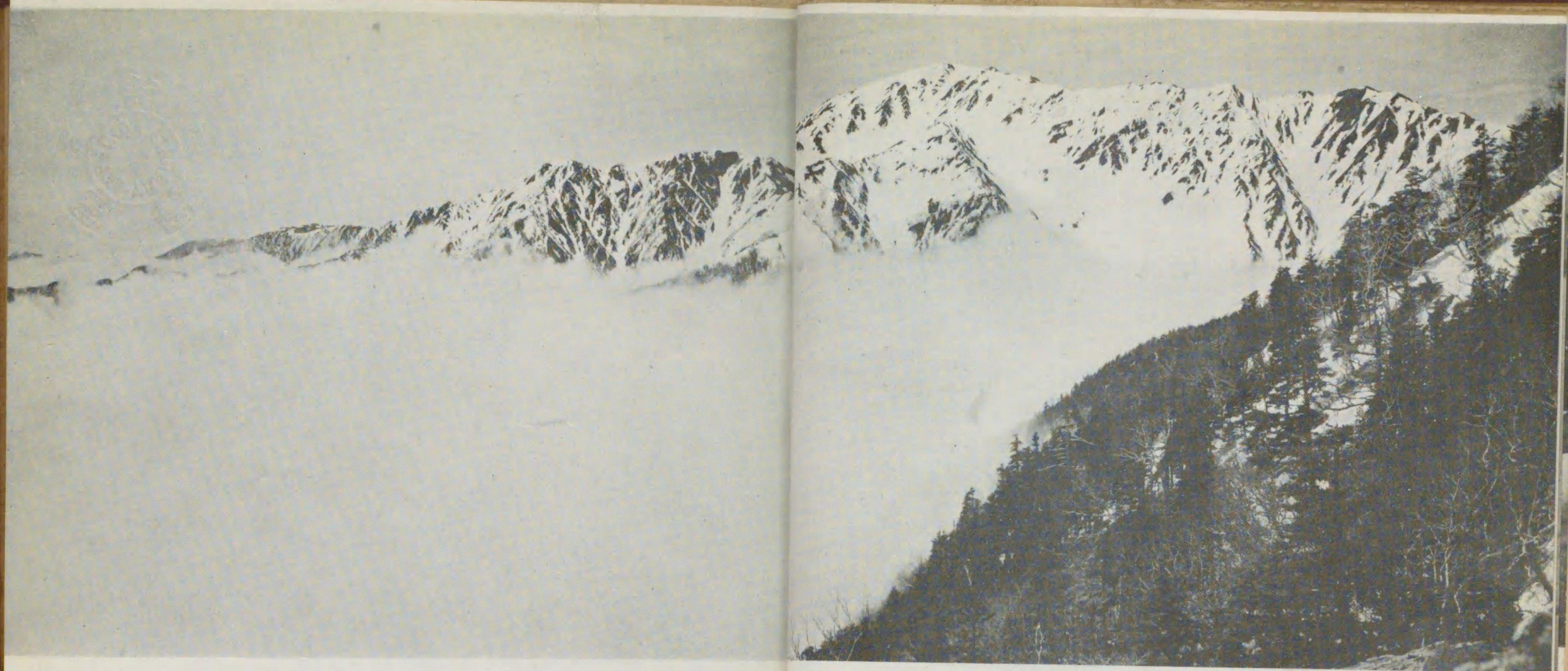
北岳のバツトレス 五月 百瀬氏



白峰北岳 兒島氏

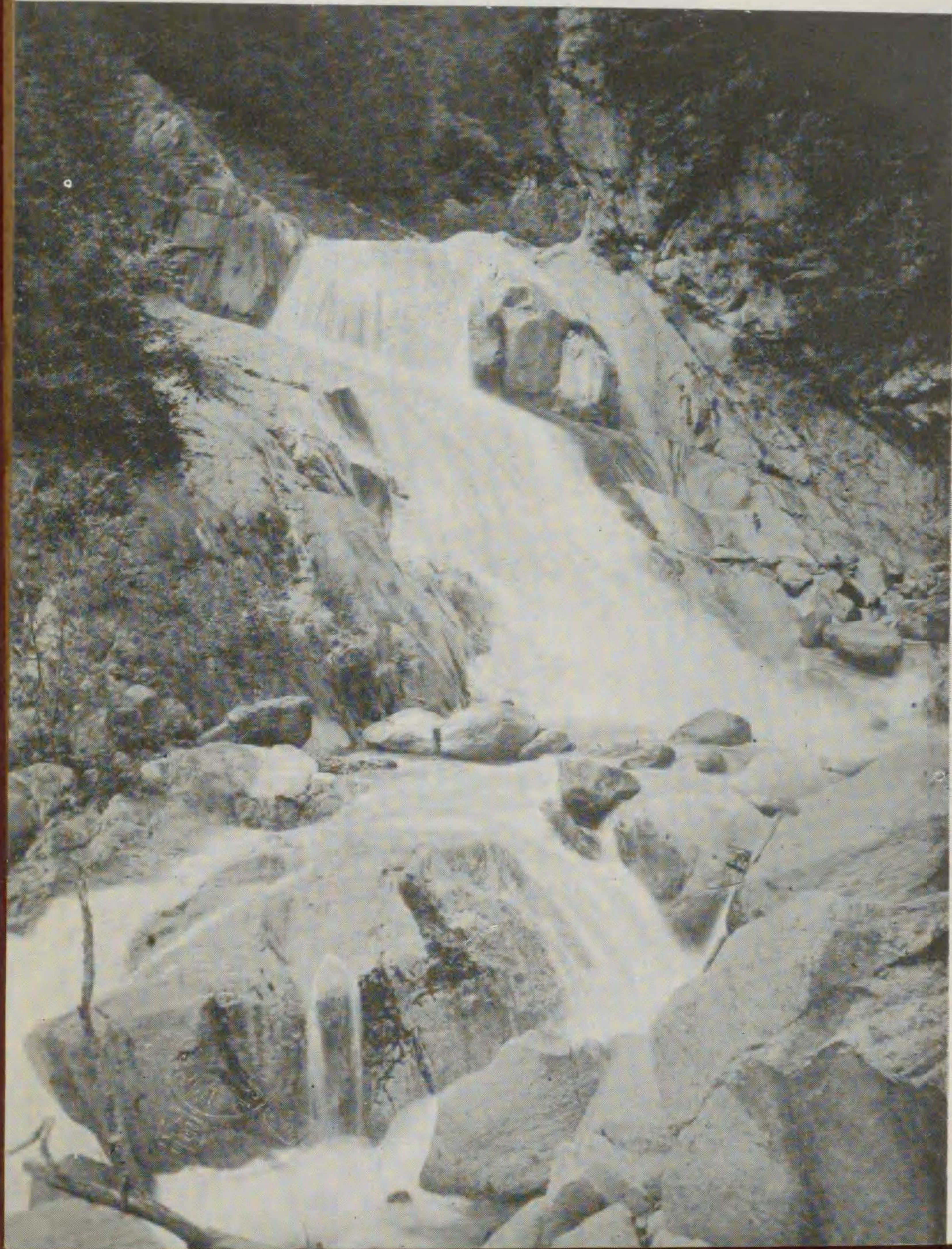


杖立峠よりの農鳥岳 二月 早川氏



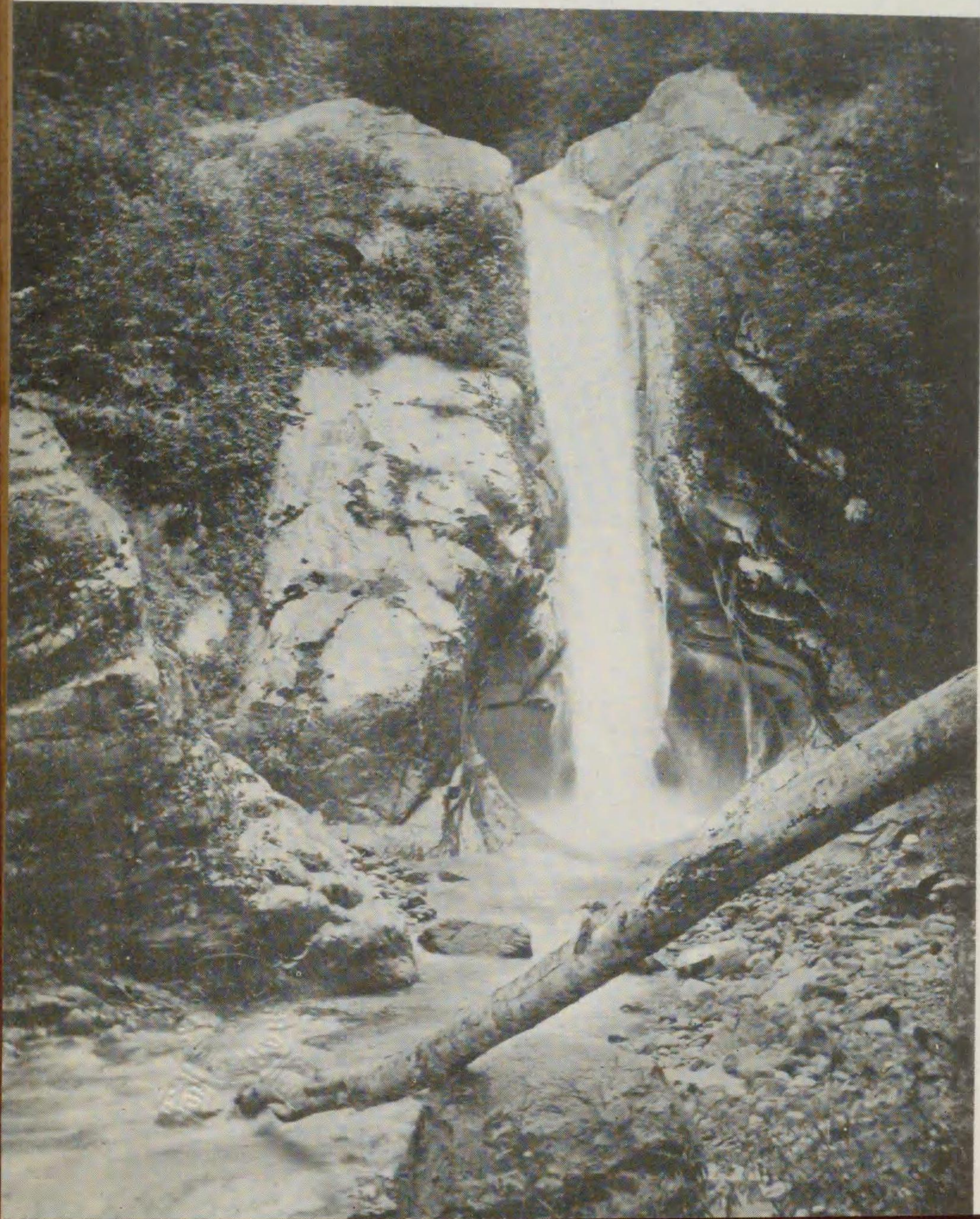
池山釣尾根よりの間ノ岳及び農鳥岳 五月 百瀬氏

大武川溪谷のヒヨングリ瀧 著者



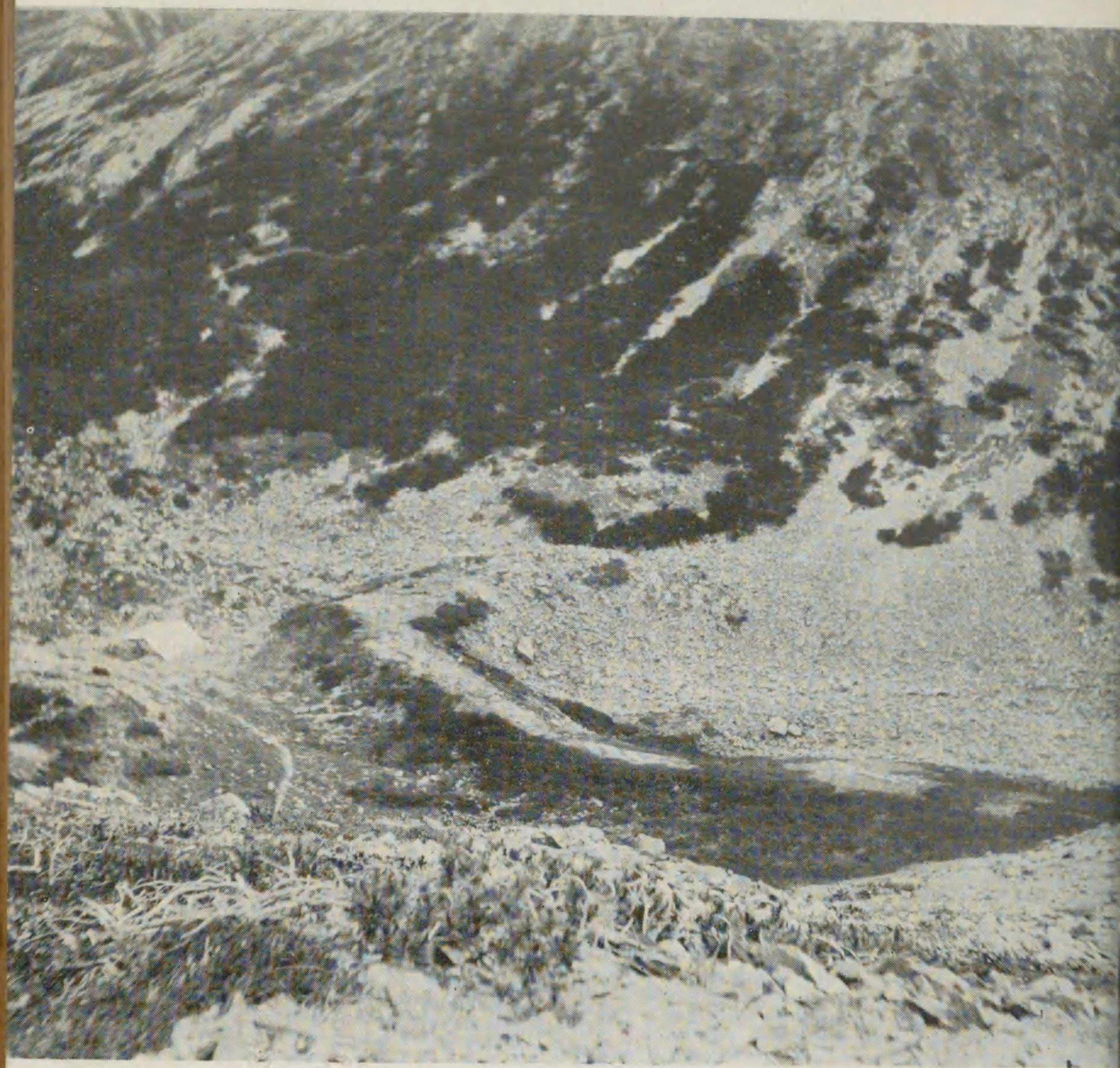
接 岨 峽 の 閑 藏 著 者

大武川の赤薙瀑 著者



地藏佛 著者

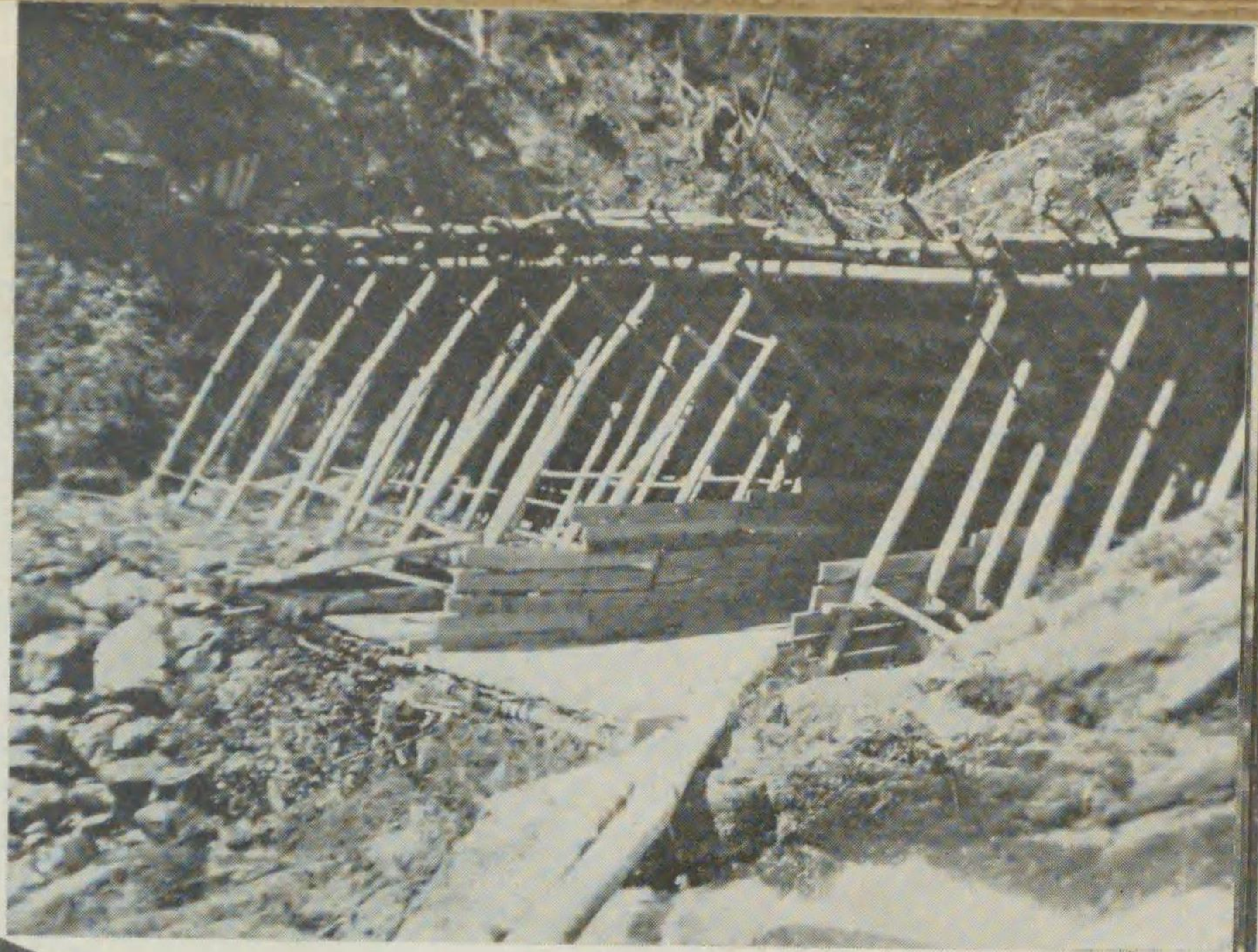




仙丈岳のカーンル 左の白いのは小舎 著者



聖平の野營地 著者



大井川奥地の林業(テッポー)

三峰川のおめの魚



山の娘



639-11

序 詞

茲にいふ「赤石溪谷」とは、本邦内地に於ける最高最大を誇る山岳、赤石山系の溪谷を指示するものである。

此の水系は、大井川を中心として、東は富士川、西は天龍川の三大川に悉く収集せられ、而して、早川、寸又川、三峰川、小澁川、遠山川、水窪川の六大支流の水脈網は、その山嶺から山脚を隈なく洗ひ、千古の雪も、融けては流れとなり、雲霧の雫も懸つては瀧となつて落ちてゐる。

富士川は、甲斐駒山脉の東邊をなす所謂釜無斷層崖の下底を洗つて鰍澤と十島の間第一大浸蝕谷を作り、その支流の尾白川や大武川は花崗岩の龜裂斷面を、又小武川はそれと三紀層の間を流れ、同じく早川は白峰山脉の古生層と甲斐駒山脉の花崗岩並びに三紀層との接觸斷層を浸し、身延の附近で横谷 Subsequent Viver となつて注流する。

大井川は、東俣、西俣、奥西河内、赤石澤、聖澤等の各斷層流を合せ、寸又川と共に一大浸蝕谷を成してゐる。

斷層線を南下した三峰川は曲折して北に向ひ、赤石裂線を経て、天龍川に横谷を以て合流し、小

澁川、遠山川、水窪川も亦等しく小斷層と赤石裂線の水を集め、横谷となつて天龍川に注ぎ、天龍川は伊那の中央斷層線より遠州北部の山間を浸蝕してゐる。

是等各支流の大なる傾斜は、壯年期高山地の溪流に特有の底浸蝕を増大ならしめ、いづれも幽玄なる峽流と溪谷を形成し、茲に山岳の精粹に併せて溪川の溢美を展開してゐるのである。

赤石山系の自然美に憧憬を寄する程の山岳人が、その溪谷の態様を等閑視する筈はないとすれば、普通一般的な登山路の概要を紹介する時、此の溪谷の登降路を特に逸する事は許さるべき道理でないと思ふ。予は先著「日本南アルプス」のデュエツトとして、遅れ馳せながら敢て本書を世に出す所以である。

予の著作する山岳書は常に、その山岳の山麓に生れてその山村に育ち、朝夕その皓麗なる山岳に親しく接觸し、而してそれへの限りなき愛着心より生ずる郷土開發の使命の幾部分かを自負する以外の何物でもない。

この、山岳に依つて興へられる處の熾烈なる郷土愛の人に齎らす、やむにやまれぬ慾求を思索理解する事なくして、單なる著作業者のそれと混同される事は、自分の最も忌避する所である。

予の紀行文が、その本來の面目を脱し、勢ひ案内文と混交する所以は、實に茲に存するのである。

併し乍ら、登山家に多くの分野があり、登山の主旨と目的に多くの種別あるが如く、山岳書も亦當然多岐多様ならざるを得ないのであつて、言ふ迄もなく、一、二冊の山岳書にして完全にすべての登山家の心の糧となり、又は登山の實地指針たり得るやうな著作は、實際に於て恐らく望むべくもないとすれば、本書も亦多くの山岳書の驥尾に附し、此の種の讀者を得る事に依つて、幾分なりともその責に任ずるものではないかと思ふ。

山岳界の辱知諸氏が、本書の不備不満を寛恕せられるならば幸である。

一九三三・六・一〇

著 者

目次

序文
目次
寫真目次
索引

| | | | | | |
|---|----------------|--------|--------|-------|----|
| 1 | 田代川 | 山の水車 | 燒畑と切替畑 | 金鑛廢滅 | 一 |
| | | 小河内の起因 | 田代の起因 | 井川山伐採 | |
| | | 里程表 | | | |
| 2 | 東侯川 | | | | 四三 |
| 3 | 西侯川 | | | | 五七 |
| 4 | 赤石澤 | 伐材と運材 | | | 七一 |
| 5 | 聖澤 (Edelweiss) | | | | 八三 |

田代川

北岳のバットレス

白峰北岳

杖立峠よりの農島岳

大井川の下流

池山釣屋根よりの間の岳と農島岳

接岨峽の閑藏

大武川溪谷のヒョングリ瀧

地蔵佛

大武川の赤薙瀑

聖平の野營地

仙丈岳のカール

大井川奥の林業 テツポ

山娘

三峰川のおめの魚

百瀬舜太郎氏

兒島勘次氏

百瀬舜太郎氏

著者

百瀬舜太郎氏

著者

著者

著者

著者

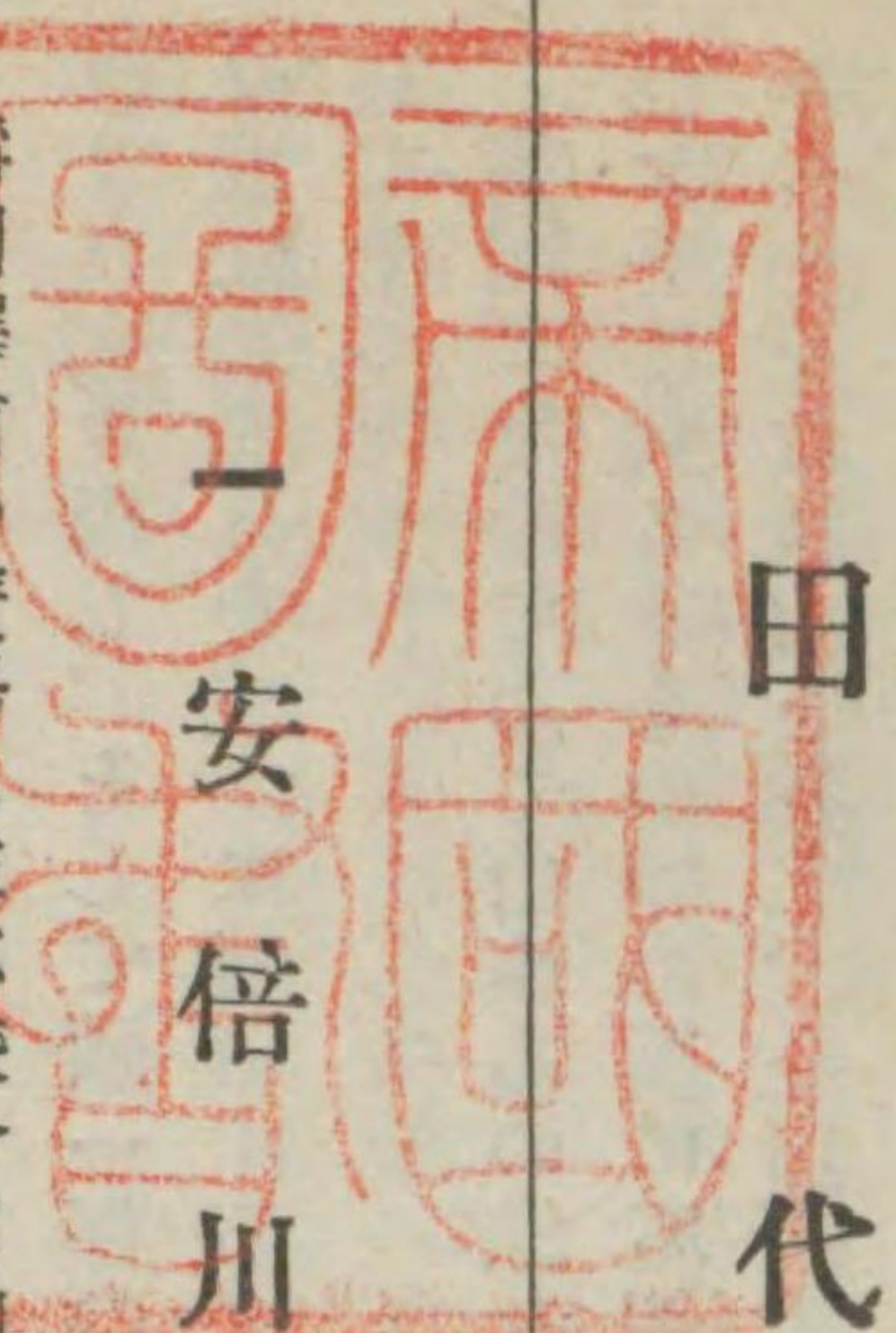
著者

著者

著者

著者

著者



田代川

静岡驛前の廣場に並ぶ乗合自動車を物色して、井ノ宮行に乗れば、市街を北へ、國幣小社淺間神社の朱塗りの社殿が建つ境内の前を左に逸れて、安倍輕便鐵道が始發する井ノ宮驛へ着く。それは東海道線の列車の時刻にほゞ聯絡して、安倍川の溪沿ひを北へ約三里、牛妻まで此の軌道の便を借り、牛妻から又乗合自動車に身を托して、猶ほ其の上流へ向ふのである。

依澤の先き、六番で玉機村を渡り、安倍川の支流中河内川の溪に入つて、下落合で自動車を降りる。南に少しく傾斜した部落、玉川村役場、郵便局、小學校、旅舎に三寶屋、玉屋などが在るが人氣は尠な

い。腰瓦の壁をつけた土藏の前の庭に咲く花菱草に集ふ、はなせ、りを捕へようとしてゐる時、からすあけはが飛んで來たので、うまく捕網へ伏せてしまつた。

赤トンボが數匹、澄んだ路上の空氣を切つて、スイスイと羽根を光らせてゐる。

村端れから溪は北に轉じ、西から西河内川が落ち合つてゐた。筏流しの人夫と森腰まで道づれになつた。安倍川の雨後の濁流を流して行く筏は、西河内邊から此の人達が請負仕事に組んでは静岡まで流すのである。徑四五寸の杉材を六、七十本組んで静岡までの二日を要し、それで手に渡る賃金は都會労働者の日當に及ばないのである。

河流は細かく紆つてゐる。道は右岸から左岸へ移り、長熊の里落を左手下方に見下して行く。堤防石

積に並ぶ數本の柳、河原に遊ぶ多くの子供達、水田なども少しく拓かれてゐた。
道端にポツリ／＼人家が在る。杉林の傍らを過ぎる。タマアジサイ、ユズリハ、イワタバコ、オホバコ、タニワタリ、カンアオヒなどが切通しの道に生えてゐる。

ヤマカマシの三尺ばかりなのが、によろ／＼と道を狙つて横切つた。アルペンストックの先端でその頸のへんをハタと押へる。蛇は頻りにあがいて逃げようとするが、どつこい仲々遁さない。蛇は恐ろしく怒つてゐるらしい。頭を扁平な三角形にし、眼をむき、下顎から黒い針のやうな細長い舌をスラリスラリと突き出し、そして頭一杯の大きな口を開いて今度はこちらを盛んに威嚇する。可愛相だから遁がしてやつた。

茶圃になつてゐる山懐ろの様な所の郷戸を経て奥池ヶ谷に到る。その間の溪に區切られて突出した左手の小丘は城山と稱し、今川義元の臣友任氏が、永祿十一年十二月武田氏に亡された悲劇を語る古跡で

で捕れる鮎の荒目巻を二つ。椎茸は味噌汁の中へ惜氣もなく入れてある。

姻戚の娘が臨時の女中に來て居て、「そゝうなものですが、何卒召し上り下さい」と田舎の祭典にでも招かれた時のやうな口上を述べる。氣遣ひの客人に對する山乙女の口吻にふさはしい、それは純なもの腰だつた。

二 大日峠

九月の前半、安倍川支溪の山村、上落合の朝は良く晴れてまだら雲がかゝり、日光が差してきた。氣温も攝氏二度。北西に扇平（九二〇m）の山を負ふて、桑、玉蜀黍、粟、芋などの畑や竹林に綴られ、瓦、萱、板、杉皮などに葺かれた人家の上落合、落合館を出立したのは午前七時。村家を外れると直ぐ井戸澤の橋を渡り、本谷の左岸に沿ふて平な道が溪谷の奥へ人を導く。杉の植林と、溪谷の兩側を掩ふカヘデ、シデ、モミヂ、ニレ、ダモ、クロモジ、ト

ある。奥池ヶ谷には旅舎大正館があつた。道は縣道で最近バスが通ふやうになつた。下落合唯間から一時間半、そして上落合までなほ約一時間半、柿島から長妻田の邊は村家に木犀の香りが強く流れてゐた。溪は著しく峽流となり、栗駒の人家は道路から離れてゐて見えず、油野の乏しい人家を過ぎ、暫くして上落合の村家が見えて來た。合流してゐる仙俣川の橋を渡れば南に少しく傾斜して三十七戸、上落合は山間の小部落である。静岡から約五時間位。旅舎落合館（浦田健一）へ泊る。

それは、村家の約中央に建つ二階家で、物品販賣業を兼ね農業も營んでゐた。小廣い土間から上つて奥の座敷に招じられた。裏の竹林で鶉が頻りに鳴いてゐる。宿の庭先のユズの樹のてつぺんでも、鶉がキチキチと叫んで桑畑へ飛び込んだ。

陽はまだ高かつた。が足の疲労を休めてゐると山の上から夕靄があたりをこめてきた。風呂へ入る。母屋の東の、風呂場に在る丸桶の浴槽に山旅の最初の汗をこころよく流した。落合館の晚餐、中河内川

チノキ、ナラ、などの潤葉樹が幽翠に生え茂つてゐる。曲折する山の鼻を廻る毎に眼前に展開される溪谷の姿容が強く心に映つてくる。

茶圃や蕎麥畑が拓かれて棕櫚の樹が二三本立つてゐる山懐ろなどを過ぎる。朝じめりの道にルリタテハ蝶を追ふ。杉の植樹が多い。

右手からトチノキ澤、それからシロイ澤などが注流してゐる。もう井川村の領分であつた。道は廣く平で、其處に流れ落ちる湧水を掬つて口をすすぎ、貪り飲む。放縦さ、うまさ。陽は照つて、ヘウモン蝶の翅に輝いてゐる。左手にヤミタケ澤が注ぎ、馳て行く先きに大日峠の山稜を仰ぐやうになつた。右方へ曲る道端に孤立して、旅舎口本屋と云ふのが在つた。北へ向つて北西に大日峠の山稜を眺め、その山裾に溪を差挟んで四十戸の里落、口坂本が見えてゐる。八時半着。峠路は、一軒の商家の側から前川橋を渡り、右に執つて村家を出抜け、山脚にかゝつて、ウシロ川に面した尾根を、ジクザツクに登つて行く。それは上り降り二里と稱する井川越えの難路

である。木綿の黒がすりの着衣に同じ前掛けをしめ、若き山の乙女は極めて飾らぬ質素な姿、萱で編んだ炭俵だけを幾つか背負つて一人坂路を下りて来た。山路に通例の丁寧な挨拶が交はされると、不圖云ひ合した様に其所に在つた丸太材の上へ腰を下して休むのだつた。

『早いですね。』

『ええ。』

彼女は口が重かつた。それでも、今朝山小屋まで行つて今、口坂本へ歸る所であることを語つたりした。青白い山民の血を受け、手拭ひを冠つてゐる顔は、整つて色も生々として白く、極めて清純な、健康な山の女の美しさが表現されてゐるやうに思はれた。名は田村ふみ。口坂本から少しく離れてゐる岳澤の一つ家の人である。哀しい山の放浪者にとつては、それは確かに大日峠の山村に咲く一輪の、可憐な野菊の精にもたとふ可きものであつた。

なほも登つて行く。道の下に急斜な茶畑があつて赤いホ、ヅキの草が生えてゐる。九時半、十六番の

より走り、二條は尾端にまで到る。北海道より九州にかけて広く分布してゐる。蝮、烏蛇などの如く捕つて薬用にされ、肺、肋膜の特効薬と云はれてゐる。

潤葉樹林の中できつ、いきとかけすの鳴聲がする。

十時、水呑茶屋へ着く。其處には一人の内儀と一匹の牝猫が居た。上りかまちに腰を下して三十分ばかり休む。澁茶一杯、冷たい水を飲んで、大きな梨二個と駄菓子を少々口に入れる。

峠の茶屋は十六番と此處より他には無い。そして此處も五十年程以前に建てられたものである。大井川奥の山民が、平野へ通ふ表交通路として、白峰山脈から連峯する井川嶺の大鞍部、大日峠を撰んだ事は當然である。それは高くそして長い山の聯亘である。先づ垂直的に溪の奥深く住民と自然界を閉ぢ込めて、永く孤獨の日常を護つてゐた。世相の推移は暫時かうした天恵の扉に向つて、反抗の斧を握らうとしてゐる事がまささま見せつけられる。峠の茶屋

は薄黒く古びてゐた。

井川村から静岡へ出る人達が四五人、茶屋へは挨拶した丈けで急ぎ足に降つて行つた。都風な若い娘なども雜つてゐる。平野の生活にあまり強くなさうな山の人達が、都市に辛辣な失敗を経験しても、多くはなほ且つ執拗な憧憬を抱いてゐる。峠を降る人の顔は生々として明るく、山村へ向ふ顔は鈍く薄暗い。都市と山村では、常に陰影の相違があるのではないだらうか。

水呑茶屋を出て、杉檜を植ゑた間を三町程登り、山腹を右にからむと、中河内の溪が振返へられる。遠く安倍山脈が溪を限つてゐる。井川山脈は、近く勘行峰（一四四九・六m）が眼前に眺められてゐるが、一帯に潤葉樹が多く、そして大木は尠ない。なだらかな、おとなしい山の形である。道は小平をなして大日峠の上に着く。十時五十分。直ぐ手前の左側に大日堂、二間に一間半、トタン葺、黒塗りの屋根が建つてゐた。正面には印を結んでゐる大日尊の石の座像が祀られてあつた。峠の蝮に指を咬まれた

休茶屋を過ぎた。大日峠の頂上まで山麓から登降路共各三十三番の觀世音を祀る。此處はその上り十六番目の個所である。

井川や田代の物資は、すべて持子に依つて大日峠を超えてゐる。口坂本より往復一日で十貫目が約一圓強の運賃であるといふ。峠ではあまり持子の姿は見られなかつた。

杉の木立の下で涼を入れる。帽子を脱ぐと冷たい風に觸れて頭がスツと軽くなる様だ。額の汗を手拭でふく。かうした際、タオルは熱苦しい感じがあつていけない。手拭ひかハンカチが良い。

枯ス、キの上を縞蛇が逃げる。峠の上り道の、かうした日向の暖かいス、キの草叢で幾回か縞蛇を見た。此のあたり、縞蛇が多く生棲してゐるものと見える。

しまへび

(Elaphe quadrigata) 蛇目(普通蛇亞目)游蛇科。背は淡青褐色、四條の黒褐色の縦線が頸部

佛像であるから、さうした治療を祈禱すれば効驗あらたかであるなどと眞面目に語る里人もあつた。御堂は風雨を避ける事も、又窮屈ながら假泊する事も出来ない事はない。高い樹木が二三本立つ。頂稜は雑草と矮樹灌木が生え、井川面は落葉松の植林が十數尺に延びてゐた。

峠上に立つて先づ胸を躍らせたものは、赤石連峰の眺望である。大井川の溪谷が抱く廣大な暗碧色の山皺の奥へ、高く山頂をのぞかせてゐる。黝灰色な峻豪、右手から藍黑色の青薙山を限り、左へ、東岳(地藏岳)、荒川岳、赤石岳、聖岳。それへ重なるやうに、伊谷澤ノ頭(二四三八m)の上へ上河内岳。ナマリ段(二一一二・二二m)の上へ茶臼岳が、轟々と聳え立ち、そして以下、大無間山、小無間山の近く逼る大きな藍黑色の山容にかくれてゐた。なほ左方には鶴ノ天(一九九〇・三m)朝日岳、前黒法師岳等の黒木立が鎧ふ山嶺が続いてゐた。それは南アルプスへ入る南の門戸であり大玄關でもある。山岳巡禮者は先づ此處で大井川の溪谷が有する秘奥の寸

り、白い糸などが張られてゐるのもあつた。焼畑は山民が常に自然と戦ふ辛辣な生計を表示してゐる生活の様式である。朝鮮の火田、白山々麓の焼畑等の外、かうした仕事は現在本邦の何處の邊でなほ行はれてゐるか知らぬが、南アルプスの山間に於いては野呂川の奥の西山と遠山川と大井川の奥、井川とに觀るのみである。それは未開な山村に遺る原始的農耕の一方法であつて、山の斜面を區劃して樹木を伐り倒し、これに高所から火をかけて、低所へ向つて焼く、火力は山の斜面を下より上へ延びたがるもの故、その仕事は慣れないと仲々難かしい。往々失火して隣接の山林を焼く事がある。

拾遺和歌集卷十六の藤原長能の歌に、こんくうち侍りける時畑焼きけるを見てよみ侍りける

片山に畑やくをのこかの見ゆる

み山ざくらはよきて畑やけ

灰の残存した耕地は掘り返してそれに種子を播けば、別に肥料は施さずとも數年間は相當の收穫を得る事が出来る。耕土の地味が甚だしく瘠せてくれば

緒に觸れて絶大な驚異を感じ、持參した鍬を持つて確かりと自然の扉を開いて行かねばならなかつた。地質學上からも峠は南アルプスがその大部分を占むる秩父古生層である。第四紀新層の安倍川溪は、牛妻邊から中生層に變り、下落合からは全く古生層に領有されてゐた。

佇む事三十分、雲は湧いて何時か奥山を掩ふてきた。十一時二十分。井川の溪へ峠を降る。路傍のキキョウ、オミナヘシ、ヤマアザミ、マツムシサウ、クズ、カワラナデシコ、セキチクなどの草花に、はなせせり、ちやばせせり、もんしろてふ、やまきてふ、それに、うらぎんへうもんでふなどが澤山寄つてゐる。みすじてふが巧みに飛翔してくる。

小平な道は、直ぐ急勾配になつて曲りくねる。山は潤葉の矮樹が多く、草原の様な所もあつて開墾焼畑となつてゐた。山下には大井川の溪が大きく口を開けて、下底の井川の並ぶ人家が瞰下されてきた。焼畑にはアワ、ヒエ、キビ、大豆などが生えてゐて、鳥獸の害を豫防する爲め、柵が作られてあつた

これに植林して他に移り、又新たに焼畑を作るのである。

井川村誌に現れた「一般農業經營法」を其のまゝ左に掲出してみよう。

焼畑と切替畑

井川村ハ、田畑ニ乏シキ山村ニシテ、少許通常田畑ニ穀作草肥式一耕種ヲ施スノ他ハ、春秋ノ兩季ニ就テ一般林野ニ火入ヲナシ、廣茫タル切替畑式焼畑ヲ造リ、穀菜ヲ栽培シテ日常生活ニ於ケル唯一ノ資料トナス。今實際經營ノ模様ヲ記スナレバ、先ヅ村落ヲ距ル一、二里内外ノ林野、若クハ人跡遠キ六、七里以上ノ山奥ニ入り鬱叢タル林野ノ伐採ヲナス。コレヲ藪伐リト云フ。四、五月及八、九月ノ頃ニ至レバ、夕刻ヨリ前記伐採物ニ火入レヲナシテ焼畑ヲ造リ、春季ニ於テハ稗粟黍芋大小豆等、秋季ニハ蕎麥ヲ作付ケシテ最モ粗放ナル耕種ヲナシ、附近ニ小屋ヲ造リ、毎年四月上旬ヨリ十一月初旬ニ至

ルマデハ自家ノ門戸ヲ閉鎖シ、一家ヲ擧ゲテ之ニ移リ、作物ノ管理ニ従事スルヲ常トス。従ツテ之等ノ農民ハ、年中ノ三分ノ二ヲ山小屋生活ニ費スニ至ル。而シテ一二年乃至三ヶ年間ノ耕種ヲ終レバ、或ハ殖採シ、若クハ放任シテ他ノ林野ニ移リ、再ビ切替畑式ヲ繰リ返ヘス。一戸當リ三町五反歩ヨリ二反歩ヲ耕作ス。云々。

新しい焼畑の傍らの藪から一羽の山鳥が羽音高く飛び上つた。十一時五十分。大井川の東岸岩崎方面への道が右に岐れてゐた。川の流域は脚下の山腹にかくされて見えず瀬の音さへ聞えぬが、井川の部落は近く眼前に見えて、山の根の二段となる廣い河段丘の上に、樹立を取りまぜて多くの人家が群集してゐた。中に小學校の建物が大きく眼立つ背後の山際には、寺院らしい家屋も眺められた。峠の降りには夕陽に照りつけられて暑かつた。それでも少しく風が吹いて、路傍のス、キの穂を左右になびかせる。

一叢の杉木立の下に水が流れてゐた。峠の旅人の休息所である。此處では大井川の流れが嵐の様に響いてきた。

葉の黄ばんだキビ畑から道は急勾配になり、ジクザツクの降りをつゞけて、つひに川畔へ辿り着く。東岸は岸壁をなし簡単な長い釣橋が西へ、對岸の井川の村の入口へ懸つてゐる。十二時二十分。

ゆるゆらと揺れる此の釣橋を渡つた。大井川の流れば川一杯に灰白い濁水を漲らしてゐる。釣橋の袂に橋本屋旅館があつた。登山期は過ぎてゐるし伐採人夫が川狩しつゝ島田へ下降する時期にも早いので旅舎は閑散なものである。

村家へ入つて、役場や小學校への通路と別れ、右に逸れ、里落の右側を右左に縫つて、田代へ向つて急いだ。

三田代

井川村は戸數約四百戸、大井川上流最奥、十數里

の地籍を擁し、南アルプスの峻嶺は殆んど此の間に聚められてゐるかの觀がある。

戸數に比して山林畑地の面積は非常に多く、生産物としては、木材を第一位とし、茶、椎茸、木炭、生繭、山葵等がその主なるものである。

井川の部落は約二百戸の村落をなし、村役場、郵便局、旅舎に大西屋、橋本屋他二三軒在り。千頭、小長井以奥に於ける樞要地であるが、杉皮で葺かれた家根、小石の多い傾斜道、山村の閑寂な情景など掩ふ事は出来なかつた。

平野への交通は、溪の下流に向つて島田町へと、大日峠を安倍川の溪へ出て静岡へ向ふのとの僅か二條である。

前者は接岨峽の沿線に小さな峠を幾つか上下し、流域を絡んで優に二日間を要し、大井川鐵道が金谷から千頭まで夜通しても、なほ一日には少しく難路である。

後者は一日の行程である。早朝静岡を出立すれば井川或は田代川まで、其の日の夕刻までに着く事が

出来る。

木材を流下する關係から、島田への往復も少くはないが、通常はその險路を執らずして、専ら、上下二里と稱する大日峠を、村民も旅人も越えてゐる。物資も又みな此の道から供給されてゐる。口坂本が井川よりの植民地であるとしても、あれだけの天然の區劃を無視して玉川村へ屬せしめない事は、峠としての掣肘を受ける外に、其の大部分が村の耕地又は村有として多くの親縁を抱かれてゐる關係がありはしないかのやうに考へられる。

井川の村家のクワ、モロコシ、キビ畑などの間を抜けて、狹路を田代への通路へ出る。そして、それを進む。その路は小廣く、平であつた。杉林の中などを通る。大井川右岸の高所で、右手脚下に濁水が渦巻いて流れ、磧に流木の散亂してゐるのを俯瞰する。

山の鼻を左に廻れば、對岸に岩崎の人家が見えて長く細い釣橋の一條がアナ澤の小流れに向つて繋がれてあつた。右手はアツラ澤ノ頭(一五一三・四m)

から笹山（一七六三・二m）邊へかけてなだらかな
潤葉樹の頂稜を仰ぎ、奥入りに水無峠（二〇七五・
五m）小ブチ澤の頭（一八〇七・七m）書雜段（二
一〇五・四m）等藍青色の深山を望み、左寄りにあ
の上河内岳が震え附くやうな崇高な山容をちらつと
觀せてゐる。が、空には雲が多かつた。明日の天氣
は氣遣はれる。但し天候を餘りに懸念してゐてはと
ても奥山へ入ることは不可能である。井川から約一
時間にして中山、戸數十八戸、對岸は上坂本の里落
である。その先の中山澤には大きな瀧がかゝつて
ゐて、橋欄から下へ瞰下する事が出来た。水音が高
く溪間の潤葉樹をゆるがせてゐる。溪を渡つた處に
ロクロの工場が在つて、水力を利用し、静岡の雨傘
の頭（ロクロ）を盛んに拵らへてゐた。

かまきりさん何處へ行く、

向ふのお山へ草刈りに……

でもあるまいが、腹の大きなかまきりが、のたり
のたりと足元の、小石の多い道を横切つて行つた。
路傍のイタドリへ美しい女郎蜘蛛が巧みな網を張

つてゐる。私は不圖した徒ら氣から指の先きで彼女
の背中を突いた。と、蜘蛛は其の儘、此處ぞとばか
りに彼女の巢をゆさ／＼上下に揺り動かした。他の
蜘蛛類の様に直ぐには逃げ去らない。振り返つて見
れば、蜘蛛はまだ揺つてゐる。

ジヨロウグモ

(Nephila Clavata I. Koch) 眞正蜘蛛目、黄金蛛
科。體は低平、稍々細長く、歩脚甚しく細長、
腹部上面は黄色に青黒帯を有し、側面後方には
紅き斑紋あり、本州以南及び朝鮮支那印度に分
布する。

大島の部落へ着く。上坂本の少しく北へ百三十間
もある長く細い釣橋が懸つてゐた。此の邊の河原は
甚だ幅廣く、水は網流してゐる。川の中程に、草木
の生えた岩が島の如く取り残されてあつた。大島は
二十二戸、大島澤の釣橋を渡ると又人家が二三軒あ
つて、その村端の家が田代口の南アルプス案内者

瀧浪要太郎方である。明朝、田代出發、井川奥入り
の打合せをして此處を過ぎる。左に氏神の社が見え
てゐた。道の端の萱草をカサコソと音させて逃げて
ゆく縞蛇。又カサコソとする。しまへびかと思れば
それはかなへびだつた。

道は河原に沿ふてぐつと左へ鍵の手に曲る。と、
その先きへ田代の村家が現れて來た。小無間山より
東南に派出する山脚の、東面山麓のテレースに發達
した村家、駿州方面唯一の登山口、田代は眼の前に
あつた。川沿ひの、高い岨道をぐるりと巡つて行く
と、新しく家を建てゝゐる大工の槌の音を聞いて、
荒れた桑畑から村家へ入る。午後二時半。空には雲
をかすめて岩燕の群れが飛んでゐた。

約五十戸の村家、板葺屋根の家と家との間を分け
て行けば、その略々中央に在る舊知の旅舎、瀧浪益
吉（ますや）方へ着く。

先きに通知してあつたので、快く下の奥座敷へ招
じられたが、旅装を取ると、陽は未だ高いので早速
村道を散策に出掛けた。

藍色ペンキ塗りの小學校も、物賣る店も、そのこの
愛相の良い主婦も、村端れの清い泉も、その前にあ
る鍛冶屋の、焼鐵を打つ槌の音も、みなそれ等は舊
知の變らぬ姿である。只だ直ぐ何となく濕つぽい空
氣が何處ともなく淡紫にこめてゐる。

井川奥の廣大な山林は、田代の部落有から、明治
十五年或る木材會社へ賣却し、それが大倉組の手に
移つて今日に到つてゐるが、二十年程前、東海紙料
が伐採本部を田代に設けた際はこの山村は一時想は
ぬ殷賑を見せたらしい、そして三味線や唄の聲が村
のそこ此處に景氣よく聞えた。部落共有によくある
意見の不統一か、不明か、功を急ぐ爲めか、資金に
恵まれぬ山村民は、一時の利得に眩惑されてしまつ
たらしい。併し乍らそれに依つて生活の活路を見出
し、その轉換を計る事はつひに成し得ず、加ふるに
逆縁の殷賑に遇つて、却つてその持てるものすべ
てを奪はれ、産業も興らず道路も開けず、實を結ば
ぬ花は華やかに咲いて梢を離れた。大正七年、この
フアランジの人々は、その行詰まつた生活を又も打

開すべく、田代大島七十餘戸が一戸當り千餘圓程の配り方で、島田の加藤氏に残る所有の大部分を移してしまつた。

大きな幻滅である。山を離れて彼等は何處へ往かうとするか。一陣の木枯しは、全山の霜葉をも一夜の内に吹き落してゆく。

山の 水車

森林は水源涵養地として重大な自然の任務があつた。

蒼黒く天然の密林で掩はれてゐる山は、一帯に村の所有として、久しく其の存在を誇つてゐた。村の長百姓の家に生れ、村民の代表者である儀十郎、初太郎、宇市郎の三人は、行詰まつた彼等の村の財政を、どうして立て直し、どうして切り抜けて行つたなら良いかに、日夜心膽を碎くのであつた。

村有として、眼に餘る程の廣大な森林は待つてゐる。併し乍らそれを伐採し搬出し、財貨に

此の賣却代金數萬圓は、固より村自治の爲め天晴れ有効に、其の發展と福利とを計る可き大切な資金の筈であつた。

所が平常見慣れぬ大金にすつかり幻惑された憐れむべき村民は、個々の所有權を楯に、その金額をどうしても各々に分割しなければ承知しなかつた。

儀十、初太、宇市の三人も、表向きはともかく、内心に於ては矢張りその賛成者のうちであつた。

纏めて置けば可成り相當な資力であるが、分散してしまへば他愛もない。殊に資金は流動物である。溪流の水に従ふ如く、高きより低きに山村を出て、それ等は漸時都會平野の方へ向つて流れ出した。

儀十、初太、宇市の三人が、よく山村の茅葺の自家を留守にして、都市の紅い燈に親しんだのはそれからである。

一度覺えた甘い味は仲々に忘れられるもので

換へるには多大の資金を要さなければならぬ。

それだけの資金を得るには、礪礪の村の土地は狭く、耕地は瘠せて、アワ、キビ、ヒエ、大豆、ソバ、モロコシ、甘藷などの他にはめぼしい生産物とでもなく、村債を仰いで調節しようとしても、一ヶ村擧つた所で幾何程の借入も出來得る筈はなく、金利は高くして、又金融界に於ては、貧寒な一山村の信用位はまるで眼中に置いてゐなかつた。

地方町村の自治を監督し、その良き發達を指導促進する上級官廳は、積極的に救済する方法は講せずして徒らに消極堅實であらん事を強要し、此の小山村の借財を阻止して許さない。果ては手も足も出せなくなつた彼等三人は、役場の圍爐裡端に陽にやけた額を集めて協議し、遂ひに自村の所有する廣大な山林を、かねがね、都會の大資本を持つて潜行的に運動してゐた或る山林會社へ、いさぎよく賣拂つてしまふこととした。

はない。脂粉の匂ひを追ふ事は、山の中で熊や野鹿の跡を逐ふより、確かに面白いことにちがひはなかつた。

彼等は遂ひに一家を擧げて、荒廢した村を後に、落武者の如く、都會平野へ遁れて行つた。それは山よりも「都は招く」であるらしかつた。

村の所有であつた山林は、間もなく大規模の伐採が始まつて、見る見る原始的な森林は、その美しい影を失つていつた。

森林が伐採されると同時に、村家を流れる小さな溪流の水は眼立つて減つてきた。

この溪流には、村人が使ふ一軒の小さな水車小屋が建てられて在つた。

今まで激しく活動して村人の穀物を處理してゐた此の水車は、溪流の水の減少すると共に水車の巡りは甚だ緩慢となつて、世相と事物を諷刺するやうに、時々車はキシミ乍ら滑轉するのであつた。

その水車の廻る音を聞けば、恰も村を去つて

行つた彼等代表三人の名を頻りに呼び戻そうと
してゐるものの如くである。

即ち、ギジュー(車のキシム音) ハツタハツ
タハツタハツタ(水を受けて滑轉) ウイチ、ウ
イチ(杵の石臼を掲ぐ音)

ギヂュー、ハツタくくくく
ウイチ、ウイチ……と聞えるのであつた。

薄冷たい風に襟元を撫でられて、不圖幻想から醒
むれば、雲の切れ目から夕べの陽差しが、三尺峠の
頂きにチラ／＼と輝いた。私は狭い村道を旅舎の方
へ向つて歸るのであつた。

夜は瀧浪富士太郎君が來訪され、案内者要太郎君
も見え、主人も加はつて山の話に遅くまで時を過ご
した。

四 高瀬島

大井川の延長四十五里の内、田代より以南の下流

各々林道は延長されて、この大井川上流の景勝をさ
ぐり、秘奥の大森林に深く潜りこまうとするには、
最早何の不便も不自由をも感じないまでに到つた。

今度の山旅の荷は全く省略し、簡単な身仕度を整
へて、ますやの主人と話してゐる時、大島からポー
タアが見えたので、田代を後に大井川の最奥をさし
て出發する。午前七時であつた。九月中旬の、爽や
かに晴れ渡つた日の朝だ。

田代の村家を出端れて、氏神諏訪神社の入口を過
ぎ、小河内への道を進む。その邊は一寸平になつて
ゐる。畑の荒地のやうな處で、小河内の里落への道
と岐れて左の細い道へ入る。

山の鼻を左に曲ると、道は大井川の右岸、本流に
岨立つ斷崖の上を通じ、左手對岸に小河内の人家が
眺められた。

板葺屋根の山家めいた、傾斜地に存在する此の村
は、戸數約四十戸。流域をさし挟んでいくらも隔た
ない田代が信州系であるに反して、此處の人々が甲
州系の移住民である事は面白い現象である。

約二十里の流域は、部落各所に散在或は聚集して、
とも角も交通と文化の餘命を見せてゐる。田代以北
の上流奥地は、人煙稀れにして人の住む部落とは
全くなく、只だ峻険を競ふ大山岳と、これを巡らす
深い大きな溪谷と、それを掩ふ鬱蒼たる大森林とで
占有されてゐる神韻極秘の幽境であつた。
徳川時代にあつても、駿府を守る背後の備へとし
て、此の奥地へは滅多には何人の手も入れさせな
かつたことが記録に残つてゐる。
それが近年になつて開放され、これに大規模な伐
採事業が行はれるやうになつてからは、全く開發さ
れて來た觀がある。從來此の沿岸の歩道は、登降の
み多くして、細く、峻しく、尠なからぬ困難を経験
されたものであつたが、今は其の當時に比べて、比
較にならぬ立派な林道が通ずる様になり、沿岸の處
處川狩人夫の使用に當つた小屋や、夏季は高瀬島、
沼平、樺島、二軒小屋等には宿泊の便宜さへ得られ
るやうになつた。
そして更に東俣は小廣河原まで、西俣は慣合ひ迄

金鑛癡滅

大井川の上流沿岸に於ける移殖民の遺跡を按
ずるに、小河内は、略々天正年間の頃より始ま
つてゐる。

戰國時代の勁雄、武田信玄が、甲州に據つて
覇を唱へるに就いては、彼れの非凡な才略を以
つて能くその郷土を治め、民を統べ、多くの兵
を養ひ、巧みに之を用ゐ、そして東奔西走、席
の暖まる間も無い程の苦難と辛慘を嘗めて隣國
の侵略と經營に當つたのは周知の事であるが、
彼れが自立した天文十年より、陣没する天正元
年まで約三十三年間に、狭少鄙僻の甲州の地を
根據として、なほ且つ信濃、駿河、遠江、三河、
美濃、飛驒、越中、上野の各地に亘る廣大な版
圖を領有するに到つた事は、眞に稀有の事實で
ある。

信玄が民政に就いては、極めて用意周到に、
法度、職制、租税、賦役、貨幣、量衡、等の諸

制度の定めや、勸業、治土木、鑛業等の諸事業に、並々ならぬ才腕を示してゐる上に、加へて彼れが得意とする軍略は、孫子の兵法に範をとり、天文十二年、ポルトガル人より所謂種子ヶ島銃が傳來してからは、いち早くそれを武器に採用するなど、すべて他の意表に出た抜け目ない策謀が、能く彼れの強大を誘致したに違ひない。

然し乍ら、信玄が餘り豊饒ではない山峽の狭小な甲州平原を土臺として其の郷土人民の財力の涸渇を招致せず、而も常に約一箇師團に餘る軍兵を動かして、大小數十度の交戦に堪へ、なほ榮譽の勝利をかち得て居た事は財政上いさゝか不可思議に思はれる。

それは何が故であつたであらうか。これは信玄の奨励せる鑛業、甲州各地の金坑發掘に依る天恵の助力の預つてゐる事に着眼しなければならぬやうに考へられる。

當時國內の金山として擧げられるものは左の

本栖金山——西八代郡上九一色村、龍ヶ岳の山麓に在り、當時は本栖千軒の名があつたと云ふ。

湯之奥金山——同郡富里村字湯之奥、信玄の隠し湯として外傷に特効ありとせられてゐる下部の湯の奥入りの金山嶺（一九四五・四m）に在る。

早川入諸金山——早川沿岸には多く、南巨摩郡三里村に、大金山を始めとして西之宮、甲景甲子、奥間夫、黒ガレの諸金坑が在る。

雨畑金山——同郡硯島村奥澤の入りと奥澤金坑、雨畑川の源流遠澤には長畑金山が在る。

隣國の諸金坑——其他武田信玄は、彼れの攻略した隣國の産金地にまで手を染めてゐた。即ち駿州安借川の最奥に在る三河内金山、大井川上流の梅地金坑、飛驒北部の金鑛などがそれである。

信玄はこれらの金鑛より採掘した金塊をもつて甲州獨特の金貨幣「甲金」を鑄造して自國內の

如くであつた。

黒川金山——東山梨郡神金村萩原山に屬し、丹波川の上流に注ぐ黒川谷の奥、鷄冠山の尾根續きに在る。盛んな時は、黒川千軒、丹波千軒と言はれ、現に千軒平、ちよろろどうろ、おいらん淵などの遺跡を存してゐる。

午王院平金坑——同上萩原山三之瀬の奥に在る。往時午莠金を採掘した所であると謂はれ、午莠金の訛つた午王院平の地名と、現に堅坑の跡を存してゐる。

増富金山——北巨摩郡増富村字金山、ラジウム鑛泉より約一里半の奥、金峰山の西麓に在る。現在四軒の農家があり、その一軒（有井益次郎）の家には、當時治金用とした石臼が保存されてゐる。

御座石金山——同郡丹野村字御座石、即ち小武川の奥燕頭山の下に在る。曾つては御座石千軒の名があり、今其處には一軒の鑛泉が山の湯宿らしく建つてゐる。

用に供し、各軍用金にも當てた。徳川時代になつてからも幕府は信玄の舊制を存置せしめ、「甲金」は引續いて鑄造されたが、その形式は段々改變されて、總計百三十六種ばかりもあり、信玄時代の鑄造である大鼓判は丸く、重さ一匁、表に桐の紋と周遍に七つの星が有つた。金産は松木、山下、志村、野中の四家で引受け、徳川時代となつてからは、松木家のみが獨り残るやうになつたので、現今見る「甲金」には松木の刻印が多く、そして元祿以後は其の質もいたく低下した。

武田家の滅後、徳川氏は信玄の發見にかゝるこれら諸金鑛の遺利に着眼し、武田の遺臣大久保長安を起用して金山奉行とし、採掘をさせた事もあつたが、其の後何時ともなく廢してしまつた。

武田家の盛時、殊にこれに最も大きな財力的支援を與へたものは、黒川と雨畑入りの金山であつたらしい。

適確な事は解からないが、信玄の父信虎の晩年に於て、國內の年貢徴税は約一千七百五十貫であるのに、金の産額は三千五百貫に及んでゐたと云ふ。

其の後の消長は推して知るべしで、年々その増率収益は莫大な額であつたであらう。

此の頃は各地の諸豪雄は皆かやうな天恵にあやか事ひたすら勤めた。本邦全土の有名な諸鑛山の多くは、當時に於て既に發見採掘されてゐたものが多いのである。

鑛夫はこれを間夫と稱してゐた。信玄は、曩には三州長篠城の攻略について、後には天正元年二月遠州野田城の奪取の際、この間夫を使つて坑道を穿ち、もつて彼等の水堀りを切り鑿いた。今日に於ける要塞戦の端緒をなした事になる。

史家のまだ筆にしない所であるが、鑛山の採掘や冶金に就いては、敵捕虜、囚人、土民のある者等を拘束して強制的にこれに當らしめ、禁

黒川金山の金山衆は、鹽山町に近い於曾、奥野田村の熊野邊の住民などをもつて服役せしめ盛んに採掘したものであつたが、鑛脈の衰退と共に、遂に廢止の運命に逢着しなければならなかつた。この鑛山が廢止せられるに就いて急に其の處置に困惑したのは、今まで其處に養はれてゐた遊女等の一團である。

間夫達の勤勞を促し、脱走を防ぐべく政略的に鑛山に置かれた彼女等は、今や全く有害無用の品物、採鑛具同様に過ぎなくなつた。

熟慮の結果、鑛山の或者等は、こゝに鑛山祭を企てた。

それは黒川谷に近い丹波川の、兩岸絶壁をなして流れは物凄く、澗潭を作る所、其處に藤蔓を以つて見事な棧橋を拵らへ、有り丈けの美服を着飾つた遊女等を誘ふて橋の上に座臥せしめ面白可笑しく飲めや唄への大騒ぎを演じたあげく、彼女等の油斷を見澄まして俄然一片の合圖と共に、棧橋を支へてゐた頼みの綱を一度にど

足の一手段としては、遊廓様の設置まで計られてゐた事は、つとに口碑の傳ふる所である。元々餘り産額の思はしくなかつた鑛坑も多かつたらしい。

かくして遂に、武田家の軍用金として最も重きをなした産金額に、衰微を來したとすれば、眞に一大事である。昔も今も變りはなく、軍資の充實は正に戦勝の母だからだ。

天然に埋藏せられてゐる金鑛の消長が、元龜天正の頃、甲州武田家の武運の興亡に甚だ隠然たる或る力強い一搏の響きを與へたであらうことは、更に深く追想してみる必要があるやうに思ふ。

小河内の起因

天正の末期、遂に黒川と遠澤の金山が、武田家の未路につながらる鑛の如く廢滅に歸したが、其の時この二つの鑛山には、かうした悲劇と分散とがあつた。

つと切つて落した。

無心な遊女等は、無慘にも、或は岩に落ちて碎け、或は深淵に沈んで溺れてしまつた。

世は刈菰と亂るゝ戰國の、殺伐を何とも思はない時代である。

幽翠な丹波川溪谷の溪底に、岩角を洗ふ山水の瀨の音は物寂しく、路傍の鳴岩に無限の恨みを込めて呼喊の如く響き互る。今、其處を花魁淵と人呼んで當時の傳へを物語つてゐる。

「日蓮年譜」に、文久六年上人是地遊化、造立精舎、號永久山法蓮寺とあり、古くからの産金地であつた事が見えてゐる。但し「甲斐國志」の推測するその衰微は慶長年間以後ではなかつたらしい。寺は暫らくして又赤尾へ移轉された。

次に、遠澤の金山は、盛時はあの山間極僻の地に在り乍ら、立野千軒、廣島千軒など、稱し、矢張り遊廓様の設置までされて、仲々の有勢であつた。

雨畑川の奥入りには今日でも、往時その金鑛

の盛時の名残りを止めて、細野、室草里、長畑などと、點々三、四軒づゝの里落が、辛くも營まれてゐる。

ところが、この鑛山が漸時衰微を來した爲めに、食を離れた住民等は、思ひ念ひの方面にその活路を求めて四散したが、その一部は水の溢れるが如く、水無峠（二〇七五・五m）の山稜を超えて、大井川の溪に流れ込み、そして先づ東河内や小河内川の沿岸へ移住し、漸時下流へ集まつて、井川最奥の里落、小河内の村家を創設するに到つたのである。

田代の起因

之に反し、田代の沿革は、その濫觴を遠く南北朝の頃に求めねばならぬ。

往時、京地の公達、或は由緒ある武士の一族等が叛亂を避けて、山間奥地に遁世した事歴は今各地の山中僻村に於てよく見聞する所であるが、信州下伊那郡大河原の山村に於て、南朝の

で一日の行程である。

河身は兩岸より迫る山脚に挟まれて、亂れた絲の如く婉曲し、又幾つもの字を描いてゐる。道もそれに連れて、山の鼻を無數にうねつてゆく。

左手の山腹より注流するコデ澤の橋、二十五分、イズハ澤の釣橋、同三十五分なども過ぎる。かうした小溪では、俄かに雨の様な水音があたりの潤葉の密樹を震はせてザーツと響き渡つた。

河身が殆んど圓形に曲流する岬角、桃ノ木島は頸部を横切つて行く。右手に水無山から引かれた山稜の突端、ホウノタワ（一四一〇・五）が潤葉樹と草地に覆はれて三稜形を見せてゐる。

八時、戸山澤の釣橋を渡る。此の橋畔に傳左衛門岩と呼ぶ大石が在る。昔時、耕地の山小屋に忍び入つて食を求め、そして其の岩の下に潜入してゐたが身内の者より頻りに訓されて悔悟し、大井川へ投身自殺を遂げたと云ふ無智な弱い男の因縁から命名したのだそうである。

戸山澤の奥には小無間山が仰がれた。道は二つ、

一派が宗良親王を擁し、刻苦慘憺たる經營の跡は、史實が明らかに之を示してゐる。

南風ついに競はず、是等の遺臣等は、山中に奥深く潜入し、廳て大聖寺平或は三伏峠を越えて樺島に植民し、なほ、伊谷、沼平、信濃俣河内の八平から田代に移住し、甲州系と井川で合し、更に下流を慕つて、梅地や寸又川の大間にまで進出していつたのである。

水の流域は、地殻の隆起に依つて完全に支配されるが、人間の生活は自然の大きな障害物をも雲の如くこえ、水草を追つて流動する。

西歐の中古代、蒙古のフン族 Huns に追はれたゲルマニ族 Germans が北方より南方へ遷移して行つた史記に少しく似通つた點が有るやうにも想はれる。小河内からは、井川嶺の北端、三尺峠（牛首、一五四六m）を越えて、安倍川溪最奥の里落梅ヶ島新田や、それから梅ヶ島温泉安倍峠を経て甲州の身延、或は成島峠より富士川畔の南部、内船等に到る事が出来る。温泉ま

くの字を描いて登り、河身に沿ふて垂直に近い急斜をなして、約六〇m位の高所を通じてゐた。大井川の濁流を脚下に俯瞰すれば、一寸物凄じ感じがしないでもない。

水は太く、重々しく流れてゆくが、下流のゆるくうねつた直ぐ先端は、山脚にわけもなく吸ひ込まれてゐる。

山腹について右に曲る邊に、蛇ノ骨澤と云ふのが少量の水を落してゐた。

かへり見れば、小無間山頂が黒く屹ち、大きな山の斜面や稜線が層々重なり合つて、あたりの溪を立ち籠めてゐる。

突入した山腹を捲いてゆくに、道は約一メートルの幅員を以つて、殆んど勾配がなく、歩行には甚だ樂である。

やゝ廣い山懷ろを通るに、鐵砲崩澤、ヤマコ澤、湯澤などと云ふ極く少量の流れが左手から落ちてゐる。新崩れのナギを過ぎ、くの字の登りを一つすれば、カレイ澤の釣橋へ出た。九時十分。次いで日向

カレイ澤を渡る。

沿道は潤葉樹多く、カヘデ、シデ、サワシバ、ケヤキ、ズサ、コハゼ、カシ、トチ、それにイヌガヤ、カヤなどの樹も見られる。一群れの山の小鳥が梢を渡つて、小春の唄を聞かせてくれる。四十雀に小雀柄長に日雀、菊戴は小さな鳥だ。しまげらなんども雑つてゐる。

私には鳴き聲でそれが解かる。ピン〜カラ〜チイ〜、ジリイ〜ギイ〜……賑やかな事だ。

柄長

(Aeginthals Caudatus triirigatus) 燕雀目、四十雀科。漂鳥。コガラ位の小さな鳥で、羽毛柔軟、白色多く、眼から肩へ双方一條づゝの黒線あり。少しく黒褐、淡赤色等雜り、尾は黒白雜つて著しく長い。嘴小さく、脚と共に黒い。

此の鳥の營巢は極めて巧妙である。キゴケ其他の地衣類を蜘蛛の絲で美麗に圓形に綴り、横に小さな穴を開けて出入する。白い豌豆位の卵

を十二、三個む。

コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジウカラ、エナガ、キクイタダキなどと雜り群れて漂泊し、松柏類の實、小虫等をあさる。

菊戴

(Regulus regulus japonensis Halkston) 燕雀目、菊戴科。漂鳥。本邦鳥類中最小の美しき可憐な鳥である。背は青綠色、腹は淡黄褐色、嘴、脚は褐色、頭上には黒條と黄色にて恰も菊花を戴けるが如き色彩をなす故、この名がある。翼短く、性や鈍の如く見える。

くげら

(Yungipicus Kizuki nippon Kuroda) 攀禽目、啄木鳥科(一名縞木啄)。漂鳥。形オモホズ位。頭、背はやゝ黒い地に白の縞があり、腰は白地に細い黒の縞が飛んでゐる。ギーイと鳴く。

長ザウリと云ふ耕地の一軒家の對岸は小淵澤で、其處にスガ山と呼ぶ耕地の、二軒の人家が見えてゐた。

山脚の鼻を迂廻する。積はやゝ廣く、その先きの東河内が合流する地點に、桑の木島の人夫小屋が數棟小さく眺められた。晩秋、伐採木を流下する際、川狩人夫等の宿營する小屋である。直ぐ脚下の對岸はモスケの耕地跡で、今は山畑の形跡さへないが、其處へ向つて低く細い釣橋が架つてゐた。

藍黒く針葉樹に纏はれた青雜段(二一〇五・四m)や、青雜山を正面に仰ぐ。

桑ノ木島に近づいて行けば、無住と考へてゐた對岸の其處に、留守番でも居るのか、犬の吠えるのが聞える。

イヌコロ澤ノ頭(一八六八・八m)から、東河内と、本流の接觸地へ差し延ばした山脚の先端は、山骨長く瘠せ細り、乏しく樹木こそはえてゐるが、鋸の齒よりも荒くられて坼立つてゐた。道は此の邊でくの字をなして可成り降る。十時十

五分、高瀬島に着く。小無間山から北東に延ばした山稜の低下した突端が其處である。狭い窮屈な山の端に休茶屋が建つてゐて、對岸に落ちる水の少ない二段の瀧の眺めから瀧見亭と稱してゐた。その下には小平地に人夫小屋が數棟並んでゐた。

五下ノ島

瀧見亭から一寸降ると其處に釣橋が架つてゐて、始めて河流を左岸に越えた。

此のあたり、兩岸は、蒼味を帯びた黝灰色の低い岩崖をなし、屏風を開いたやうなその岩の連續が、如何にも溪谷らしい景觀を見せてゐる。イヌコロ澤のほとりまでを、大井長壽と稱すやうになつたが、それは春から夏へかけての流れの情景である。伐木を流す爲めのテッポウをかけたたり、雨後の増水に遭つては、水の色も、流れの状も、惜しくも長壽の風情にいさゝか遠かつた。

明神谷が對岸に注流してゐる。その水の色は清く

澄んで美しい。道は棧道と釣橋で岩崖をへづり、くの字に少しく登る。

簡単な釣橋が對岸に張られて、一軒家が見えてゐる。ハネンサウリと呼んで、アワやヒエの耕作と椎茸の栽培を営んでゐる所である。

イヌコロ澤、十一時。その先きから釣橋を、元の右岸へ渡り返した。大井川奥の釣橋はいづれも踏板一枚を縦に並べ渡したもので、釣橋の上で双方から行き違ふ事は困難である。釣橋を渡つてから、一寸上つて左に捲けば、下ンサウリである。焼畑の耕地はあるが、一軒の家はその裏にかくれてゐて道からは見えない。

サウリとは、草里、曾利、澤里など、書き、日本書紀、天孫降臨の章に曾富理能耶麻とあつて、古語より出た焼畑、墾田を意味してゐる。四文章履でも霜の草里でもない。下ノ島の高所にある上ンサウリに對して呼ぶ地名である。

此處で溪の奥に眸を放てば、畑薙山の上へ、茶臼

人夫小屋の前には檜の苗畑があつた。苗畑の周囲には、長さ二尺位の篠竹の先きに、板の小切れを差して雨よけとし、その下に女の髪の毛を黒く焼いたのを挟んで、幾本となく立て、あつた。大日峠の耕地でも見かけたものであるが、それは焼いた毛髪の異臭をもつて、野獸を防禦する設備である。かうした山中では、アワやヒエの實のる九月中旬より十月上旬頃までは、よく野猪が出て来て耕地を荒す事が珍らしくない。

野猪

(Sus leucomystax leucomystax. Temminck) 有蹄

目(偶蹄亞目) 不反芻類、野猪科。家畜の豚に似て淡黒褐色の剛毛を生じ、牡の犬齒は長き牙をなして現る。一月頃交尾し、四、五月頃四、五頭の仔を分娩する。幼期は背に縦線がある。晝は山間に潜伏し、夜出で、嘴にて地面を掘り、小動物、穀斗科の種子、甘藷、豆類等を好食する。肉は山鯨と稱して珍重する。

岳、その右に上河内岳の頂稜、左に仁田岳の肩あたりがいづれも黝灰赫色に高く浪打つて、全神経の一時に緊張するやうな驚異を覺える。

中尾の耕地から、クズレ澤の小流れを越え、田代澤の釣橋を渡れば下ノ島へ着く。十一時三十五分。此處で晝食をとつた。

下ノ島には川狩人夫の小屋、十間餘も長い立派な平家建が二軒並び、他に一軒の作場小屋も建つてゐた。前者は、島田の丸カ組、加藤伐探部の建物で、中山澤以北紅葉澤までに到る大井川西岸の山林を、大正六、七年頃田代の部落有より買収し、其の事業用の爲め、桑ノ木島と共に建てたものである。

林道も、澤ン渡の釣橋まではこの丸カ組が開鑿し以奥を東海紙料會社が請負つてゐる。その路は別けても勾配がなく、よく手が行き届いてゐた。

下ノ島には、小流れがあつて、多くの山葵が作られてゐたが、これは川根以北に於ける最大な山葵田であつて、年々一千圓餘の取入を得てゐるものだと

作場小屋の前の畑には、アワ、ヒエ、ソバ、サ、ギ、ネギなどが少しづつ作られ、傍には南瓜の柵があつて、大きな赤い南瓜が二つ三つ見えてゐた。小屋はいづれも堅く戸を閉して何所にも人の氣はなく生き物としては、残りの南瓜の花のまるはなばちとソバの花に集るちやばせ、しじみてふ、畠に飛ぶ、くるまばつた、狭い庭を飛ぶみやまあかねとんぼ、石の上に止まつたおほやまとんぼなどである。も一つ、水の落ちる樋の下で、さわがにが理髪店を出し、自慢の銚をふるつて晝中の温氣に白い泡を盛んに出してゐる。

まるはなばち

(Bombus speciosus Smith) 膜翅目、蜜蜂科。

體は暗褐色、背は黄毛に装はれ、黒毛の一横帯あり。腹部は褐色毛に黒毛の一横帯あり。腹部は暗灰色、地中に穴を穿ち、米俵を積みたる形の育児と蜜貯藏室より成る巢を營む。

みやまあかね

(Symptetrum pedemontanum elatum. Selys) 蜻蛉目、蜻蛉科。體は雄赤色、雌黄色で翅尖に近く黄褐色の廣帯があり、七、九月頃出現する。本州四國九州に分布する。

おぼやまごんぼ

(Azuma elegans. Brauer) 同上。頭青黑色、胸青緑、腹部黒に黄帯があり。七月頃より出現、本州九州に産す。

さわがに

(Geotrupes gehani) 甲殻類、十脚目、ボタノモン科。本邦到る所の河川に棲む。

かにおちさんの傍らへ、美しいかわらひわが舞ひ降りたが、人が居たのに驚いて、猥へ屋根の上に飛び上つた。二羽で何か話してゐる。下ノ島は大井川の奥上流に於ける古い開墾地の一つである。此處に天正五年正月、社を建て、海野兄弟を祀つたといふさゝやかな八幡社が在つた。

橋龜吉) 休茶屋などを兼ねてゐた。田代、榎島間の中心點で、人夫の荷が重い場合か、或は低徊幾分で溪谷を旅行する人は、此處へ泊つて榎島へ向へば極めて樂である。

沼平から各地への距離を示せば、田代より四里十六町、高瀬島二里二町、榎島へ四里六町、中ノ宿へ二里二町。

信濃俣河内は、大きな支流の一つで、合流點の北岸に、土平の耕地と一つ家が見えてゐる。この溪谷への道は、澤の渡から別れて、寺島を過ぎ、西腰細山の山脚を巡り、土平の直ぐ奥で、吊橋に依つて左岸に渡り、八平から大ヨキ澤(一一一五mの奥)の小屋を経て、右、ガツチ河内から易老岳へ、左、中俣から百俣澤へ入つて消えてゐる。

ガツチ河内の大春木澤を仁田岳か易老岳へ、又は百俣澤からイザルケ岳、光岳へ登山せんとする時は矢平か、大ヨキ澤の小屋あたりに宿營しなければならぬ。

今こゝに信濃俣溯行の記録の二、三を擧げて見よ

此處の八幡社の縁起は、「南アルプスと其溪谷」に書いて置いた通りである。

正午、下ノ島を出た。右手に大ナギ澤を見て進む。澤草利澤には吊橋があつた。對岸にはアン澤が注いでゐる。その直ぐ先きで、道は二つに分岐し、左は寺島から腰細山の突端を迂迴して、信濃俣河内の溪奥へ通ずる道である。

本路は、一寸降つて澤ン渡の釣橋を渡り、對岸に移る。其處は粘板岩の斷崖を開鑿した路である。何處かの耕地に住む女の子二人連と遇ふ。人に遇ふ事が意外に珍らしく思はれる。

突出した山の鼻を曲る突端は、東腰細と稱して、一軒の人家と耕地が有り、對岸の寺島にも二軒の家と耕地とが見えてゐた。この邊から積は暫くの間廣く、西腰細山が低く長く、信濃俣河内をへだてゝゐる。そしてその合流する地點の東岸が沼平である。

午後一時十分、沼平に着く。東海紙料會社の立派な人夫小屋、三間半の六間平家建のものが十五棟も建ち並び、他に住宅二軒、一軒は旅舎(高砂屋、高

う。

一日田代、八平人夫小屋宿營。(伐採人夫の山小屋は山中の各所に在るが、其處の事業が終れば放任する故、數年にして壊滅に歸する事が多い。此の點は特に注意を要する) 二日、ガツチ河内、大春木澤と西澤の合流地に在る石小屋野營。三日、易老岳、仁田岳茶臼ノ池野營。四日、茶臼岳、上河内岳、南澤岳、聖平假小屋野營。五日、聖岳、大澤岳、百間洞野營、六日、赤石岳、大聖寺平、荒川岳南腹の大倉登山小舎宿營。

一日、田代、八平、ガツチ河内中俣小澤合流點の三叉野營。二日、一九〇六・二m)山稜、イザルケ岳、光岳往復、ガツチ河内の西澤水源野營。三日、聖平假小屋野營、以上。

沼平旅舎に暫く休憩して茶などを飲む。狭い庭さきに、紅いグリア、黄色いカンナ、百日草の數々が美しく花を咲かせてゐた。

一時五十分。沼平を後に、又も歩行を急がせる。

六 仲ノ宿

間もなく、左方の對岸に仁田澤が注流し、流れは廣い積に大きなくの字を描き、オウナ崩れから畑雜山を眺める。溪流の沿道は、奥上流まで殆んど潤葉樹が多く、カヘデ、モミデ、ナラ、シデ、カツラ、シラデ、ケヤキ、ブナ、サハシバ、ニレ、ハンノキ、カワグルミ、ドロブ、トチ、ヤナギ、などの類が主であつて、よく亭々として繁茂し、針葉常緑樹は、モミ、ツガ、ヒメコマツ、ゴヨウマツ、サワラ、アラ、ギ、カヤなどが雜り、中腹以上の高所に到つてツガ、コメツガ、シラビ、トウヒ、クロビの蒼黒い密林、即ち針葉喬木帯をなしてゐる。

路傍の草木としては、カハラナデシコ、マツムシサウ、ツリガネニンジン、オミナヘシ、キキヨウ、タチフウロ、ホタルブクロ、カハラマツバ、イタドリ、ヤマアザミ、サワアザミ、アキカラマツ、オトギリサウ、オトコヨモギ、ヒヨドリバナ、コマツナ

ヨモギ澤の吊橋を渡ると、間もなくカレキド澤の吊橋にかゝる。二時半。青蘆段(二一〇五・四m)から落ちる澤で、有名なカレキドの瀧は通路から近く眺められる。水音は滔々と木霊して、Uの字に穿つた岩谷へ落ちる端整な瀧である。その上の方にあるものは路からは見えなかつた。

左に、伊谷山(二四三八m)と上河内岳を仰ぐ。上河内の溪が對岸に注流してゐた。

上河内溯行の記録を記せば、一日、田代、澤ン渡、寺島、土平、積へ下りて上河内へ入り北岸の山小屋宿營。二日、上河内檜ダル、二三〇〇m水源野營。三日、上河内岳、聖平假小屋野營である。

路の傍らに大倉山林の境界標が立つてゐた。沼平より三十二町。其の先きの對岸は、伊谷の耕地である。三、四の建物が固まつて樹梢の間に見えてゐる。それは、田代の瀨浪太衛門が、彼れの長い生涯を托した所である。彼れは此處に住居してゐて、殆んど里へは出ず、夏季は耕作に勵み、冬季は狩獵をすることあつたが、多くは雪にうもれた家の中に蟄居

ギ、ワレモコウ、ヤマギク、アキノキリンサウ、オトコヘシ、サワアジサイ、其他で、それ等の花莖には多くのはなせり、ちばせり、やまとしじみ、うらぎんへうもん、いちもんじ、みすじてふなどの集り、うらぎんしじみ、ひめたては、るりたてはなども珍しくなく、各所の別天地をなす閑寂な耕地に、あさぎまだらの翩翻として飛翔してゐる有様は、まさしく天使の姿にも數ふべきものであつた。最も美しい小紫を、中尾で捕り遁がしたのは惜しい事であつた。

小 紫

(Apaturlia Schiffermiller var substituta Butler)

鱗翅目、蝶科。紫の幻色を現はす極めて美しい蝶である。翅の表面は黄褐色、前翅前縁に三つ、中央に二つの橙褐紋列し、外縁に近く後翅共に同色の紋連続し、後翅の中央になほ同色の一帯を列す。雄は光線の具合に依つて紫堇色の幻色を現はす。九州以北、朝鮮に亘りて産す。

して過してゐた。黒部峡谷の品右衛門や、上高地の嘉門治の如く、彼れは大井川溪谷の主で、その孤獨な生活から先年物故したが、日本アルプスに於ける三大世捨人の一人である。

晩年に甲州兩畑から來た老婆と同棲してゐたが、死別して老婆は再び雨畑へ歸つたと云ふ。彼れが若い時、田代の住宅へ残して來た息子は、山中の獨居を嫌つて田代に住み、居谷に在る四棟の建物は、現今その儘たちくされに放任されてゐる。

路は赤崩澤の崩壊を経て、對岸の岩壁を見つゝ、山の鼻を突切る。赤崩澤には一條の瀧がかゝつてゐた。

路はその先きで右に迂廻して、四度目の釣橋で西岸の剃石島へ渡る。そして間もなく又上剃石の釣橋で東岸へ渡り返す。この長大な百足のやうな二つの釣橋の中間へ、青蘆山の西斜面をなす。崩壊ホツチの澤が落ちてゐた。

ホツチの澤の、石ガレの推出しに次いで、上剃石の先きの、瀧のかゝるタル澤の崖壊も大きなものであ

つた。そしてこの崩れた岩石が、流の中にまでころがつてゐて、川瀬は激し、其處に不動瀧の名稱さへ生じてゐた。三時五十分。對岸には伊谷山が、高く聳え、紅葉澤が、一三五八・六mの山腹から注いでゐる。

今迄、溪谷の沿道は、兩岸の山が餘りに高く聳立して、溪谷に、一種の如何にも奥深い幽邃の趣きを添へてゐたが、此のあたりより上流は、急に拓けて山はやゝ遠退き、見上ぐる空も廣く、明るく、溪谷を離れて漸次平野へでも出て行くかの如き感じがされる。

四時五分。中ノ宿へ着く。此處には人夫小屋、二間四尺に六間の建物が十五棟も建ち並び、他に會所が一棟あつた。

田代より二軒小屋への二日路には、此處へ便宜宿泊を乞ふのが丁度適當の道程である。

積では、川狩人夫等が二十人程、掛聲勇ましく木材を流してゐた。流れ行く木材に乗つて、自在に川瀬を下つて行き、或る時は岸の岩壁に止まつて滯留

東山麓を迂廻して榎島へ一里五町、他の道は赤石澤の右岸に沿ふて行くものであるが、本道に及ばない悪路である。

赤石澤の釣橋から少しく登り、鳥森山の東麓、川岸の斷崖に沿ふて行く。

右方の對岸には、シヨノ澤、次ぎにカンバ澤、それから倉澤が注流してゐる。倉澤合流點の上手で、西澤峠への道が岐れて、長い釣橋が架つてゐた。此の道は、對岸の山腹を南に向つて赤松(一四〇〇m)黒松(一六〇〇m)の峠からシヨノ澤の北斜面を登り、下シヨノ澤の吊橋、上シヨノ澤の小屋を経て西澤峠(二二〇〇m)を超え、稻又谷に入つて北斜面の中腹を雨畑に降つてゐる。雨畑、榎島間の一日行路である。

西澤峠は、登峰山脈の南端を横斷する、そして山岳の景觀に最も恵まれてゐる峠路である。北アルプスに於ける針ノ木やザラ峠、又は徳本峠などに、將に匹敵す可きものはあるが、而もそこに展開される山岳の構壯に到つては、全くそれ等とは趣きを異

する木材を中流に押出し、かくして彼等は流木を始末しつゝ、秋九月下旬より十二月一杯には、島田町向谷の溜材地に送り届けるのである。休む暇もなく、たゞ眺めただけで急ぎ足に此處を過ぎた。

七 榎 島

參亦山(二四〇五・三m)から發する中ノ宿澤を経て、東藤島澤の手前で、西岸に釣橋を渡る。溪の奥に、鳥森山の小さな針濶混合樹の突峰が見えて、榎島の可成りに近付いて來た豫感が、思はず足をせき立たせる。

西藤島澤(唐松澤)の推出しを過ぎ、ヘビツヤ澤を越え、道は巨樹の林中を通じて、岸の斷崖に臨み岩唇を切り開いた岩壙の箇所などを辿る。かくして、五時半、赤石澤合流點の鎌ノ輪田へ着いた。

此處で道は二つに岐れ、本道は其のまゝ鳥森山の

にしてゐる。

シヨノ澤小屋の窓に描かれた、初夏の赤石岳の姿をまだ見ぬ者は不幸であるかも知れない。峠上の少しく北方より、大井川上流の深溪を隔て、鬱蒼たる藍黒の密林の上に、氣高く抜け出した赤石岳を中心として、左に聖岳、上河内岳、右に荒川岳、東岳の残雪白皚々たる崇巖、佳麗の山容は、山岳景觀としての壓巻であり、本邦に於ける山岳地の、他に向つて何處にも求め得られない景觀の粹である。

此處からは策ヶ岳へ容易に往復する事が出来る。その山頂は又一層展望の視野を廣めてゐた。赤松峠邊に夫婦梅と稱ぶ奇木がある。徑尺五寸位の二本の梅が、八尺程離れて居り乍ら、六、七尺の高さに於て、一本の太い枝で鐵棒の如く繋がれてゐるのである。

午後六時。日は暮れんとして、遂に榎島へ着く。東海紙料會社山林部の事務所を訪ひ、副主任と會ふて久濶を述べ、登山道や小屋新設變遷等に就いて語る。

事務所の入口には、金網の箱に入れて、數匹のシマリスと一匹のモ、ンガとが飼育されてあつた。伐採の人夫が捕へて來たものである。

縞栗鼠

(*Eutamias asiaticus lineatus* Temminck) 齧齒目 栗鼠科。一名トラフネズミ。リスよりは遙かに小形、背の前は淡灰黄色、後は赭褐色、後頭より尾の基部へ五條の黒縦線あり、下面は白色髭が長い。口内に頬嚢を有する。

本州ももんが

(*Peromys momonga amygdali* Thomas) 齧齒目、栗鼠科。ムサ、ビ(日光ムサ、*Peraurista leucogenys ulkensis* Thomas) に似たるも遙かに小形にして、冬毛は淡灰、夏毛は濃き黄褐色をなし、下面は白色なれど少しく紅色を帯び、尾は黄褐色に黒色を混ず。前肢の腕部より後肢の踝にかけて飛膜を構成し、それを用ゐて樹梢を

落下的に飛ぶ。攀ち登る時は栗鼠ほど速かではない。八月頃樹洞等に巢を營み、四、五匹の仔を分娩する。翼無くて良く飛翔するものに就いて動物學者の觀察を挙げれば左の如くである。

- 飛魚 一躍 六〇〇呎
- むさび 一二四〇"
- 印度蜎蜎
- ドラコ・リムプリアタスク 六〇"
- スダン群島蛙
- ラコホラス・レインワージ 六"

事務所を辭去し、其の夜は人夫瀧浪と共に、旅舎橋本屋支店に旅装をとつて、深山の懐しい初夜を迎へた。

八山と人と

往時の通路は、大體溪流に浴ふて作られてゐたが現今、樫島以北の通路が、山腹の中途を横切る林道より、次いで河原沿ひに、新しく作られるに到つた點などは、最も興味を誘ふものであらう。

因みに、井川山に於ける林業の沿革は左の如くである。

井川山の伐採

井川山、即ち大井川本流奥の天然林の伐木利用は、千頭山に比較すると幾分後年より始められたものゝ如く、蓋し、千頭山に於て數十年來良材のみを伐採せる關係上、漸次不足を來し、依つて井川の奥上流にまで手を染めるに到つたものではないかと思はれる。

傳説並びに史料を参照すれば、元祿五年より七、八ヶ年間に亘つて、江戸の商人、紀ノ國屋文左衛門や、駿府の松木屋郷藏等に依つて御用木を伐採せられたのを最初とするらしい。元祿十一年寅年は、恰も文左衛門が、江戸上

樫島は、赤石岳東山稜(二五六三・九m)と、鳥森山がなす狹少な鞍部に位し、大井川奥山の開墾地として、附近には古來より人煙を斷たなかつた所である。

大井川奥に開墾地を有してゐる農民は、恰も候鳥の如く春四月頃より山地に入つて耕作に働き、收穫を終へて年の暮れとなれば、殆んど作場小屋は閉鎖して、田代や井川の里へ降つてしまふのである。

所が、現今の樫島は、大倉組の一派である東海紙料會社が、伐採本部を此處に置くやうになつて、その人寰に秘奥の山中へ、俄然一部落を形成してしまつた。

但し伐採事業が、漸時上流へ移動して行くに連れて、その本部も二軒小屋と稱されるやうになり、臆ては、此處も昔日の閑寂境に還元されんとしてゐるらしい。

歴史は常に繰返されてゆく。そうした事象は、此處大井川上流の山中に於て、如實に表現されつゝあるのである。

野の寛永寺根本中堂の造營に關係し、當時約五十萬兩の巨利を占めたと云はれてゐる。此の時の伐木は莫大な量であつて、井川のあたりより島田の河港向谷に到るまで、一時大井川の流路は木材をもつて埋まつた、との説である。

後、安永の頃、甲州屋彌兵衛、又嘉永四年頃から文久三年頃まで十三年間を信州松本在の野口某なる材木商信濃屋に依り、幕府の御用材として伐り出してゐる。その他、享保三年、文化十一年の頃の伐採の記録もある。

現今、千頭や小長井を、山家の江戸と呼ぶ言葉の残つてゐるのは、山中比較的人家の多いからばかりではなく、往時御用材伐に際して常に江戸あたりから奉行等が出張して居て、山間稀有の政廳の感があつたからであらう。

是等伐木の搬出に就いては、取締は極めて嚴重であつて、各々其の木印を定め、出材組及び其の宿所には木印の旗或は日の丸の旗を立て、

御用材たる事を明らかにし、住民は故なく川端へ出て伐木を見る事すらも許されなかつた。中川根村上長尾の農民より差出した書状は次の如くである。

一、千頭山御運上木大井川流し御座候由、御材木出ニ付川端へ親申間敷御條目之通大切ニ相守可申候若不屈之義有之候共右者庄屋組頭等御苦勞掛申間敷事
享保三年戌十一月

三左衛門外九名

明治になつて、十三、四年頃原川氏は擴榮社を組織し、時の海軍卿川村純義大將と親しく軍艦用材樫樺約四千尺メを契約したが全部は履行しない内に、製艦の方針が鐵船に一變し、川村海軍卿の辭職となつて不能に終つた。

そして明治初年田代の部落有であつた上流の山林は原川氏の所有となり、擴榮社に移り、大倉喜八郎氏の有となり、同別派東海紙料會社の經營する所となつて現今に到つてゐる。目下、

大倉山林に於ける年平均出材量約十萬石、島田町加藤氏の出材約五萬石と謂はれてゐる。

九 二軒小屋

樫島の夜は小雨に明けた。初秋の雨は物乞しく、板葺平屋建ての、深山の孤驛を濡らしてゐる。

空の雲行きは早く、漸次雨は上つてゆくらしい。

今日の日程は二軒小屋までと定まれば、溪沿ひのその良く改修された、細い乍ら立派な平坦な山道を辿る安易さは、自づと出發に遅延を來した。午前十時事務所に挨拶して樫島を出立する。毎月一回づゝ、伐採人夫會社一同の休養慰安の祭日を行ふ、樫島神社の、新築された神殿を右手にして、路は大井川の右岸少しく高所を、奥上流に向つてゐた。流域は、狭少であつて、水は殆んど溪一杯に流れ、濁水に浮んだ流木を流してゐる。

溪が急に東に折れると、左から奥西河内が注流してゐた。それは大聖寺平を發し、二一〇〇m邊に於

て高い千丈瀑を落し、北澤、カンバ澤を合せてゐるものである。

荒川東岳への登路は、此の合流點の少しく手前で釣橋を渡らず、川岸をそのまゝ左に執り、奥西河内の橋を超えて、山稜に取り付き、そこに開鑿された立派な登山道に依つて、東岳の南山稜、巖段(二〇七三・二m)を、千枚岳(二八七三・八m)に登り東岳、荒川岳、荒川前岳と縦走するのである。

大聖寺平の石室は廢せられ、今は荒川前岳の南山腹に、立派な登山小舎が東海紙料會社の手に依つて建設されてゐて、樫島を早朝に出發すれば、此の小舎に達する事が出来る。千枚岳の小舎は、二六〇〇m邊に建てられ、カンバ澤水源の泉が、小舎の傍へ豊かに湧いてゐた。東岳は信州大河原方面の山名であつて、駿州田代では是れを地藏岳と稱してゐる。それは山頂南面の崩壊地邊に、地藏石と呼ぶ岩塊が三個立ち、内二箇は現存してゐるからである。

甲州の新倉では千枚岳、同じ湯島では惡澤岳と云つてゐる。それは、南アルプスに於ける登山の黎明

期に、湯島の案内者が、日本山岳會の幹部達を導いて、「わしらあ、惡澤の頭だから惡澤岳つて云つてるんで」位の所から命名され、記録されてゐるのである。

此の登山道の、一五八六・四mの下、一四二〇mの上方から西木賊へ降る小道も、よく踏まれてゐた。樵島を去る七八町の處に在る釣橋を東岸に渡り河川の小高みの、路を進めば、右手より注ぐイタドリ澤の吊橋を経、偃松尾（二五三九・三m）から出る下木賊澤をこえると、東木賊に、新倉の人々の開墾場は廢滅し、伐採事務所の小屋が一棟建つてゐた。十一時。晝食にして三十分ほど休む。

それから中木賊澤、上木賊澤を越えてゆくと、ハフ澤附近に伐採が行はれ、山上から溪谷へ、伐木を落す爲めの、箱樋に拵らへられた棧手が、道路を横切つて架かつてゐた。

一定の長さには伐られた木材は、此の棧手の中を滑つて、溪流の中へ嵐の様な音響と共に矢の如く激しく降つて行くのである。

棧手は山林伐採事業に於ける、重要な一運輸機關であつた。

箱樋の形式を棧手と稱し、丸太棒を並べて樋を作り、滑道となしたものを修羅と呼んでゐる。修羅は木曾山林の稱呼であつて、吉野山林では之を「ナル」と云つてゐる。

東蛇澤の對岸には西蛇澤が注ぎ、天井小屋（二四二九m）から流出するオゲツ澤やツバクラ澤を右に見て行くと、車屋澤が午後一時半。對岸の崩壊を左に眺め、道はおだやかに山脚を廻つて通じてゐた。

左に、下千枚澤、上千枚澤の深い山穀と、その頂稜あたりを仰望し、水量の多い下千石澤から、保利澤山（二三七九・三m）より出て山懐ろの大きな上千石澤を迂迴して行く。

信濃屋が大伐採に當り、此處の沿岸千石平に、山人夫の食料として粃千石を積み上げ、車屋澤に水車を懸けて精米した事があつたと云ふ。千石澤並びに車屋澤の地名の由來である。仲ノ宿は其の當時、田代より物資運搬の丁度中繼所になつてゐたと云ふ。

其の頃の通路は、現今全く消滅してゐるが矢張り河原傳ひに歩いたものらしい。

スリバチ澤を越えて、右手に山の鼻を巡れば、行く前に、二軒小屋を見ることが出来た。其處には人夫小屋が幾棟か建ち並び、事務所や會所なども在り文化住宅にもふさはしい赤瓦の屋根なども見えて、その奥には更に、東電の田代川水力發電所取入口の堰堤を白く落下する水、二、三の建物等も山の端しに現れてゐた。往時は、此の山間奥深き溪流のほとりには、人の歩む路としては更に無く、只だ往時信濃屋が伐採の折、二つの杣小屋が建てられたのに過ぎなかつた。それが近年東京電燈會社に合併せられる前身の早川水電が、此處に着目して田代川第一第二發電所の水量取入口を定め、爲めに現今はすつかり開發されて神秘境の趣きも無く、夜は電燈が皎々と輝いて原始的な幽邃の暗を照らしてゐる。然し乍ら二軒小屋の背後を擁す山々は、蝙蝠岳より低下された山脚の鼻（一七三五m）轉付嶺（二〇四九m）などであつて、深山の嵐氣はなほ隈なくあたりを立ち

こめてゐる。

吸ひ寄せられるやうに、右に山腹を捲いて、午後二時半。ニケンゴヤ澤を渡り、二軒小屋へ着く。直ちに東海紙料會社の事務所を訪ね、折から樵島より出張して居られた、猪瀬主任、深澤事務員などと會ふ。懐しく迎へられて旅装を解き、山の素朴な、併し極めて情味厚き供應に預り、語り、盡きぬ談笑の山の一夜を過ごすのであつた。

大井川奥上流の伐採事業が進展して、漸次北部に推移し、二軒小屋を根據として、その最上流に施行されるやうになり、爲めに本事務所も、近年樵島を撤去して此處に移轉される事となつた。

家屋は續々建ち並び、そして橋本屋旅舎では此處にもその支店を設けるに到つた。

この深山の中に生じた孤邑の發達は、元より森林伐採事業の現象であつて、決して永久性を有するものではなく、一時的な或る時期を劃した人の世の営みである。

それは往古、雨畑川の水源遠澤の金鑛發掘に依る

東
侯
川

東 俣 川

白峰間の岳の石室は、生の偃松を焚いて暖をとつたが、雪に周囲を包まれて、比較的暖かかつた代りに、その烟いには閉口した。

屋根の破風に風通しを作つて、籠る油煙を排退したが、それでも時々燻つて、遂に小舎の外へ遁げ出す様な事もあつた。

五月上旬の夜の室外は最低気温、攝氏七度を示してゐる。雪を解いて食事の仕度をするので、夕食も朝食も手間取れる。それに昨日の登高の勤勞があつた後なので、毛布の床を拂ふのにも、この朝ばかりは、いやに大儀に思はれた。

午前九時半、やうやく石室を出て農鳥岳に向ふ。十一時半にその二等三角標石に到達し、約三十分程眺望をほし、いまにして、五月のアルペンの残雪の群峰を禮讚し、小舎へ引返したのは午後一時半であ

つた。

西農鳥の山稜に於て、一羽の雷鳥に遭遇する。冬季の白い羽毛はまだ脱け變らず、少しく黒味を帯びた羽根が見えてゐただけである。

雷 鳥

(Lagopus mutus Japonicus) 鶉鷄目、雉科。留鳥、本邦、本州の白山、北アルプス、木曾駒、南アルプスの駒、鳳凰、仙丈、白峰、鹽見、荒川、赤石、聖、光岳邊にかけてのみ棲息してゐる。

形態は鳩に似て、より大きく、雄は背の羽色黒色に暗褐色の横縞があり、腹部と風切羽は雪の様に白い。そして眼の上に小さな赤い肉冠があり、脚は趾蹠まで白毛で覆はれ、兎の足の様

であるから學名 *Lagopus* の意味が與へられてゐる。雌の羽色は雄よりは茶色がかつて、肉冠もずつと小さい。

初秋に入れば、羽毛は漸次脱け變つて、十一月にはどちらも全身白色となる。そして春三月頃から六月にかけて漸次又元の夏羽に脱け變つてしまふ。冬期雪中、或は夏期高山の偃松の間などに身を潜める時は全く隠くされてその所在を知り得ない。學術上殆んど完全な保護色を具備してゐるものと云ふ可きである。性遲鈍で、翼の力弱く、常に地上を歩み、雛は家鶏のヒョコに似て可愛らしい。鷹を恐るゝ事甚だしく、雲霧の來襲する時かその前などに樹隠から出て來るので登山者の眼に觸れる事が多い。古來靈鳥として保護され、これを捕獲すればお山が荒れると云ひ傳へられてゐるのは如上の理由からである。又、今日までともかく保護せられてゐたのも、此の傳説や天然の巧妙な保護色、遲鈍な性情などのおかげである。御鳥羽院の御製と

して、夫木和歌抄に

白山の松のかげにかくろひて

安らに住める雷の鳥かな

とあるのは、此の鳥の文献として適切な、又最も古いものであらう。

雷鳥の食物は、草本、灌木の果實、嫩芽、昆虫等で、繁殖區域が狭く、類も甚だ減少しつゝある故、天然記念物に指定せらるゝに到つたが登山者は心して、此の貴重な高山動物を、益々愛護しなければならぬ。南ブルプスに於ける棲息區域は、北は甲斐駒岳より、南は光岳にまで及んでゐるが、此の北緯 35° 20' に位する光岳は、動物學の分布上、本邦に於ける雷鳥、並びに、冬季白色化する越後兎 (*Lepus brachyurus-erigo* 齧齒目、兔科) の最南端を劃するものではないかと考へるのである。

石室へ歸つて晝食をとり、充分に仕度を済まして東俣の降りについたのは午後の二時半。

石室の在る所から、農鳥岳へ向つた鞍部を、西に面し、溪を目指して降つて行く。この山腹は、石ガレに偃松が少しく生えてゐたが、さして歩き難い場所ではない。五月上旬の、佳く晴れた午後の空に、農鳥や間ノ岳の連峰は、黒い岩稜に白い残雪を化粧して、轟々とそゞり立ち、えも云はれぬ崇高な山岳の景觀を提供してゐる。

暫らくして此の溪は、間ノ岳澤となり、丈餘の積雪を満たした、白皚々たる大雪溪となつてゐた。

そして、間ノ岳より出る谷と合致するあたり、残雪に埋れてゐる三國岳のカールを發見する。白峰のカールは、凡そ四個を數へる事が出来る。即ち東面に於ては、荒川の上流北澤の水源をなすカールと、その南に並ぶやゝ形の崩れてゐるもの、それからホソ澤のカール、これは二股になつてゐる。そして三國岳の東北に位するカール、以上である。

雪溪は適當の急斜面を保ち、益々残雪の量を増して、素晴らしく廣大な雪の輝きを着せ、その反射で身内はやうやく汗ばんでくる。

アイゼンの齒は硬結した雪面に喰ひ込んでザクツ／＼と音をたて、ピッケルの先端から破碎された雪は火花のやうに散る。

それは、磊々たる石の河原を降るのとは全く異つた、氣持ち良い下降を、どし／＼續けて行く事が出来た。

三十分の後には、三國澤の雪溪と合し白峰澤となつて、なほ暫らく下れば遂に此の雪溪は切斷して、その大きな雪塊の斷口から清冽な冷たい雪解の水は一時にどつと奔下してゐた。

それからは、流れは雪に掩はれず、只だ兩岸のみはまだまだ多量の残雪に埋れて、處々長大な自然の雪橋を架けてゐた。左岸のタケカンバの生えてゐる積雪の上を辿る。

西農鳥澤に到つて、右岸に移り、雪橋の上を左岸に轉じ、四時五分、ノツコシ澤の合流點へ着いた。ノツコシ澤は、熊の平井川越 (二五七五 m) から來る溪である。

間ノ岳澤から三國澤のあたり迄は、高い山の頂稜

を仰望する事が出来たが、それより下流の溪に降つてからは、山稜は針葉樹の溪谷をあまりに狭めて、さしたる眺めを興へなかつたのは、少々物足りない淋しさがあつた。

左手より西農鳥澤、右手より注ぐノツコシ澤を過ぎると、溪は小廣い平らな河原をなして、一名奥廣河原と稱し、景觀もよく、又歩行も甚だ樂である。そして溪が右へ彎曲してゆくと峽流となり、流れは二丈位の瀧を懸けてゐたので右手をへづる。上アベ澤が右より入り、左に大きなナギが見えて其處はやゝ廣い面積の溪澗を殘雪が一杯に充してゐた。

シマ(河洲)が其の先の左岸に在る。四時四十分。此の島は相當に長く、カワヤナギなどが生えてゐる。溪は急峻をなさずに歩き易く、又見た眼にも美しかつた。

右より下アベ澤が注ぎ、溪は左へ曲つて、左から瀧ノ澤が落ちてゐる。この澤は農鳥岳の西南面に發し、險惡無双な谷で、中腹には三段の高い瀑を懸けた。

溪奥には農鳥の岩峰を望み、溪下には北俣岳のなほ白皚々たる頂稜を覗見する事が出来る。

新蛇抜の、荒々しい山肌は大部分針葉樹の密林に隠されて見え、高さは約二〇〇〇m、北アルプスの上高地にも較べ得可き、大井川上流、最奥地の幽邃境である。

雪は此の邊り既に消えて無く、只だ岸の處々或は針葉樹の中、又は山壁の小谷の内に白く残つて見えつゝゐた。

午後六時十分。此處に野營のテントを張つた。氣温はC五度。夕陽は暫らく農鳥と北俣岳の上に淡い光りを投げてゐる。大密林の中に取り残されて、極めて寂漠として夕景の環境に慈悲心鳥の聲を聞く。

このひと時、限らない嚴肅さと、神祕な色と、幽閑な氣分とは、蒼い沙のやうなうす靄と共に、深山をたちこめてゐた。

焚火の煙りが、ドロブの林を掠める頃、よく晴れ渡つた空に半月が昇つた。溪の音は何時迄も單調に、流れはギラ／＼と青白

てゐるのである。五時。

なほ又左方に島が在り、溪の下方に、白く殘雪を着けた北俣岳(二八六〇m)の覗く山頂を眺めると左より上ノシマ澤が入り、五時二十分、なほ左より下ノシマ澤、右より上イナ澤が注ぐあたりまで溪は峽谷となり、これを過ぎると河原は小廣く、島が在つて、後方黒木立の山稜の上に、少しく農鳥岳の黒い岩峰を顧みる事が出来た。

そして、左に大きなガレを見て、右に迂廻すれば溪は俄然廣々と潤けて、蛇抜河原の谷盆地となつてゐた。

此の谷盆地は、新蛇抜の頭(二六六七m)より、東俣の溪底に向つて崩壊した、稀有な大量の土砂が溪を一面に埋めて、立派な平らな盆地を構成したものである。

周囲はシラビソ、コメツガの青黒い密林で圍まれ北端に平らな砂地を残して、まだ芽ぐまないカワヤナギ、ヤマハンノキ、ミヤマハンノキ、ドロブなどの若木が、一帯の粗林をなし、流れは左端を洗ひ、

い月の光りを溶かしてゐる。

午前四時に、蛇抜河原の夜は明けた。氣温はCの二度、まだなかなか寒い。河流に含嗽すれば、水は氷のやうに冷たく、流れ木には薄い氷さへ凍結してついでゐる。

北東に農鳥の一端が、黒褐色の岩峰を見せ、南西には鹽見岳續きの北俣岳が殘雪白く、新蛇抜ノ頭(二六六七m)や北荒川岳の頂稜もそれと首肯される、そして午前五時となれば早くも是の双峰の頂頭に、淡く朝暈の光りが染め出されてゐた。

みそさゝいが頻りに啼く。

午前七時。此の美しい河原の野營地を後にしてなほ東俣の溪谷を下流に向ふ。下ると云つても、河原は決して急勾配をなさず、それに此のあたりより下流森屋澤に到る迄の間は、溪谷としての狭惡な態様は全く無く、河原は常に廣濶として、従つて歩行には誠に容易であつた。右より新蛇抜澤と下イナ澤を合せて、河原は左に彎曲し、行く手に白河内岳(二八一二m)と池ノ澤の顯著なる山巒を眺める。二十

五分で左よりの池ノ澤合流點に達し、河流は又右から左へ彎曲して、右岸へユキナゲ澤、アイタケ澤などを合せる。

池ノ澤は廣河内岳(二八九一m)と大ゴモリ岳(二七六七m)の間の山巒にある池を水源とする溪であり、ユキナゲ澤は北俣岳と北荒川岳より發する流れである。アイタケ澤を越れば、後方には白峰間ノ岳の、残雪を隅取つた峰頭が少しく覗かれる。このあたり、河原は廣々として美しく、上小廣河原と呼ばれ、カワヤナギ、ドロブ、サウシカンバ、シラカンバ、カラマツなどが生え、夫等の落葉樹は未だ少しも梢は芽ぐまず、そして河岸はシラベ、コメツガの針葉樹が繁り、此處の河原にはもう雪はすつかり消えてゐたが、山皴をなす小谷には、いづれもまだ白々と残つてゐた。

蛇拔河原からは徒渉せずに右岸を其のまゝ何處迄も辿つて行く事が出来る。河原の砂の上によく羚羊の足跡を見る。可愛い小さな兎のそれもあちこちに印されてゐる。陽は既に暖かく、河原を一面に照り

コマツ、灰黒いカラマツの樹梢などが混交してゐる。そして平らな河原の砂丘には、梢を黄褐色に染め出した、灰色の樹幹のカワヤナギが多く林立してゐた。それはいづれも得難い、深山幽溪に展開せられてゐる所の、植物景觀に他ならないのである。

白河内岳の峰頭が白く、下ウナリ澤の針葉樹の濃緑の頂上へ、高く銀冠をかゝけてゐる。溪が右へ迂廻すると、今迄の濶い河原は此所に盡きて狭少となり、右岸に森屋澤を合せてゐた。八時半。

峡谷と稱する程ではないが、今迄よりはすつと狭い河原の流れの縁に沿ふて進む。

右岸の林の中を過ぎ、次いで岸の岩を起え、更に岩を捲き、そして沿岸の岩をへづる。林の中に、微かに人の踏跡がある。

右より十石ゴヤ澤が注ぎ、暫らく進むと、河中にカワヤナギの徑四尺もある大木が、對岸へ向つて倒れ伏してゐる所へ來た。此の枯木から先きは、約一間半位の間、人夫は橋の代りに二本の丸太を渡して對岸に移る。今迄の右岸の道は、此處に於て始めて

輝かしてゐた。

左岸に島があり、右岸には崩壊が見え、河原の廣い砂地にカワヤナギが十數本點々と生えてゐる。

左岸より上ウナリ澤と、その先きで右岸より上ウナリ澤が注ぎ、次いで大きな押ししが右岸に島をなし、是のデプリーを越れば、カワヤナギの若木が林をなして、その島はひとまづ盡き、又大きなカワヤナギの生えた島に移る。

聽て再び、若木の生えた島をなし、そして左岸に下ウナリ澤が入つてゐた。

野營や小屋掛けの跡が、隨所に見られた。回顧すれば、溪の奥には、新蛇拔の崩壊が眞正面に望まれて溪の向斜面は一帯に針葉樹が、厚く密に蔽ふてゐる。

その色彩は、藍黒よりは寧ろ濃緑りに近く、兩岸の樹木を眺めて仔細に檢出すれば、右岸には、青色のシラベ、青黒いオホシラビ、青綠色のトウヒ、黒色のクロベなどに、灰色のシラカンバの梢が雜つてゐる。左岸には、シラベ、青黒いコメツガ、ヒメ

左岸へ變更される。九時半。三十分ほど休憩する。

左岸の逕は、河原から間もなく林の中へ入つて、やゝ山へ上り、右岸の上を避けて又河原へ下り、そして更に、左岸の林の小逕を行く。此の小逕は、岩魚釣りや、獵師達の通ふ、ほんのさゝやかな踏跡である。それでも此のあたりからは、どうやら明かに記されてゐた。みそさどいが、河原の行く手に到る所、其の美聲を惜氣もなく張りあげてゐる。その他おほるり、ぢない、こがらなどの歌も聞える。籠の中の鳴禽とは異り、聲は情調に澄んで、飽く迄も自由奔放に歌ふ。

溪谷の旅の行く先き先きに、かうした音楽が待つてゐる。それは春から夏へかけての旅に與へられる、浸潤された情味である。川瀬の洗ふ左岸の岩塊は、やゝ長く續き、逕はその左手の林の中を潜つて行き、左に折れ曲つた河原へ出ると、對岸に飛瀨澤が注ぎ、その直ぐ先きの左手に、立派な天然の石小屋が在つた。小枝をもつて周圍の壁を作り、中はうす暗く、約七、八人位は宿營出来るオリツキの石小屋

である。

それより、なほ左岸の岩をへづつたり、岩の上を
超えたり、急瀬に白沫の飛ぶのを右に見て岩の上を
捲く。蝙蝠岳の残雪を振り返つて仰ぐ。溪には黒い
程の深淵が渦巻き、流れは雪解の量を夥しく加へて
何時にも無い激流となつてゐる。

岩壁を左に執つて、河原の分流を涉ると、其處の
河流の中に大きな石が立つてゐた。溪は頻りに曲折
蛇行し、左岸の岩の根にオリツキの小舎跡を看る。
十一時十分。對岸にはナギトロ澤が注いでゐた。東
俣の溪は、此處から大きく東に折れてゆく。右岸に
小さなカラウス澤が入る。

かくして、河中に大きな長方形とや、圓形の石が
並んで横臥し、溪はその先きで南に屈折してゐる所
へ出た。左岸には、ツガの生えた石と、それより小
形の石との間に、太いカワヤナギが一本立ち、東俣
から奈良田に超える、オリツキ峠の細い逕が、其處
から左の山背へ、登るやうに通じてゐた。十一時十
分。此の峠の小逕は、此處から山腹の針葉樹林中の

を経て、直ぐ右岸に移り、又左岸に渡り、たぎり落
ちる溪流を合手に、輕装な人夫と二人の惡戰苦闘は
約五時間の長きに及んだ。

左にナガガレの崩壊を過ぎ、右にオシダシ澤の推
出し、トクエモン澤などを経ると、左岸へ注ぐオシ
ヤリ澤の手前に、最も險阻であるダヤの岩崖が、溪
谷の兩岸に逼つてゐた。

空には岩燕が群れ、溪間には、みそさといが鳴き、
岸の上に生ふるツガの梢には一羽のおぼろりか唄つ
てゐる。あかげらが枯木をいやにやけに叩く音まで
が、木魂返しに聞えて來た。残雪はいつか消え去つ
て溪には、何處にも看る事無く、此のあたり潤葉樹
は既に、若葉の色鮮やかに萌え出で、古生層の岩壁
に、濃い黄緑りを惜氣もなく塗り込めて、藍青の深
淵と、激瀬の白沫とに美しく映發してゐる。

中にもイタヤカヘデ、カツラ、イヌブナ、ミズナ
ラ、トチ、ニレなどの若葉は殊に明るく眼が覺める
やうに美しかった。

右岸にマゲワ澤が注ぎ、左岸にはジャカ澤が入つ

急坂を攀ち登り、オリツキ澤の小流れを横切つて、
やがて山の中腹を横に白剝山(二二三七・二m)と
ナガガレノ頭(二〇九三m)との最低鞍部へ到り、
そして降つて、野呂川の支溪黒河内の南又の山腹を
北又へへづり、恐ろしく急なヒノキ澤を降つて北又
の溪へ入り、横へづりに笹山(一九三〇m)の尾根
へ出て、白河内の流れを渡り、西山村奈良田に到る
ものである。

峠の登り、一時間、降りには約三時間餘を要する。
オリツキ峠の登り口より、下流田代川の二軒小屋ま
での東俣溪谷は、今迄の上流に似ない險阻な峽谷の
態様を形成して、河流は著しく急斜をなし、磊々た
る河中の大岩石に激突奔騰し、溪谷は其のまゝ進む
事は、殊に五月の融雪期にあつては殆んど無理な仕
事であつた。故に、どうしても此の際にあつては、
忠實な人夫の活動に俟つて、行く行く丸太材の假橋
をかけて進まねばならぬ。

晝食に三十分の休憩を取り、正午に十分前、愈々
此の溪谷の下降にかゝつたが、オリツキ澤の合流點

てゐる。ジャカ澤には、六方平(二二二〇m)を超
えて滑河内を下り、早川の沿岸上湯島へ通ずる乏し
い山逕がある。ジャカ澤の登り二時間餘、そして滑
河内の下りは約オリツキ峠の程度であつた。此處か
ら西へ間ノ山峠(一七三七m)を経て、西俣溪谷の
櫻島附近に到る舊山道は、今は全く破壊されて、こ
の通過は、目下殆んど可能性を缺いてしまつた。

流れの藍黒いまでに澄明な深い淵を不圖覗き見れ
ば、大きな岩魚が游泳してゐる。折から其處へ岩魚
釣りか一人溪間を遡つて來た。挨拶を交して下流の
様子や二軒小屋の事などを訊く。魚籠の中を覗けば
數匹の太つた岩魚が入つてゐた。大きな一、二匹を
懇請して今宵の食膳を賑はせる事とする。

ジャカ澤より、少しく悪場を突破すれば暫らくし
て東俣と西俣の出合ひへ着く。その先きが二軒小屋
である。其處には東電社宅を始め十數棟の建物があ
つて、夏季には井川の橋本屋旅舎が出張してゐる。

此の甚だしく通行を拒んだ東俣溪谷の下流は、東海
紙料會社山林部の事業が、漸次上流に溯つて來た爲

め、最近此の西岸に立派な林道が開鑿されるやうになり、それは臆て、上流廣河原の邊までも延長される運命を持つてゐた。人力は實に小止み無く、此の深奥の溪谷に向つて働きかけてゐる。

東俣の、新しい氣の利いた林道に歩みを運んで、西俣の出合に懸る釣橋を渡る。折柄、夕陽の色はひと際山の端を照らして、溪谷は針葉樹の濃藍がしたたるばかり厚重に影を描き、そして、涼々と河原の小石を洗ふ清冽な溪流の響きに和して、今迄の溪澗に於てまだつい聞かなかつた駒鳥の、あの駒の嘶くやうな高い調子の聲が、痛い程に懐しく、聽神經を震るはせるのであつた。

駒 鳥

(Erethacus akahige) 燕雀目、鶇科。留鳥。鳴禽の飼鳥として、鶇と共に有名である。北は千島より九州へ懸けて棲み、形は雀位、背と翼は茶色、頬から胸へかけて栗色、腹は白い。平常針葉喬木帯以上の樹間、或は谿流邊に棲息し、

駒鳥の囀り

春から秋の初めまで、極めて良く響く金鈴のやうな美音を聞かせて呉れる。それは嘴を微妙に震るはせて、ピヤラ、、、と鳴く。
囀鳴は、ピンギヒンギヒンギ、サイサイサイチヨウチヨウチヨウと聞える。大るり黄ひたき、ほ、白と共に、和品四鳥の一として飼はれてゐる。
登山者が山に別け入つて、登山小舎を早立ちの朝、又は野營の夕べ、針葉樹の香りに誘はれて、谿流の響に送られて、駒鳥の歌が聞えてくる。一度この經驗を持つて、山の旅を戀ふ者は必ず駒鳥の歌に限りない思慕と愛着の念を覺えずにはおかぬであらう。

「ピヤラ、、、」
「チイカラカラカラカラ」
駒鳥の聲は、すがすがしい溪流のせゝらぎに

協和して、此の溪間を一杯に、心好いヴァイブレーションを奏した。

すると臆て、一羽の山の駒鳥が、樹梢を傳つておづおづと、彼れの方へ近寄つて行つた。

「やあ、いらつしやい、マドモアゼル」と籠の中の駒鳥は、朗らかさの裡にも多分の懐しさと無限の喜びとをこめて聲をかけた。

「お尋ね下さるとは有難いです、何しろかうして毎日のモノトナスには閉口しきつてゐるし、ソロにもいさゝき飽きてゐますし、アクロバットの練習もあまり氣がきかない事ですからね。

それに此の頃は、此の通り毎日、まるでラムカベルモツトでも飲んだ時のやうな好い陽氣が続きますからね、いやどうもたまりませんよ。

いらつしやい、此處で少しお話でも致しませう。そしてどうです、二人でタンゴかブルースでも踊りませんか、ラ、、、ツラ、ラ、、、ツラ、ね、いゝでせう。
僕は平常都にばかり居るだけに、矢張り山が

戀しいですよ、あなた達の居る所がね。

山の姿と、水の色と、流れの音と、それにかうした深山のみで味はう事の出来る白檜の、スイスイとした清新な薫りなどは、實に何とも云へませんからね、いや、フランス製の香水だつてかなやしませんよ。ね、マドモアゼル、貴女は此の籠が一寸近付き難いとお仰るのですか、恐いとも思ふのですか。

いけませんね、貴女は、この精巧に造作されてゐる籠こそ、現代生活の最も理想的なアラ・モードだつて事を御理解にならないでせうか。美食と、清潔と、便利と、外敵に對しての絶對的安全さは、何んと云つてもアップ・トゥ・デート。

籠に入つて山に来る事は、外敵の杞憂がなく美食は都と同じに宛てがはれ、そして翼を働かす事さへも不要で、只ソロを聽かせたり、止木でアクロバットを主人に見せりやあ、それで義務は済むんですからね。

此處へいらつしやいよ、そして貴女も籠に入らない？」

山の駒鳥は、彼れの喰入るやうな魅惑の言葉と、籠の上に渡されてあるモチの枝の恐ろしさにと身震ひした。

併し彼女は平常大變内氣で怯懦だつたものだから、極く控目に彼れの言葉を味得したのだつたけれども、單純な山の鳥だけに、まだよくわからない點が多かつた。但し、現代文化の先端とは、綺麗な鳥籠を作つて住む事、そして山へ來るにもその籠の生活を捨てず籠に入つたまゝ山へ來て大いに山を感激する事や、籠を作つて入つてしまへば、もうその籠は決して自身には見えなくて、一段と自己の階級が進んだやうに思はれる事、そして山に入るには特に各自、強いて色々な籠を作りたがり、且つまた他に奨めたり、その巧拙や型を頻りに批評し合ふ事などがかすかに理解出來た。

「左様なら」山の鳥は云つた。

「えつ?! 左様ならですつて」籠の鳥は豫期に反した失望から、反動的な嘲笑にその表情を移した。

「籠の生活は幸福かも知りません。でも、私は山の本然の生活を樂しむ山の鳥でございますから、美しい籠や色々な巧妙な道具立てはいりません。何時も赤裸な素手で山そのものをしつかり味ひたいのです。それに私の愛するものが、尾根の向ふの溪に待つて居りますから。」

山の鳥は飛んで去つた。籠の鳥は私語いた。「解らないなあ、可愛相に。」

折柄、彼方に溪を守る力強い駒鳥の唄が聲えて來たので、彼れも亦それに答へて聲を張り上げた。

「チイカラカラカラカラ」

「ヒンギヒンギヒンギ、サイサイサイヒー
チヨウチヨウチヨウ」

* * * * *

西俣川

西 俣 川

一 西 俣 川

九月の下旬に入る日、大井川上流の支溪、西俣の溪を溯行する山旅は、二軒小屋を根拠として發足せられたのである。この溪は、水量こそやゝ大きい
が、峡谷の態様は備はらず、通行は極めて平易である。

併も加ふるに、東海紙料會社山林部は、最近東俣溪と同じく、この溪間に、林道を開鑿し、二軒小屋から、右岸或は左岸へ數條の釣橋を架けて、中俣と小西俣の合流地、慣合まで通達するようになつてゐた。

此の事は、大井川上流の景勝、支溪までも併せ觀賞する人々にとつて、確かに惠まれて來たものと謂

ふ可きである。

空は隈なく晴れて、朝の陽光は仰ぐ山上の大氣を紺青に薄く溶かしてゐる。午前七時。二軒小屋を出た。

水電取入所の事務所と、高いコンクリートの堰堤を右に見て、本流に架かる橋を渡り、開鑿された山の鼻を突切ると、右手に濃藍の水を湛へたダムを眺める。ナガレ澤の山懐ろが、その背面を針葉樹に裝ふて急に迫つてゐる。

東俣、西俣の落合(一四五一m)は直ぐ其の先きにあり、徳衛門岳(二五九八・五m)より南く派出された山脚の尖端が長く延びて此の兩支溪を分けてゐる。

ツガやシラベの針葉樹に、ブナ、カツラ、ミヤマハシノキ、シラカンバの潤葉樹を雜へた林相。崩れた

黝灰色の河原を水が白眼をして涼々の響をたてゝゐる。親し味深い溪の姿である。
落合には、西俣に架かる釣橋があつて、東俣の林道が右手に分岐し、西俣の道は、溪の左手を水邊に近く一町ほど辿り、其處で始めて第一の釣橋で右手に移つた。

進む事約三十分、流れが左に曲らんとする崩壊の手前で、路傍に一寸とした岩崖があつた。此の岩の破れ目に、數個の珍らしい雨燕の巢を發見する。

それは路上から手の届きさうな高所で、泥土を以つて巧みに拵へたものである。

明神谷や、櫻島の蝙蝠澤、シロサク澤にも多くの岩燕の巢が營まれてゐたが、西俣の溪の雨燕の營巢は、天然記念物として、切に保存愛護し度いものである。

雨 燕

(Micropus pacificus pacificus Latham) 攀禽目 雨燕科。夏鳥。岩燕に似て形はずつと大きく、

る。河原は小廣く、中洲にカラマツなどが生えてゐる。

右手對岸に柳澤が注いで、溪は西へ向ふ邊で、左岸へ二度目の徒渉をした。

其の川岸には上等な石小屋が在つた。大石の下を利用して山小屋のやうに作られてあり、優に五、六人は宿營する事が出来る。九時半。

溪は更に北へ向ひ、左對岸に蛇拔澤が注ぎ、山稜の褐色にハゲ崩れてゐるのが見える。溪沿ひは右手の樹間や、岩壁を捲いたり、へづつたりして進む。

此の時、溪の上流から一羽の鳥が飛んで來た。姿は良く啄木鳥の青けらに似てゐるが、飛翔の方法が違ふので、それはやませみであらうと推察し、追ひかけて積に降りた所を見れば、果してそれはやませみであつた。現今、山間の溪流に於てもあまり目撃し得ない珍客である。

木 狗

(Ceryle ingubris Temm) 攀禽目、翡翠科。漂

背面は黒褐色なるも腰に白帯あり、各羽縁は白く、嘴は黒、脚は短く紫黑色、燕や普通の鳥が前に三趾後に一趾なるを雨燕の類は四趾共前に向つてゐる。これに類する針尾雨燕 (Hirundaps Caudactus Caudactus Latham) は腰は暗褐色で翼と尾端は針の如く切れて突き出してゐる。

此處まで見送られた東海紙料の社員深澤氏と袂別し、溪流に添ふて作られた林道を歩まずに、わざと溪の流れを友として、往古の山人の足跡に就いて行く。

流れを左へ最初の徒渉をした。水流は雨後の増水の後を受けてゐたがそれでも腰までは濡らさなかつた。右岸の岩をへづり、マンボウ澤を横切り、更に又、右の岩を捲き悪場を過ぎると、左手からワル澤が注いでゐた。午前九時、此の間、河原は廣狹定まらず、川楊の生えた中洲などもあつて、下柳島などと呼んでゐる者もあつた。
岸の岩を左に捲いて行くと、溪は急に北に屈曲す

鳥。何處ともなく彷徨の旅を續けてゐる鳥である。川けら、川かけすの別名があり、形かけす位。羽毛は黒に白ガスリの斑があり、冠の如く立つた毛を伏せ、礫の如く水中に飛び込んで魚を捕へる。現今は著しく減數してゐる。

鳥の翼と脚の動き——鳥類は、その翼の構成に依つて、飛翔の形式に大凡四つの特性が認められる。

- 一、羽翼大いに發達し、爲めに軽く間褐的に翼を動かして、而も巧妙に流星の如く飛ぶもの。鳩、燕、はやぶさ、鷹、ほととぎす、鶉 其他。
- 二、羽翼長大にして、巧みに體重を支へて空中に浮び、羽打ち少くして、良く飛翔するもの。鳶、鷲、熊鷹、其他。
- 三、連續的に翼を働かして飛翔するもの。

A、緩動長距離のもの。鶴、さぎ、しぎ、鴨からす、其他。

B、急動短距離のもの。きじ、やまどり、うづら、にはとり、其他。

四、斷續的に翼を働かせて、波状に飛翔するもの。雀、せきれい、ほじろ、しじゆうから、ひよどり、きつつき、其他。

鳥類は、脚を用ゐて歩行する際に、A一脚づつ交互に出して歩行するもの(家鶏、雉子、鳩、雷鳥、雲雀等)と、B、二脚を揃へて同時に行進するもの(雀、山雀、鶉、かけす等)と、C、そのいづれの方式にも依るもの(からす等)とがある。これは脚の大小長短には關係してはゐない。

一寸した自然觀察ではあるが、分類してみると、其處にも捨て難い興味が湧き出づる事を否めないやうに思ふ。

左岸の岩壁をへづり、又岩岸を捲く徳衛門岳より来るマサゴヤ澤を渡ると、對岸に新蛇拔澤が注ぎ、岸の崖をへづつて中途對岸に移ると、川流の直北に折れる處、其處に自然の石小屋が在つた。櫻島である。十時半。

石小屋は三、四人を容るゝ位あつて右岸に在り、又、其の先の河原の中の大石の累積してゐ間にも在る故、注意しないと解らない。此處から、山稜に取り付いて東岳へ登る事が出来る。早朝出發して、東岳北山稜を登り、惡澤水源に當る山頂下の萬之助小舎に宿營するか、或は強行して、東岳、荒川岳を極め、荒川前岳の南腹に在る大倉小舎へ到る事も出来る。

石小屋の中で、早い晝食をとつて、四十分程も休んだ。

十一時十分、櫻島を出發、右手對岸に四郎作澤が注流してゐる。此の左手の山稜ガンカク尾根は、蝙蝠岳へ登降する事が出来る。十一時五十分、ついに小西俣と中俣の合流點、慣合へ着いた。

小河内岳と富士見臺(二七二〇m)の中に屹つ頂稜(二七八〇m)より東に派出されてゐる大きな山脚が、正面に聳立し、廣い河原をなして、本流小西俣は、左へ低平に入り込み、直ぐ左へ曲つてゐる。右は中俣の溪が、狭くやゝ勾配を見せて切れ込んで

ゐる。

中間の砂段丘にはカラマツ、カワヤナギ、ヤマハシノキ、シナノキ、ブナなどが生えて林をなし、カラマツの二本が高く立つてゐた。

此處から北に眼を轉れば、中俣の溪の奥、藍黑色の襟を合せた様に重なる山稜の上へ、褐色峻々たる鹽見岳の岩峰が、スツクとその一端を覗かせてゐるのを仰ぐ。

慣合から小西俣を溯り、その水源に野營して、荒川前岳(三〇四〇m)に登り、東岳を往復して大倉小舎に宿營するか、又は、支溪魚無河内を溯行して東岳、荒川岳の鞍部に到る行程は、登山者のよく試みる所である。

荒川岳の山名は信州側の稱呼であり、甲州、駿州共に其の稱呼は無く、曾つて南アルプスに於ける登山の草分け時代、甲州湯島から連行した案内者が、魚無河内の山嶺である事を知らせてより、其の山名の起因をなして今も多く通稱せられてゐる。但し信州大河原方面では、古來荒川大明神の信仰が行はれ

て、荒川岳(中ノ岳)荒川東岳の山頂共に其の小祠が現存してゐるのである。

小西俣の川魚(いわな)は、魚無河内の支溪附近まで、中俣も北俣合流の少しく上流までよりは生棲してゐない。

慣合より、山稜を三伏峠に到る山道は、明治七年に開鑿せられたと云ふ、南アルプス横斷の通路である。

慣合の山の根には、往時二つの山小屋が在つた。

その一つは二間に九尺位、太いカワヤナギを打ち込んで柱とし、樹皮で屋根を葺き、樹皮や草で壁を拵へ、中には二升炊きの鐵鍋さへ備へられて、岩魚釣りに來た甲州や信州の山人が、たま／＼合宿する所であつた。

夜は小屋の中で榻火を圍んで、獲物の多寡を比べたり、時にはお國自慢の話に花を咲かせた事もあつたであらう。

今は此處に新しく、伐採小屋が建つ事になつてゐる。但し、以前小西俣の上流に伐採があつて、木材

を流した爲め、いわなは著しく減少し、昔を偲ぶ慣合の小屋の跡形もなく、たゞ川瀬の音が悠久に溪間を物淋しくゆるがせてゐる。

二 中 俣

中俣の溪は大石が累々として狭く、勾配も急で、如何にも山溪らしい趣きがあつた。路は全く無くして、溪沿ひを溯るのである。

慣合で小西俣を渡り、中俣へ入つて二つに分れた流水の中洲を進む。溪は狭く、流れは河中の大石に激して奔走する。併し、水量は甚だ少くなつた。

右手に溪を渡り、北俣の合流點で北俣を渡り、そして其の間の一寸上つた所に建てられた北俣小舎へ着く。十二時二十分。

丸太組み、大いさ二間の一間半。荷が重く、緩歩すれば、此の登山小舎は二軒小屋から一日の行程であらう。この小舎から北俣を溯り、北俣岳(二九四〇m)或は鹽見岳南山稜を登攀して、鹽見山頂から雪

ナデ澤へ野營する事は登山の一つのコースである。北俣小舎から、中俣を左に徒渉し、又直ぐ右に涉り、右の岸の悪場を、樹林の中を捲いたりして約二十分も辿る。それから左、右、左、右と河流を涉つて行く。礫に中洲があつて、ミヤマハンノキなどが林をなしてゐる。

左手のガレから礫を進み、中洲を過ぎて水を右へ涉ると午後一時二十五分。溪は廣々と明るく開けて左より小流が注ぎ、川楊多く、大きな石が累積してゐるが水量が少くて涉るに躡を濡らすのみである。

左に崩壊を眺め、河原の砂地にカワヤナギ二本立ち、礫はいよ／＼廣く、バツコヤナギの大きな一本が生えてゐる。右手對岸にも崩壊が見えてゐた。溪は左へ曲り、直ぐ右へ曲ると、右手に素晴らしく大崩壊を観る。二〇四〇m地點である。午後一時五十分。左岸の陽射しのやうに突出してゐる岩の下に佇むで暫らく休む。

この土砂の推出しは約五六十年前のもので、溪は一時堰き止められて池水を成した事もあつた。夏季

減水の際は、流れは礫の土砂に伏流し、そして後豊かに湧出してゐるのを見る。

此の大崩壊を過ぎて、暫く行けば、河原中に、徑五、六寸のカワヤナギが林をなし、溪は幽暗の氣分をこめて狭少となり、溪谷は、左、右、左、右と曲折し、流れをどし／＼涉つて進む。

谷が、左へ急折する處に右から小流が注入し、その直ぐ手前の右の突當つた岩壁下に天然の石小屋が在つた。三、四名は宿營し得らるゝ上等のものである。二時三十五分。

普通登山旅行としての行程は、二軒小屋から此の中俣石小屋までが充分な一日路であつて、若し三伏峠まで行き着かうとすれば、軽身、小人数、健脚、強行を條件としなければならぬ。

もう此處迄來れば、山は針葉樹、ツガ、シラベ、トウヒ、カラマツなどを主として、サウシカンバ、ヤマハンノキ、ナ、カマドなどが生え茂り、それにスルギヘウタンボクが雜つてゐる。

三時十分。石小屋を出た。直ぐ左に屈折する所で

小澤を合せ、十分の後鹽見澤の合流點、更に十分にして、權衛門澤となつてゐた。

鹽見澤はや／＼右に曲つてゐるが、鹽見岳から直降り、雪崩の危険はあるが、徒歩或は冬期スキーに依る登路として最初の記録をもつた谷である。

權衛門澤から左に岐れた溪は三伏澤である。前者よりすつと勾配が急で、石の上を渡りながらら谿を溯行していつた。

コメスキ、ノガリヤス、オシダ、クマワラビ、トリカブト、モミジハグルマ等の雜草が葉枯れ、兩側はサウシカンバ、ナ、カマド、ミネカヘデが、黄紅葉美しく地に伏すやうに生え、それを蒼黒いシラビソヤコメツガが縁取つてゐる。

一匹の野兎が脚に突當るやうに飛んで來て、草の間にかくれた。

大きなはこねさんしようをが、よく踏まれた谿の小徑を這つてゐる。

箱根山椒魚

(Onychodactylus japonicus Hout) 有尾目、山椒魚科。蛭類に似た形であるが鱗無く、多くは小さく、背は暗褐色、中央に一條の廣き黄紅色帯があり、腹は淡褐色で白斑あり、五月産卵する。南アルプスに於ては、各溪谷、支流皆これを産するが、西俣には特に多いらしい。

鹽見岳の塊偉な山容を反り見ながら、出来るだけ歩みを早めて三伏澤をひたすら登る。と、午後四時半といふのに、もう三伏小舎が眼の前に現はれて来た。溪の水の盡きる所よりなほ五六十間を隔て、新設登山小舎はトタン葺き、板壁の四間に二間四尺、相當にしっかりとつたものである。

小舎の板敷に安着の腰を下し、今日の強行の疲労を休めたが、人夫はその暇も惜しみ忠實に薪を集めたり、小舎に備へられたバケツをさげて炊事の仕度を始めた。

空は午後より漸時怪しくなつて来て、雲の往來繁く、夜に入つて遂に雨となり、山の雨脚は、鋭く小

舎のトタン屋根を叩いて、アラレの如く、豆を炒る如く、礫の如く、終夜、宿營の寂漠の暗を掻き亂した。

三 鹽 川

三伏の小舎は遂に雨に暮れて、雨に明けた。小舎の傍側の水路は、平常水のない空澤であるのに、昨夜より俄かの出水で、雨水は音立てゝ流れてゐる。

悠々滞在する餘裕を持たなかつたこの場合、躊躇してゐるのは、かへつて危険となつたので、雨中の三伏峠を下山すべく、午前七時、小舎を後にして峠を指した。三伏澤上部の浅い溪をなす凹地は、平常は水なく、あたり一面草深い爲めに、草洞と稱ばれてゐる所である。

小舎の背後から、間もなく凹地を左手に分れた小徑は、富士見臺(二七二〇m)から小河内岳への縦走路で、小西俣の水源野營地へ一日。鹽見岳方面へは、別に小舎の下部より山腹の木立の中を辿つて本

谷山の南鞍へ通じ、權衛門岳(二六七〇m)の南を捲いて、鹽見岳から熊ノ平野營地(二五七五m)へ一日の各行程であつた。

サウシカンバやミネカヘデ、タカナナ、カマドの黄紅葉が、雨に煙る山上を點晴してゐる。

右に石間を綴る澤山な偃松叢が現れてきた。三伏嶺(二六一五m)の斜面である。

左手に、樹立の絶えた草地があつた。其處を進めば小河内川に臨んだ大きな断崖の上に達し、小河内岳を真正面に、谿谷を瞰下すると身震ひするやうな恐怖を感じた。峠路は、更にシラビソやコマツガの木立に入り、三伏小舎より二十分にして、鹽川の谿に面した峠上へ達した。

こゝは、赤石山脈主幹の頂稜を超えて、南アルプスの横断路を扼し、標高約二六〇〇メートル、北アルプスの針ノ木峠よりも五〇メートル程高く、峠路としては實に本邦最高のものである。

伊那の平原を脚下に睥睨して、遙かに木曾駒連嶺に對し、眼界は素晴しく廣濶たるものであつたが、

此の時は降雨の中とて視野は霧に全く遮られ、シラベ、トウヒの梢を垂れる大粒の雨水が、雨具の袖をしつとりと濡した。

峠上から西へ向つて、豊口山へ續く山稜の、樹立の中の急勾配をジクザックに十分程も降ると、左大河原と、右鹿鹽との分岐路へ着く。鹽川の雨中下山は、多少危惧す可き點もあつたが、意を決して右手に鹽川の降路をとつた。

針葉樹林中の極めて急な踏跡を三十分ばかり降ると、鹽川の上流、南澤の水源へ着き、平常あまり水の無いこの澤に、雨水の奔下するのに驚き、その右手の草叢の踏跡を急ぎ降つて行つた。

谿は可成り急斜だつた。降るに従ひ、谿の水は増大し、右手から北澤を合せる頃は、小石の推出した河原を、左右に横切るのに多分の不安を感じる様にさへなつてきた。

午前八時半。やうやく右岸に作られた伐材搬出の古い林道へ出たので、安堵の思ひにひたる。林道は可成り壞れてゐる箇所も有つたが、左岸へ或は右岸

へ渡された橋渠はまだ通行には支障なく、益々奔騰する谿流に沿ふて、雨の中を急いだのである。左岸へ、奥水無澤、前水無澤などが注ぐ。兩岸岩壁が狭く迫つて、峽門をなした所が一ヶ所あつた。そして左岸の道に添ふた小屋には、山仕事の村人數人が詰めてゐて、雨中に山奥から歸る異様な二人を怪訝な顔で見送つた。

谿の勾配は漸時少くなり、右又は左に曲折して、やがてカンバ澤のほとりへ出る。九時半。

合流點には、大規模な製板所が建つてゐて、木材のせつばや挽糟が小山のやうに積まれてあつた。

此處からは、木馬道となつて、入澤井の船方澤まで續いてゐた。船方澤からは簡単なケーブルが、對岸高所の入澤井へ架かつて、製板を運搬してゐる。十時。遂に澤井の里落へ來た。

石を置いた板葺家が、山腹の南斜面に乏しく散在する。鹽川の谿谷の奥に聳ゆる本谷山を顧みようとすると、雨に模糊として煙つてゐるばかりである。赤石山系を覆ふ廣大な秩父古生層は、此の邊より南

北に狭長な結晶片岩の地層となり、鹿鹽川に到つて片麻岩を構成してゐる。そして澤井には本邦には珍しい鹽類石 (Argonite) を産出する所があるが、現今殆んど採集し盡されてしまつた。

里道を辿れば、鹽川を渡つて、左岸に鹿鹽鑛泉の旅館が建つてゐた。山鹽館に鹽湯館の二軒、可成り設備は整つた山の湯宿である。

鑛泉は、鹽川の河畔から湧出する鹽水である。太古この山中に鹽の無きを憂へ、建御名方命は附近の最高峰に登つて十七日の間鹽を乞ひ給ふた、と云ふ傳説がある。鹽見岳の山名起因をなしてゐる (一説には海が見えるに依る) が、鹽水の湧出に依つて、鹽川や鹿鹽の名が生れてゐる事は事實である。

それに就いて、此處にあへなくも淋しく一生を終へた人の苦闘の生活が語られてゐる。

鹿鹽市場は鹿鹽川の東岸で鹽川が合流する地點にあつて、商家が數軒並んで居た。橋を渡つた鹿鹽川右岸の街道は、北は分杭峠から市野瀬を経て九里の高遠に通じ、南は大河原へ一里餘、大島驛へ五里餘

と測られてゐる。

小澁川の合流點、落合の村家を過ぎ、河岸の鹿鹽片麻岩に開かれた道を桶谷まで來ると、小澁川の増水して渦巻く濁流の物凄さ、降雨中の赤石下山を想像すれば、小澁川の徒渉が空恐ろしく胸中に影じてくる。

落合には大鹿村役場、旅舎、休茶屋、製絲場などがあつた。近年此處の製絲場の煙突へ、山の珍鳥、佛法僧が飛び込んで死んだといふ話があつた。南アルプスの山中にこの鳥の住む事は確實らしい。

佛法僧

(*Eurystomus orientalis Calornyx sharpo*) 攀禽目

佛法僧科。夏鳥。南洋方面から渡つて來るのであるが、棲息地は極めて尠く、高野山、日光山秩父、富士、木曾山中、九州英彦山、三河寶萊寺山等が識られてゐる。形態は鶇よりは少しく大きく、羽色は美しい青色で斑紋があり、嘴は強大で脚と共に赤い。高い樹木の空洞に營巢し

純白色の卵を三個位生む。

弘法大師の性靈集に、後夜聞佛法僧鳥と題しこの鳥を特に高野山に結びつけて有名になつた文句がある。

閑林独座卓堂曉 三寶之聲聞一鳥
一鳥有聲人有心 聲心雲水俱了々

十二時桶谷の商店へ寄つて、濡れた身體を楷火に暖まり乍ら晝食をとる。そして午後一時出發、小澁川の左岸に渡つて北條坂を登り、鎌倉峠の茶屋も側見すらせずに過ぎ、部奈から天龍川畔に降つて、一日數回往復すると云ふバスをも待たずして、そのまま長大な福與の釣橋を渡り、天龍西岸の數階をなす河段丘にある元大島の古町に着いたのは午後五時。伊那電車大島驛前の旅舎宮坂屋へ入つて、ともかくも濡れ浸つた登山衣を脱ぎ、宿の丹前と着換へ、そして秋の雨の寒さから遁れたのである。

* * * * *

赤
石
澤

赤石澤

兎岳の小闊い山頂は、三つの階段に區切られて、東西に走るその斷層線が明らかに現はれてゐるのが眺められる。

そして、北へ二つの隆起を浪打つて中盛岳（二八〇六m）大澤岳と山頂を並列させ、東へ直角に百間平（二七八〇m）の平頂峰、それから南アルプスの盟主、赤石岳へと續き、南には権峰聖岳を据ゑ、この錚々たる南の山の俊剛に圍繞せられて、赤石澤の水源は、古來祕奥の峽谷を、氣味悪く、地殻の底へ刻み込んでゐた。

兎岳と聖岳の鞍部は、南に向つて、遠山川の西澤に恐ろしい懸崖と崩壊を觀せて、細く深く切れ込んでゐる。北は赤石澤の水源、奥赤石澤へ通する小澤である。ハヘマツ、タケカンバ、ミヤマナ、カマド、ミヤマハンノキなどの繁茂する山の傾斜地に、細い

水なし澤が下つてゐる。

午前十時。西澤の吹き上げる烈風を背に、赤石澤の溪谷指して降つて行く。急な石間の下り、樹下の草地、コメスキ、トウヤクリンドウ、イワワウギ、ヨツバシホガマ、シラネワラビ、バイケイサウなどに、陽熱強く、むつとするほど山の温氣を放散してゐる。

鞍部から約十分の所に水が湧き、それは直ぐ絶えて再び湧出してゐた。そして其の水が無くなる頃、左より急斜をなす溪と合致し、なほその先に於て、やや多量の水の流れる溪と合流する。其の時十一時であつた。

このあたりは、タケカンバ、ミヤマハンノキなどの闊葉樹でかこまれた小闊い草地で、姫白蝶や高嶺黄斑持蝶が飛び、高山植物として、クモマノガニツ

リ、タカネハルガヤ、タカネイチゴツナギ、タカネガニツリ、タカネソモソモ等の禾本科や、アラカワワウギ、タカネコンギクなど、赤石岳を中心として南の山の稀品を此處に發見する事が出来る。

アラカワワウギ

(Achnogalus arakawaensis Takeda) 豆科。白馬ワウギに比すれば、托葉は細尖形をなし、花梗は稍々長く、莢は二室となつてゐる。

タカネイチゴツナギ

(Phyllostachys alpina L.) 禾本科。多年草、高さ三寸乃至一尺三寸、莖は直生、葉は概ね基部に生じ、硬質線形で、縹澁緑、下部舌片は短形截頭、毛綠色。

タカネソモソモ

(Poanuda Hack) 禾本科。多年草、高さ六寸乃至尺、小穂三、四を付く、花は淡褐綠色である。

凹地の石河原を水が流れてゐる。佳きキャンプサイト。

此處からは、兎岳や聖岳の頂稜は全く見えず、其處は赤石澤の水源として、どこ迄も閑靜な淨地そのものの如くである。

寂光は蒼い空に燦々と輝く。

二十分休憩して、下流に向ふ。このあたりは、溪は極めてよろしく、水量も少く、徒渉なくして進むが出来た。

右手に聖岳の高い頂稜を望む。すると、右岸に、奥雪溪澤がやゝ同量の水を落してゐた。聖山頂の北面に有る恒雪より湧く水であつて、三丈位の瀧をかけてゐる。この邊から左手の眼前に、大きな赤石岳の山容がすつかり眺められる。何となくあたりは雄大な景觀をもつてゐる。

もう一つ瀧のある小溪が右に注ぎ、溪谷は北に曲折して、赤石屏風となり、先づ左岸の眞赤なラジオリア板岩の屏風をへづつて、右岸へ渡り、右岸の赤い岩壁下をへづつて、赤い兩岸の岩の門戸、U字

峡赤石屏風を通過する。

澤は右に曲る。左岸の岩壁はオーバアハングをなし、そしてその先きで、百間洞より來る支流が合流してゐた。十二時二十分。

そのあたりから、溪谷は一帶に、ラジオリア岩の赤い岩石がおびただしく現れてゐた。

そしてこの赤い岩盤に、蒼い溪流が瀾となつて渦巻き、或は激し、又は白くたぎり落ちる景況は、確かに他の何處の溪谷に於ても見られない、華麗な、素晴らしい奇觀である。

溪谷は、進むに連れて、流れは急瀬となり、一、二、三と小さな瀧(約一丈位の高さ)を避けて行くと、右岸に、赤い岩石のガレが懸つてゐた。流れは淵をなしていよいよ歩き難くなるらしい。

その先きに、三丈程の瀧つ瀬が二つばかり續くので、右を捲いて越え、それから左へ移つて、左岸の岩塊へ、蝙蝠のやうにひらびつて過ぎる。大きなコメツガの倒木が左岸より右岸に掛つてゐた。橋のかはりとして渡る。

午後一時。左より、赤石岳と百間平の間より發する裏赤石澤が注いでゐた。

今迄あれ程多かつたラジオリア岩は、此の邊から急に尠くなつて、その漂石のみが少しく硬砂岩の大塊に介して散在する。

右岸をへづれば、やゝ大きな美しい淵が現れ、左より二本の小流れが落ちてゐる。

二つの小突起ある巨石が左手寄りの川中に見え、右より小澤が注ぐ。

なほ進めば、溪は兩岸の岩壁が迫つて前進を阻止し、流れはその岩罅に吸ひ込まれるやうに消えてゐた。

依つてやむなく、右手の岩に攀ち登り、この難所を捲いて通過すれば、其處は今迄に無い素晴らしい大きな淵をなしてゐて、流れは低い、併し美しい瀧を踊らせてゐた。大淵瀧と云ふのである。岩壁の配置も見事である。午後一時半。

なほ溪を下れば、左手寄りに家根のやうに突き出した大きな赤いラジオリア岩が在り、このあたり



再び此の赤い岩石が累々と亂積してゐて、奇觀を呈し、溪谷はすっかり赤く染められたかとさへ想はれる。

三つの小瀧（上三ツ瀧）を過ぎ、左手の水の無い河津を経て行くと、右岸に大雪溪澤が注いでゐた。矢張り聖岳の北面の恒雪地に湧く水である。高い瀑がこれにかゝり、合流の水準點を異にする、所謂懸垂合流となつてゐた。

赤石澤の水量は漸時加はつて來た。

中三ツ瀧を後にし、赤い巨岩（赤石家根）の左に突出してゐるあたりは兩岸が壁となつてゐるので、河中の岩石の上を飛んで渡る。右より左、そして又右へ。

大きな瀧は湛へられ、次いで流れは河中の石に堰き分けられて、三本の瀧となつて落ちてゐる。

溪は恐ろしく悪場になつた。

又、小瀧がある。溪間は赤い巨石を三つも積み重ね、高さ約一丈五尺、ザイルを持つて先づ荷を降り、そして石をづり落ちる。

午後三時。兩岸には岩の壁が続いてゐる。

急瀬を突破すると、また小瀧がかゝる。仲々容易には歩けない。

河中の岩から、先づザイルで人夫を先に降し、次いで、その背に頼つて流れの中へ脚を着ける。ヒヤリと冷たい溪水が、身體中にしみ渡つた。

大きな瀧が現れた。その儘は進めないで、左へ捲いて行くと、右岸に小雪溪澤が瀑をなすつゝ落ちてゐた。

聖岳の北面より發する小支溪が、いづれもかうした懸谷 Hanging Valley をなしてゐる事は、氷河の合流點等に恒例の形式であつて、いさゝか興深い事である。

左からも支溪が注ぎ、下三ツ瀧を左に捲いてすぎると、右岸よりボウレイ澤が瀑をかけてゐた。

兩岸は再び狭く閉ざされ、水流は狭少の瀧となつて、岩罅から瀧壺へ滔々と落ちてゐた。地獄瀧である。右岸は見上ぐる絶壁、左岸も又高い岩だ。左の山腹へ這ひ上つてこれを捲く事とする。其處の岩の

間に一頭の、羚羊が落ちて斃死したらしく、もう中半白骨となつてゐた。四時、登りにかゝつた。

シラビソはなく、コマツガにゴヨウマツの雜る樹下に、蔭濕な蘚むして、ギョウジヤニンクノ葉が青く繁つてゐた。

大きな山腹をへづつてから溪に下る。四時三十分左手より小澤が入つてゐる邊へ出た。

大岩をさけて右へ涉り、左へ渡る。

溪は三度び峽門をなして、兩岸は峭立し、溪水は物凄く岩壁の彼方に落下奔騰してゐる。絶對絶命、通行し得可くもない難所である。

左岸の山腹を捲く考へで、其處のガレを攀ち登ると、ガレの東端に立つツガの樹幹に、大きく鈍目が記されてゐるのを發見した。道もなく、様子も知らぬ深林や溪谷に於いては、何より氣強い通路の目標は杳人達が樹幹に一打ち刻むこの鈍目である。

鈍目を記されてゐる所には、常に必ず活路が拓かれてゐるのが例である。

ガレの西椽を見渡すと、矢張り樹皮が明らかに剝

がれてあつた。そこで、この鈍目について等高線の山腹を別けて東にへづつて行つた。

五時十五分、ついに古い山徑へ出た。是れは先年赤石澤に發電計劃があつて、その水源調査として僅かに山道を拓いたそれである。

右手の脚下に、險惡無双の峽疏を瞰下しながら、解放された心持ちで進んで行つた。溪音は高く響いてゐる。

聽て、溪間には伐採木を流すに用ゐるテツポウが新しく架けてあつた。

その小さな番小屋に、今まで人の氣配があつて、炭火は灰の中に赤く燃えてゐる。

小徑がある。この人の踏み跡を辿つて、なほ右岸を進み、橋を渡つて左岸に移り、古い人夫小屋のほとりを経て、河原の小道を行くと、左手に赤石支流の北澤が合流してゐた。六時。

赤石谷溪の最も悪場は、實にこの北澤以奥、地獄瀧邊までの間であつて、河津をそのまま溯る事は全く不可能とされてゐた。

併し、それ以奥、又はそれ以前の溪間と雖も、どこにも容易に人の通行を、許容するやさしさは見られなかつた。

北澤と本谷の挟む山稜は、適當な赤石岳登山路として、赤石岳山頂の東端へ出るのにさまで困難はななく人を導いて呉れた。

其處を経て右岸から左岸に移ると、物資運搬の通路が左手の山腹へ登つてゐる。再右岸へ徒渉し、小徑をへづると、第二のテツボウが作られて、溪水は満々と、蒼く深く湛へられてあつた。

テツボウの上を通つて左岸に移り、もう陽は暮れて溪澗は何時か薄暗く、徑を極度に急いだので、六時三十分には、人夫小屋へ着く事が出来た。可成りの強行である。

大きな山小屋で、其處には伐採人夫達が約二十人も任んでゐた。

快く迎へられて仕度を取り、廣い圍爐裡の焚火に暖まり乍ら、溪流の徒渉で濡れた衣類を乾かした。奨められるまゝに風呂を浴びる。その山小屋の小

庄屋(帳付掛り)は深切にも丹前まで出して貸して呉れた。

未知の幽谷をさ迷つて、慥からずおびやかされた気分はすつかり放散し、思ひがけない人夫小屋に宿泊する好運を得て、自然、安易、悦樂の贅にひたされる。

小屋には一人、中年の炊事婦が居て、辭退するのにも拘らず、夕食の膳立てまでして呉れて、恰も客分の扱ひを受けるのだつた。

小屋の人々は固より東海紙料會社の支配する大倉山林伐採の山の勞働者達である。

毎年、四月中旬頃、此の大井川の奥上流に入り込んで伐採に活動し、九月中旬の目下は、溪流に木材を流す爲め、テツボウの仕事に従事してゐた。

小屋は即ち會所である。會所毎に小庄屋が選ばれて會計をなし、庄屋はこの數組を率ゐて會社と伐採木の請負ひをなし、配下が伐採期中生活の物資を一切引受けてゐる。

伐採人夫を柚と云ふ。柚は九月に入るとテツボウ

を使つて木材を大井川の本流に流出し、川狩をなしつゝ、滞留するものを漸時下流に送つて、十一月の下旬島田町向谷の河港にまで到り、一ケ年の仕事を打切つて會社から庄屋の手を経て賃金を受取るのである。

炊夫、或は炊婦は各會所に雇はれて働き、運搬夫は日雇と稱し、樺島の會社事務所、並びに各會所等へ物資の運搬をなしてゐる。

伐材と運材

明治二十年の頃までは角材を主とし、其の長さも二間乃至四、五間餘りに造材されたと云ふが、現在は丸太の八尺位のもの大部分を占めてゐる。用途が建築材よりも板材となり、集材運材に便利の爲めである。伐採方法は、先づ木立の根元の樹皮を一、二枚剥ぎ、受口に斧を入れて反對の側より鋸を使ひ、傾斜地は上の方へ倒し、そして根切、枝打、剥皮し、最後に之を玉切つて溪流に落すのである。

大井川上流の運材は山出しと大川出しの二つが聯繫され、山出しは、棧手、修羅、樋、鐵砲が用ゐられ、大川出しは管流と筏流しの二方法が行はれてゐる。

テツボウ(放流堰)は小溪谷に於てよく見る設備である。即ち溪の兩岸に届く葦卸しの家根の如きものを作つて溪水を堰き止める。其の構造は、數本づゝの丸太材(足)を以つて斜めに丸太(壬)十數本を支へ、これに横へ多くの丸太(ケタ)を渡し、縦に水ゲタを組み、丸太(矢來)を横に隙間なく並べる。そしてそれに土砂を盛つて水の漏れるのを防ぎ、中央の底には板を以つて大きな樋を拵へ、開門を設け、満々と貯溜した溪水を、落しに依つて一時に放流するのである。

赤石澤のテツボウは、直立三間半、幅二十間費用約五千圓を要してゐる。

普通、テツボウは、一ヶ月以上の手間と二千圓位から約一萬圓までの設置費を要し、八千坪

からの水を堰き止め得ると云はれてゐる。
使用期間は五ヶ年位のものだと云ふ。
護岸を害し、木材を破損し、水産をそこなひ
發電事業に支障を來す等、幾多の缺點が擧げら
れてゐるが、山間溪谷の運材には唯一簡便な方
法として現今盛んに築設利用せられてゐるので
ある。

この夜は、人夫小屋の人々の厚い好意に依つて、
夜具まで提供せられ、山の夜を暖かく、安らかに送
つた。夕方から、雨がしとしとと降り出してきた。
翌朝午前五時といふに、もう炊事婦は起きて働い
てゐた。六時に人夫は小屋を出發して、二ヶ所のテ
ツポウへ配置し、雨の中を厭ひもせず、先づ上流の
テツポウを、時間を定めて切つて落すのである。
そして、小屋の少しく上にある第二テツポウの人
達は、上流の増水を待つてゐた。
暫らくして、溪の上手は白く泡立つて、堰水が一
時にどうと押寄せて來た。

第二テツポウは此の水を受けて、上縁りから溪の
幅だけ白い水布をかけたやうに、瀧をなして落下す
る。

此の瀧が一段落となる頃、その第二テツポウは、
四、五人の人夫に依つて、閘門のふたを排された。
満々と湛へた溪水は、樋口から一時にどつと流出す
る。溪は、隈なく水が漲満し、奔湍激瀨をなして下
る。それは見てゐて氣持ち良い程、何とも云はれな
い壯觀である。

かうした仕事を日に四、五回繰り返して、彼等の
勤めは終るのであつた。

テツポウの作業を視察し小屋に戻れば、炊事婦が
珍らしい山の客にと心から、朝食の用意を調べて待
つて居て呉れた。

それは米飯に味噌汁の、一食一菜の簡易である。
併し乍ら、その味噌汁の一碗の中には、貴重なイワ
タケの數箇が入つてゐた。

イワタケ

(Gyrophora escuelina, Miyosi) 地衣類。深山
の岩壁面に生ず。扁平の葉狀體で不規則な圓形
若しくは楕圓形をなし、直徑一寸位から三、四
寸に至り、表面は滑澤灰色、裏面は黒色粗糙、
其の中央に有る黒い索狀體によつて、岩に固着
する。生長遅々として、採取には多く懸崖を探
さねばならぬ故、甚だ困難にして、珍重さる。
炊婦は、この會所の組の柚の妻女である。水窪川
の戸中がその生地であると云ふ。

結局、人懐こい温順な、何所までも純朴らしい山
の女である。
山人等の厚遇を謝し、彼女に見送られて、伐材小
屋を後に午前八時頃。小雨煙る中を樵島へ向つた。
小徑は左岸の高所山腹を通じてゐるが、怪し氣な棧
道が多少の危険さを思はせた。樵島まで一里六町、
聽て此の道は、赤石岳東山稜の登山路の一六〇〇m
邊へ出てゐる。

左は大井川、奥西河内の溪谷、右は赤石澤の峽谷
を俯瞰して、鳥森山の峰頭に對し、晴天なれば周圍

の山々が、樹梢から一瞬に展開される地點である。
此の山裾に向つて急な山稜の赤石登山道をどしどし
降つて行つた。

降り切ると、其處が樵島である。午前九時。

大井川の溪と赤石澤は此の地點で急に甚だしくく
びれてゐるが、合流するに到らず、本流は鳥森山の
東側を、そして、赤石澤はその西側を巡り、ラジオ
ラリア岩の大きな岩石が累積されてゐる、上中下三
代島を過ぎ、ツクリ澤や、神ノ鳴合に於て聖澤を合
せ、かくして、釜ノ和田で大井川本溪に合流してゐ
る。其處まで樵島から一里餘の流程である。

赤石澤の溪谷!!

それは險惡と、深睿と、眞赤なラジオリア岩の
特色ある、高山の脚下に彫刻された構造谷としての
最たるものであつた。

南アルプスの雄赤峰石岳の山名起因が、山體を照
らす夕陽の色や、岩石に附着した赤い地衣類の景觀
に依つたものでなく、それは、この山麓を洗ふ溪谷
赤石澤に、夥しく露出發見されてゐるラジオリア

岩（赤色粘板岩或は硅岩とも云ふ）に依る、如實卒直な名稱そのものが、溪谷竝びに山名を生んだ事は明白にして疑ふ餘地はないのである。ある場所に於ては、この赤色の岩石は、溪谷の岩壁を朱塗りの樓門となし、或は赤屏風となし、累々と堆積し、散亂してゐる。

故にその破片は、大井川溪谷の下流到る所に散在し、遠くは東海道金谷町の古い洪積層の内にも土砂となつて織り込まれ、又、駿河灣に入る川口の砂礫中に於てさへ、水に運ばれて來たその小石を手にして、想ひを遙かに赤石岳の彼方へ馳せることが出来るのである。

聖

澤

聖澤

聖澤は、南アルプスに於ける溪谷の内、最も幽玄な趣きを備へてゐるものとして、一般に膾炙されてゐる。

決して長大な谿谷とはいはれないが、峻剛な聖岳と、秀拔な上河内岳との各東山稜の間に介在して、深奥の峽澗を形づくり、幾つかの瀑布を聯ねて、近年まで未知な溪谷がもたらす多分な薄氣味の悪さを期待されてゐた事は事實である。併し乍ら、最近に到つてこの溪は大井川方面から直接に聖岳或は上河内岳に登攀すべき必然のコースをなすやうになつてしまつた。

聖澤は、鳥森山の西南側に於て赤石澤に合流し、そして大井川に注流してゐる。此處を釜ノ輪田と云ふ。

大井川畔の通路は、釜ノ輪田にて二つに分岐し、

右は赤石澤の釣橋を渡つて鳥森山の東側を本道が通じ、左はその西面赤石澤の右岸を過ぎ、いづれも鳥森山の北端の樵島に到つて合致してゐる。

後者の道は、その後ひどく荒廢に歸してしまつたが、上、中、下三代島を経て、ツクリ澤を渡り、聖澤の合流點なる神ノ鳴合へ約一里弱である。

神ノ鳴合は赤石、聖兩谿谷の奔瀨が交流する溪澗であつて、如何にも一種神韻の籠るが如き幽翠の境地である。

聖澤溯行の企圖は、此處をキャンプサイドとして發足したのである。

九月中旬、氣温はC十二度であるから、キャンプの内に居ても寒々しい。午前五時。明るくなつたので起きて仕度し、六時半に此處を出立した。天候は佳い。

直ぐ西へ、古い林道の跡を聖澤に入つて行く。少しく登れば、聖澤の溪に面して、右手の奥へ、聖の二九七八・三m峰が三角形に尖り浪打つて高く屹つ。正面上に上河内岳も二六六〇mの峰頭をもたけて高聳する。

溪谷のギヤツプは、山皺に深く秘められ、直ぐ右に曲折してゐるらしい。

上河内岳と伊谷山(二四三八m)から流出するヒカゲ澤まで、河原を歩かれぬ事もないが、小徑は右岸に作られ、迂曲して、ガレの澤、小瀧の澤などを横切つた。

此處に在つた伐採小屋の跡と、壊れた鶏舎など、人間の生活の跡の片影は、一種の淡い哀愁を催せしめないでもなかつた。

ヒカゲ澤は等分の水を加へてゐる。その清流を掬んで休む。七時半。河原にはテツボウの跡などが見られた。

此處から直角に西北へ折れ、そして兩岸が、低い岩壁をなしてきた。

此の奥に、聖の檜ダ(瀧)があつた。狭窄された岩罅に、三段ばかり流れが落ちてはゐるが、落差は低少で、殆んど瀧らしい程の趣きはない。

左岸に徒渉してから檜ダを觀て少しく引返し、岩盤を右に避けてなほ溪を溯る。八時半。

河原が右に迂廻する邊で、流れに近い砂地の上に點々小兒の足跡らしいものが印されてあつた。正しく猿の蹠趾である。

溪谷の河原は大岩石が磊々と亂積されてゐるが、その中に極めて赤黒い色の大石を見る。即ち、南アルプスの古生層に含有されてゐるラジオラリア岩である。

小さな瀧(急湍)が四つほど列なつてゐる。

再び大規模なテツボウが造られてあつた。右方の岩を登つて、此のテツボウの上へ上り、左岸へ徒渉すると、頭上にヤマブドウの房が累々と吊り下つてゐた。黒い小粒の酸味に強い漿果に思はず手が延びる。

彼の猿公の足跡も又期せずして此處に續いてゐた。

ヤマブドウ

(Vitis Coignetiae Pulliat) 葡萄科。蔓性灌木。

葉は大形なるが、葉脈細くして淺く三五裂し、下面は葉も密生して褐色をなす。七月頃花を開き、黒き漿果を結ぶ。果實は食用、補血強壯劑であると云はれ、葡萄酒の醸造原料とする事も得。又、秋は紅葉の美觀を呈する。

左方へ越える。九時五分。天氣は頗る穩かであつて、河原に美しいきべりたては蝶が飛んでゐる。

此處を過ぎて進むと、谿は間も無く大岩壁の峽流となり、高さ一丈以下位の小さな瀧が、四つ、又三つと續いて現れる。そしてその峽谷の左に曲つた究極に、大垂の瀑が落ちてゐた。

高さ約百五十尺、滔々たる水音と、立ちあがる水煙とは、確かに聖谷の恠奇と深邃の趣きを如實に表示してゐるやうである。

その上になほ直ぐ小瀧が懸つてゐる。谷間に差し込む陽の光りで、しぶきに虹が現れてゐた。

兩岸は、造瀑層をなす粘板岩、角岩等の絶壁となつて、そのまゝ溪傳ひに前進することは全く妨げられた。

九時四十五分。瀑の近くへ往復したまでで晝食をとり、十時半、此處から直ぐに左方の尾根に取りついで極度の急斜地を攀ち登つて行つた。

盛んな瀑の水聲が、追ひ絶るが如く耳を襲ふてくる。イワカガミを踏み、シヤクナギの枝をかき別ける。伐採跡のツガの倒木が散亂する。暫くにして林道を發見した。それから樂に登つて、大垂の上流邊へ出ると、急な降り徑が再び溪澗へ入つてゐる。こゝにも又テツボウと小屋がけの跡とがあつた。十一時二十七分。

谿の状態はよく、そのまゝ前進が可能である。小さな瀧が五つほど續く。さしたる困難もなく、瀧を避けて河原を辿つた。

大小のラジオリア岩が無数に眼につく。十一時五十分。急瀬の落ちる所、泡立つ深い淵があつた。右手に小徑を進む。

シラカンバ、カワヤナギ、ヤワグルミ、ドロブ、カツラ、ブナの潤葉樹にシラベ、コメツガの針葉樹が多く混着してゐる。

左方に少量の水が岩を傳ふて注ぐ、石の上を流下する水は階段状の小瀧を作つてゐた。

顧りみれば、溪間の外に遠く白峰山脈笹ヶ岳あたりが、黒々と起伏して望まれる。

礫に積まれた大石を幾度か乗り超えて、谿を左より右に迂曲すると、岩塊の深い裂罅に、小垂ノ瀧が白布の如く落ちてゐた。午後一時。高さは約五十尺もあらうか。直ぐその上に、一丈位の瀧が見えてゐた。

堅固な造瀑層の岩磐を噛んで、幽谷の水は何となく、不思議な響をたてゝゐる。

あたりの岩壁は怪物の肌のやうに赭黒く光り、瀑は白い齒をむいて、キ、キツと笑ひつゞけてゐる。

小垂の岩壁を避ける爲め、往復二十分位手前で左より注ぐ急な支溪を溯つて行く。此の邊に岩の一寸した野營地が在つた。

石に抱きついて登るやうな急斜である。

支溪にはやがて水が絶えて、澤は二つに岐れ、右を取り、又別れて右をとる。カララヨモギやイタドリが多く生えてゐた。

高距はずん／＼増して来て、眺望はや／＼展げ、白峰山脈生木割山邊が眼に入る。二時十五分。カラマツ、ヤマハンフキ、コメツガ、シラビソの林相となつて、澤には崩壊跡が出て来た。そして澤は又二分し、右を執つてナギとナギの間あたりをへの分岐された尾根に逼り登る。二時四十五分。

正面には聖岳の山頂からその東山稜が、高く雄々しく美しく、視界を限つてゐる。

灰白色と黝黄色の岩石の構成する山體へ、草の黄緑と、偃松の濃緑と、山裾は針葉喬木の藍黒を巧みに粧ふて、山の容姿と云ふものは、それが何處から眺めても、どうして斯程に氣高く麗はしいものなん

もののやうである。

凄然としたしぶきに打たれて、早々に此處を退き、少しく引返して礫に休む。このあたりラジオリア岩は破碎されて、砂礫にまで赤く雜つてゐる。休んでゐると、朽木の影からチヨコ／＼と、小動物が逃げ出した。やまいたちである。

やまいたち

(Mustela erminea nippon Caqreca) 食肉目(裂脚亞目) 鼬鼠科。北海道に棲むえぞいたちよりは小形、大さ野鼠ぐらゐあり。夏季は大體灰褐色、腹部のみ白色なるが、冬季には雷鳥の如く前身雪白に變る。但し尾の先端は夏冬共に黄毛を生ず。本州中部の高山地に生棲する。一名オコジョ、或はヤマノカミノエンコなど、稱し、田代其他山間地方の柚や獵師は、これを見る事は、何等か不吉の前兆であると信じて非常に恐れる風習がある。

だらうかと想はれるばかりに、山の持つ強烈な魅力を投げ懸けて聳えてゐる。

聖澤の谿は山裾深く山嶺を合せて脚下に落ち込んでゐる。

此處から左手に、山の中腹をへづるやうにして漸次溪谷へ降つて行くと、小流を横切り、かもしかのみちを辿つたりして三時二十分、さして困難もなく再び聖の谿間へ降り立つた。これで小垂の岩壁と、其の上流の小瀧の障害は完全に通過する事が出来たのである。

下流を見れば、左手の山腹に岩塊が屹ち、峡谷となつてゐる。

前途は、兩岸とも崖壁となつて、岩の門戸を形造り、峽澗の徒渉を危惧されたが、案外容易に此處は通過されて、後はもう小廣く平な溪となり、直ぐ右手より奥聖澤が、聖山頂より出て注流してゐた。

少しく休憩して、又出かける。三時四十五分。左の澤を執る。此處はシラベが黒々と茂り合ふ。小瀧く平な聖平の森林である。蔭濕な下草や、蘚苔を踏

んで行けば、南澤と左に岐れて、暫く進み、四時二十分。ついに聖平の小屋場へ着いた。高さは二二五〇m、高い高い山間の廣い森林地帯である。北に巨大な聖岳の山嶺を背負ひ、南は上河内岳の山體が大きく控へ、西は赤石主脈の一端が巡つて、僅かに東へ少しく勾配をもつてゐる。

針葉の密林に圍まれてはゐるが、あたりは高潔で氣分は極めて明るく、前にはチロ〜とやさしく一條の水が流れてゐる。

此處に一つ、極めて粗雑な葺卸ツリシッの山小屋が建て、あつた。四、五人は潜り込める。

二本の太いシラビソを六尺位の上部から伐つて双方の柱とし、太い横木を渡して、それにシラベの樹皮と枝を葺卸しにした不完全なものである。側壁も樹枝で圍つてある。積雪にはたわいなく壞れてしまふらしい。

野營の焚火に用ゐたあたりの木立は、幾本となく伐られて、切株がむなく立つてゐる。シラベの枝を卸し、屋根や壁に補装して、又小屋

の中へ敷枝床フロスベツトとし、毛布をその上へ敷き展げる。枯枝、小枝が集められ、焚火の煙が、先づ紫にむく〜とあつた。落ついた、安易な、楽しい氣分を湧かすものは、宿營地に着いて、焚火の煙にこめられる瞬間からである。

高山地帯の燃料は大概、シラビソ、トウヒ、ツガ、コメツガ、タケカンバ、サウシカンバ、ナ、カマドミヤマハンノキ、ハイマツなどである。ハイマツは脂肪が多く、生のまゝでもよく燃える代り、火力が弱く、油煙が甚だしい。

シラビソやトウヒは質柔かく、之もよく燃えるがパチ〜と飛火がするので注意しなければならぬ。カンバの類は堅く、明るい焰をあげてよく燃える。徑三、四寸長さ四、五尺の丸太を横へ平行に積み重ね、枯れた小枝やカンバの樹皮などを焚付けとして火をかける。

燃料は固より豊富である。併し、所有主なくして無斷で伐採してよい立木は何處にも絶對にない筈で

ある。それを登山者が野營地にあつてのみ、山刀を揮ひ得る事は、高山に於てのみ見る原始的生活の片影である。貴い恵まれた自由さ、餘程深く心して、燃料蒐集をなさねばならぬ。

南の山へも、纏て登山小舎が完備して、燃料まで金銭で買ふ日が遠き將來でないことが想はれてならない。

針葉樹林に青草敷く美しい聖平の小屋場。野營地から人の跡を辿つて南へ進めば、約五分位にして赤石主稜の一鞍部に達し、遠山川溪谷の本谷に面した縁りへ出ることが出来た。その少しく右手に登れば、古生層のザレ地になつてゐて、砂礫は急斜の本谷へ落ちてゐる。

此處の眺望は珍らしく壯嚴なものであつた。南はやゝ左手から上河内、茶臼、仁田、易老、イザル、光、加々森まで、主脈の起伏を指點し、遠山川は脚下に深く切れ込んで、無数の氣味悪い山皺を織つてゐる。

背後は、聖岳續きの南山稜が、青黒いまでの針葉

樹の大きな尾根を推し出して、あたりには折損したシラビソの古木を亂立させ、背景へ、聖岳の巨軀がどつしりと大きく根を張つて控へ、高岳獨特の色彩と、その山容を見せてゐる。

この美しく、なつかしい山の景觀を飽かず收めて小屋場へかへらうとすれば、不圖、右手の木立の中から、トツトツと足音も軽く、一頭の雌鹿が現れて來た。上河内と茶臼岳の間の小平地に、鹿見平の名が與へられてゐる程この邊は野鹿の多い所である。

此方に人の居るのに氣づき、驚き狽て、急に遠山川の溪谷へ遁け込む鹿を見送り乍ら、樹下に敷かれた草緑りの、コメス、キ、イトキンズゲ、ヒゲハリスゲ、カニコウモリ、ミヤマハンショウズル、チフウロ、トリカブト、ミヤマアキカラマツ、其他の雜草を分けて、小屋場へ戻れば、午後五時。美しく夕陽は輝く。

忠實な、人夫の勤勞に依つて、燃料は集められ、焚火の上に飯盒は白い湯氣を上げてゐた。やがて夕食の終る頃、靜かに山の夜は訪づれた。

風も無く、穏かな眺である。

満月に近い月が、南澤岳(二六六〇m)の山嶺あたりより現れて、白檜の梢から山小屋をのぞく。

小屋は、そして此のあたりは、一面に晝のやうに明るく照らされてきた。

月は聖平の白檜の木立の上あたりを横にそれて、空の真中を區切つた短かいコースを執り、西の山稜の方へ傾いてゆく。

水に出入する海洋の月、砂に出入する砂漠の月、草より出で、草に入る武蔵野の月。これは又、シラビソの梢より現れて、シラビソの葉蔭にかくれる山の夜の月である。

音も無く、香も無し。小屋の前の小流れの音のみ潺々として、十二時。気温C二度。夜は寒く更けていつた。

x x

九月中旬の朝の空は晴れてゐる。気温もC四度。シラビソの薪に飯盒炊爨を済まし、準備を了へて、午前六時、聖平の野營地を出發する。

らしく凄壯である。併しながら、何人もこの岩に指頭の觸覺を試みたい一種の強い衝動を否むわけにはいかないかも知れぬ。

岩罅に湧き水が少しく流れてゐるのを見て、人夫はそれに駆け寄つた。

山頂から崩れ落した岩石のガレを掻き登る。八時よりこの登りを始めて、九時十五分。ついに聖岳の絶頂(三〇一一m)へ着く。天候良く、眺望又展げ、駿遠、甲信、飛越の山川原野を一眸の裡に聚めて萬遺憾がない。

山頂に於ける地理的の景觀は、登山者にとつては正に一幅の劇的パノラマでなければならぬ。大なる感激と、深き心酔と、多くの親愛とをもつてその一つ一つを認識する。何も彼も高潮した、山に於ける日の一瞬時であつた。

ウラシマツ、ジの紅葉で、山肌の紅く染まつたところがある。タケカンバの黄葉、ミヤマエンジュの紅葉と、その赤い實が青黒い偃松叢と入雑る。

山頂から東山稜、二九七八・三mの三角點へは、

聖平澤の小流を溯り、右手寄りに迂廻して、右より下る小澤の急傾斜を登る。

水なく、澤の盡きた所で、左に捲いて小針葉樹林の中へ入り、澤の頭へ出ると間もなく、偃松や岳樺の生えた石河原の尾根となつた。七時二十分。

潤葉は紅黄葉し、草木は初霜で少しく薄枯れてゐる。

その先の頂稜に、短少な偃松を踏む。顧れば、仁田岳とイザルヶ岳の間に信濃俣山、その双肩に奥黒法師と前黒法師岳を望む。

寒い風が吹いた。

聖平は低平に、針葉樹で黒々とうもれてゐる。岩稜は幅廣く、聖岳の巨峰に續く。シナノキンバイ、ミヤマダイコンサウ、コバイケイサウ、シラネニンジン、ウスユキサウ、ウラシマツ、ジの紅葉、コケモノの實。

遠山川西澤に直面した聖岳の崩崖は大きなものであつた。正に聖のジャンダルムである。赭黒く艶々とした岩壁の素肌は、肉を剃いで山の骨を露出した

やゝゆるやかに山背が延びてゐた。

其處は磊積する岩石と偃松叢と、高山草本の綴る頂稜である。

この頂稜の南側、三角點の手前で聖澤に面した山壁に、聖岳のカールとも稱すべき、地形の山懐ろが存してゐた。

カールは、氷雪の浸蝕作用がなす、圈谷氷河の幼稚な一様式であつて、本邦の過去に於ける氷河の問題を解くには、最も重要な一の鍵とされてゐる。

カールの存在する高距は、緯度の變化に依つて大いに異り、北緯三八度半の月山は、一五〇〇mの大残雪を止め、北アルプスに於ては約二五五〇m邊、木曾駒岳に於ては二七〇〇m邊、そして北緯三五度の南アルプスにあつては實に二八〇〇mの邊にカールを見るのである。

ヒマラヤの平均気温が今よりC一一度餘りも低下すれば、氷河はベンガル灣にまで達し、歐洲の平均気温がなほC三度餘も下降すれば、北歐地方は氷に閉ざされるであらう、と云ふ學說さへ唱へられてゐ

る。

氷河の生成に適した一の寒冷な氣候時代を肯定し、緯度の關係に従つてその位置を異にしたカールとして、聖岳に於けるそれは、本邦高山地の氷河遺跡の内、最も南端を劃するものであつて、北緯 35° 30' の位置を占めてゐるのである。

但し、半椀状の凹地を成すには、氷河氣温の消滅が他に比して早く来たものか、原形は析壞され、モレイン、ランドヘツカー等も、其の後の風化によつて今は甚だ明瞭を缺いてゐた。

南アルプスに於ては、北方仙丈岳の三箇のカールは最も表式的に原形を保ち、白峰の四箇、荒川岳の四箇はなほ形良く整ひ、赤石岳の二箇に於て形は非常に崩れ、聖岳の一箇は殆んどその存在をさへ失はんとしてゐる。

併し乍ら、本邦に見るカールの構成が、浸蝕に有りとすれば、その休止後の長年月によつて多大な風化と破壊作用を受けてゐなければならぬものである事は否まれない。

の如く深い迷盲の霧に掩はれてゐる。

今迄あれ程に満溢してゐた渾身の意識も元氣も、充足された自信も喜悅も強い誇りも、何時か一切が洗ひ去られた如く、其の荒れ果てた磧に取り残されてゐるやうな淋しい孤獨な自分を此處に發見しなければならなかつた。

彼れはいたく狼狽した。そして彼れの内心は激しく動揺した。けれども、彼れの内心にしみくゝと喰ひ入つて来る一種眞實な寂寥には、どう仕様もない恐ろしい力が加へられて行つた。

彼れは慈悲の救手を招く者の如く今迄のあらゆる記憶を叫び覺まし、急速度を以つてそれを廻轉させてみようとした。併しそれは結局徒勞であつた。彼れの心は益々痛い程の哀愁の暗に追ひ込められて行つた。

彼れは頻りに焦り、そして、茫然となつて竦んでしまつた。

彼れが萬里の波を越えて遠く異郷の空に滯る事約二ヶ年間、其の間一日一時たりとも頭に置

この時、南の山の重鎮、聖岳のその巨大な頂稜に蝸牛の歩みを進めて、高山の大氣に深く呼吸し、偃松の樹脂に酔つて、ガンコウランのふか〜と柔かい褥に腰を降せば、足元には一むらの、清楚そのもののやうなタガネウスユキサウが、只にこ〜と微笑してゐた。

彼れは不圖眼を覺まして、ベットの中で軽く背延びをした。そして意識の有る限りは、そうでなければならぬものやうに、彼れの心の裡に溢れてゐる歡喜、悅樂の餘温を、又も此のベットの中で復習しなければならぬ事のやうに感じられてゐた。ところが、それは全く違つてゐた。

彼れは靜かにその儘、もう二ヶ月間も下宿してゐるホテルの其の部屋を、當ても無く眼を見開いてちつと見詰めた。

漸く意識がはつきりとして来るに伴れて、彼れの心は妙に重く沈んで行つた。頭は全く空虚

いてゐない事はなかつた。歐洲大アルペンへ、登高の思念を敢行するのに精進した事も、數日前、ついにあの華やかな前人未倒の岩稜の初登攀を、フュレルと共に殆んど身命を賭して決行し、幸ひ成功して登山史上に一光彩を添へ、若い熱血を心ゆくばかり湧き立たせた事も、下山して登山口の村の多くの人々から熱誠な歓迎を受け世界の山岳界から絶大な賞讃を與へられ、そして、この村人が其の時の歡呼のどよめきは、今なほはつきりと其のまゝ耳の内に残つてゐる。……けれども、それが何んであらう。

態々、遙々と異國の旅に放浪してこれあるが爲めに習ひ、これあるが爲めに努め、苦しみ、寢食の暇も忘れず離れず、喜怒哀樂、彼れが半世の生涯は今ではこれあるが爲めに意義をかち得てゐるかのやうにさへ思はれてゐた、その事が……、それが何んであらう。

屈強な案内者の、職業的歩調の驥尾に付して氷河を涉り、老練なザイルにすがつて岩壁を攀

ち登る。そして山頂に到れば、山を征服したと云つて叫ぶ。それが自然界と何んの文渉にならう。偉大な山岳は如何なる意味に於ても、登山者などから征服される部分は毫もたない筈である。獨りよがり、こけおどしの山登りをして、社會の寶である、多くの時間と、冗費と勞力を浪費し、しかも何か大きな仕事でも成しとげたかの様に自ら心竊かに昂然とした氣分にひたつてゐる、その稚氣、その銜氣、恥ぢて死ね……。

彼れは、意外な自分の心境の變化と、生命の空漠さに身震ひして、狽て、寝返りをした。毛布の襟に觸れた指先きに、まだすつかり感覺が恢復されてゐないのさへひやりと胸に冷たく當つた。

村の道路に面した二つの窓に近く愛用のリュックサックと丁寧に巻かれたザイルが懸けられてあり、ベルネルオーバアランドの地圖を、張つた壁の下には、不斷に手離したくない程の

てられる。

故國にある家庭のこと、少しも思ひ残す事なく、張り切れるやうな希望に燃えて異郷の遠い旅に出立したこと、心身共にひたすらにアルペンを巡つて過ぎた滯歐二ヶ年間の夢のやうな歲月……強烈な希望と憧憬に焼きつくされて、そして自己の軟々たる氣心は、絶えずアルペンが放つ高貴な白光に合流してゐた。

併し今にして想へば、その間極めて緊張してゐた彼れの生活のうちに、微か乍ら鈍重な小淋しい或るものが何處かに隠くされてゐた事を、彼れは否定する事が出来ないやうに思はれた。

故國を離れる時に於て、或は航海の船の中で又は彼れの華々しかつた數日前の新登路征服の門出に際して、それから立派に成功して山頂に立つた其の強い感激の瞬間に於てすら、心の奥底に潜む一片の淋しさを見通す譯にはゆかなかつた。

彼れは今日迄の生活には其處に幾分かの際が

愛着をもつてゐるピツケルが立てかけてあるの

が彼れの眼に寫つた時、それが、彼れの精神に潑

瀾たる生氣を喚起せしむる絶對の糧であつた。

今迄とは相違して、恰も荒野に捨てられた廢

墟の殘骸の如く思はれて來た。彼れの眞實の生

活とは、何の關係もない物質がころがつてゐる

様に思はれた。そして今はそれ等は、何の意義

も生命もない今迄の彼れの無益な努力を責める

道具の一つ一つとして、厭はしく恐ろしくさへ

思はれて來た。何となく社會並びに自己瞞着の

世界が彼れの眼の前に於て他愛なくがらりと

壞れてゆくやうにさへ感じられた。

彼れは苦し氣に又寝返りを打つた。そして混

亂した頭を靜めて良く考へ直さうとした。が、

性急な彼れの本心は、瞬時も自らにその餘裕を

與へてくれなかつた。

彼れは急にベツトの上に半身を起した。そし

て薄つすらとにじんだ額の汗を掌で拭ひた。そ

うし乍らも、次ぎ次ぎと絶對な考へに驅り立

あつたのではないかと意識された。そう云へば初登攀に見事成功して多くの人々から絶大な歡迎を受けた時にも、彼れは自分の心の奥深くわだかまる或る一種の不滿を否む事が出来なかつた。

而も此の内心の不平に對し、自分は今迄曾つて一顧の考慮を與へた事があつたであらうか。

今迄の彼れの突つめた生活は、其處に一脈の淋

しい彼れの内心の衝動をやさしくも自ら耳傾け

てやる親切さがあつたであらうか。

それを必然の事、或は何等かの反映と見做し

或は自分がなす巧妙な妥協に依つて、一種の自

己瞞着に墮してゐたのではなからうか。

何時かベツトより降りて、部屋の窓際を無意

識に往復してゐた彼れは、其の双眼に押へ切れ

ぬ悲痛の涙を堪へんばかりにして、閉され窓の

ガラス戸にかゝる、白いカーテンに顔を推し當

てた。

彼れは限り無く物淋しく遺瀨なかつた。そし

て其處から湧き出づる山の泉のやうな滾々として盡きぬ心の苦惱を持って餘し兼ねて悶えた。

此の苦惱があればこそ、今日迄その羈絆から遁れよう、遠ざからうとして彼れの内的生活は極度に突つめられていつた。その時いつもその對照として彼れの前には山岳が有つたのだ。そして其の事は、ついに彼れをして前人未踏の登路、幾多世上の有數な登山家が可成り用意周到の下に企て、成らなかつた險惡無双の岩稜、恰も死の扉を攀ち登るが如きそれに、彼れをして向はしめた。

彼れの逼迫した生活が、最後にぶつかつたのは、この死の岩壁である……そうだ、それは彼れに結局、淋しい、併し清純な喜びの自殺を、如實に教へて呉れたものだつた。

彼れは強く眞實に生きんが爲めに、自ら小我を捨て、小さな生命を斷つて、永遠な生命の一道を辿る可く、自己が力量の有らん限りを盡して、其のロツク・フェイスを攀ち登つたのである。

る。單に登り度くて登つたのでも、下らない理屈の上から登つたのでも、又——其の他何の爲めに登つたのでもない。そうした事が好きであるからなど、云ふ事は通り越してゐる。それは彼れが渾身から出た生命の、實に己むに己まれぬ欲求からであつたのである。

彼れは明るい生を想ふと共に、又明るい死を見つめてゐた。

が、その死の寒冷な岩壁はその一端に彼れの指先ががつかつた瞬間、彼れに對して決して虚無を示してはゐなかつた。

何物かの潑刺として躍動する生氣が其處から彼れの胸奥に切々として感じられた。そして彼れの眼前には三つの極めて貴重な生命が素直にぶら下つてゐる事を識つた。それは彼れが同伴した三人のフェレルである。

其の時、生命には自分一人の生活よりも、もつと大きな世界の有る事を悟らねばならぬことと沁々と思はれて來た。

そして其處には……死の絶壁には……四つの生命のピツタリと相呼應した、世にも美しい燃ゆるが如き健闘の精神が、高く高く創り出されて行つた。それは小さな自我や自己の生活ではない。それは大きな世界であり、人類の生活であつた。

山から下つた此の數日間と云ふもの、餘りに外面的な歡迎、饗應、感激などに疲勞し、連日の對他的仕事に煩らはされて日を送つた爲め、再び靜かに自己を省察する眞剣さを缺いてゐた事が、彼れには今更ら腑甲斐なく思はれた。

自ら自己満足に終らない限りは、その内心に潛む一片の哀愁の念を斷つ事が出來なくともよい。

人生を人生として生活する限り、心の自由はよし得られなくともよい。

苦惱を苦惱として意義あらしめよ
幸福を幸福として意義あらめしよ

彼れが嚴肅な自己反省の靜觀に落ち入つた時、

彼れの今まで冷却してゐた胸奥の炎はまた漸次赫々として燃え上つて來た。

夏の夜の室内に閉ぢ込められた温氣に、彼れの肌はうつつすらと汗ばんでゐる。

彼れはそつとカーテンを引いて、窓のガラス戸を少しく開いた。と、屋外の冷々とした快い空氣が音もなくすつと流れ込んだ。屋外はやうやく白んで、あの氷雪の大アルペンが創り出すモルゲンレートの素晴らしい展景の前のひと時が準備されてあつた。

彼れは窓際の書架の上に置かれた洋書を久し振りのやうな氣がして手に取つた。そしてなつかしげにそれを開いた。それはイタリヤの登山家ギド・レイ (Guido Rey) が血の滴るやうな苦闘の記録である。

會つて學生時代に於ける定評ある教授の講義にさへ、説き來り説き去る極めて巧妙な令辭と整然粉飾された理論に、多大な魅惑と、或る何處か一部の不満を感じさせられてゐた事があつ

たが——山岳には理屈はなかつた。それは常に馬鹿みたいな、卒直な、そして恐ろしい程呵責のない眞實さを提供してくれた。

彼れはそのページの葉りに挿まれてゐる一本のエーデルヴァイスを手にとつた。それは一ヶ月程前、彼れが處女登路を征服する前の準備としてロツククライミングの練習に精進した際、村端れのゼンヒユツテの向ひに立つ懸崖から採つて來たものである。色も形も美しいとは云はれないが、それよりも、より以上清楚にして氣品の高い、ひとりアルペンのみが誇り得る此の異郷の名花に對して、彼れは限りないとしさを感ぜられてならなかつた。

更めて部屋を見渡した彼れの眼には、うすれゆく朝の電燈の光りでピツケルもザイルも整然として貴く又懐しく甦つたやうに心の中に焼き付いた。

彼れと偉大な山岳との間には、既に、好奇心も野心も、意地も矜持も無かつた。只だ熾烈な

親味と愛とが燃え盛り、そして其處には、自己の生命と、血の通ひ合ふ大きな人類生活の尊嚴とがあつた。

彼れの心は黎明と共に朗かに晴れて行つた。

室外はやうやく明るく、左手に仰ぐ幾多の氷雪をつけた高峰も、今やはつきりと清澄な朝空に神々しく姿を現してきた。彼れは思はず窓際に立つて山に向ひ、恰も聖檀に祈禱する者の如く、靜かにエーテルヴァイスを彼れの額にかざした。

それは、新しく甦生して來た彼れである。虐けられて死の道を辿り、始めて救はれた彼れである。そして今や彼れの前途には、遼遠な眞實の生活が、苦惱も幸福も越えて彼方に洋々として開かれてゐるのを覺えた。

此の時彼れは、大きなものみなに對する、切實な愛と感謝の念ひに逼まれ、今まで堰き止めてゐたあついあつい涙が知らず燃えるやうにその双頬へ流れ落ちた。

尾 白 川

尾 白 川

上 尾 白 川

甲州臺ヶ原の宿は、板葺に石を並べた屋根の村家が、信州の往還をさし挟んで續き、やゝ高臺をなして、北には八ヶ岳、東には金峰山や茅ヶ岳を望み、そして西には間近く南アルプスの峻剛甲斐駒ヶ岳を控え、峽北山郷の奥座敷として、四圍を飾る自然の配置は、眞に好妙を極め、秀麗をつくしたものである。

この村家に入つた者は、山に接近して、夏と謂へども既にうすら冷たい嵐氣を覺える。そして西方に近く聳える駒ヶ岳は、そのピラミット形のいかめしい山體に二、三條の残雪を鏤ばめ、その銀條を夏の陽に、いたくキラ／＼と光らせてゐるのさへ、如何

にも南アルプスの登山口へ來たのだ、といふ感じが深い。

續く淺夜、鳳凰、地藏の豪壯な頂稜は、空に向つて地殻の不思議な高い浪を打たせてゐる。

菲崎驛から乗合自動車に身を托して、拂曉の冷風を少しく受ければ、四十分位にして臺ヶ原に着く。

甲斐駒を構成する清淨無垢な閃雲花崗岩に、造化の神の技巧を極めて鏤刻した尾白川溪谷の水態を尋ねて、此處を出立したのは七月中旬の午前七時。竹宇あたりの水田に、夏の雲が白く寫つてゐた。

農家の庭先きの松葉牡丹の花に、べにしじみやぎん、いちもんぢせりが寄つてゐる。大きなあげはてうなども飛んで來た。

竹宇の小里落を過ぎてゆくに、その村端れの社の杜には、如何にも夏の暑さを思はせるニイニイ蟬が

雨の降るやうに、もう朝から既に鳴いてゐる。中に雑つてミン／＼蟬の聲も聞える。道は緩やかな登りをつゞけて、クヌギ、コナラ、クリ、ハンノキ、アカマツなどの林の中を辿る。路傍のコナラに吉丁蟲たまたまを採集し、ヤマハンノキの葉に無数のるりはむしが集つて、樹葉を害してゐるのを見た。

たまたまむし

(Chrysoshroa elegans Thunberg) 鞘翅目、吉

丁蟲科。體は美しき金綠色に輝き、紫藍色の二條の縦帯が走る。本州四國九州に分布し、夏日覆に來る事が多い。

瑠璃羽蟲 (Melasoma aenea Lin naeus) 鞘翅

目、金花蟲科。小さな金緑或は藍黒色の蟲で柳の葉などを害し、九州以北に分布する。

駒城電力會社の發電所を過ぎて、いよ／＼山裾へ接近すれば、尾白川の河畔に、竹宇の前宮、村社駒岳神社が在つた。

高山の溪谷に於て其の巢を發見する事がある。

やぶさめ (Vrosphend squamiceps Swinhae)

鶯科であるが、鶯より遙かに小形で、尾は短かく、色彩は褐色に富み、ヂツヂツと鳴いて、樹下叢陰を好み、ミソサ、イに似た點があるので、一名シホサマイと稱はれてゐる。登路の叢林で見る事が多い。

前宮を後にして、清冽な花崗岩砂を流れる尾白川を渡り、そこから山裾をジクザツクに登る駒の登山道を執らず、右へ逸れて溪沿ひに、此の溪谷の美しい風最を紹介する爲め、山麓の青年團が拓かれた新道を進んだ。それは道も未だよく整はない、しかも殆んど飛瀑と深淵の、連続された棧道であつた。イタヤカヘデ、イヌブナ、ハンノキ、ヤマハンノキ、ヤシヤブシ、ヤマウルシ等の潤葉樹に、アカマツ、モミ、ツガの針葉樹が雜り、ツガの樹を搔き上る栗鼠の姿をぼんやりと見送つてゐる時、溪澗を横切つて、慈悲心鳥が聲高く啼き渡つた。

横手前宮の駒岳神社と同様、神殿、拜殿、神樂殿などが建てられてあり、社務所を兼ねた休茶屋の主人から、登山者名簿に署名を求められた。社に参拜する。

杉、檜、赤松の杜は、白砂を敷いて清淨の神域である。

折から拜殿の棟に立つて、一羽のみそさゞいが、森の隅々にまで届く程の美しい聲を張り上げて鳴いた。

鶯 鶯 (みそさゞい)

(Troglodytes troglodytes fumigata Temminck)

燕雀目、鶯鶯科。留鳥。菊戴と同じく最も小形の鳥で、多く隠濕な溪澤、叢中に生活し、性敏捷に樹根岩石の間を潜行する。羽毛は總體に暗褐色で、嘴は比較的長く、尾は短く、平常は只だチツチツと啼くのみであるが、春季は極めて美音を出して轉るのを聞く。陰暗な場所を選んで、水蘚などで土臺を築き、椀形の巢を營む。

溪谷は、先づ鼓々として兩岸へ、神秘の音を反響させてゐる龍門の鼓瀧を見て、さらに進めば、眞白な巨岩の間に奔流する旭瀧、河中に屹立するクスバ岩、唸岩、神蛇ヶ瀧等を過ぎて、天然石室の宿營地に着く。河原にはシナノナデシコやビランジの花が咲き、御山川蜻蛉、くるまばつた、かわらばつたが飛んでゐる。

沈池澤を経て、不動岩は、岩の上に枝振りの面白いビヤクシン、イワマツ、イワオモダカ、ミヤマノキシノブ、イワカマミなどを附着して突兀として聳え、岸の斷崖には岩燕の一群れが頻りに飛翔してゐた。

日向山からくる雁河の澤と矢田ノ澤が注ぐと、其處から目捷の間には、高さ約五十尺の不動瀑がかゝり、飛沫は霧の如く舞つて、夏の酷暑もどこへやら、其の凄然とした冷氣には、むしろ堪へられない位であつた。十一時。此處から尾根を南へ登り、笹ノ平の登路へ通ずる事も出来るが、なほ溪沿ひの道を辿る。花崗岩の純白な山肌に、針葉樹は藍黒く、

潤葉樹は濃緑に、えも云はれぬ天然色を装つて、如何にも氣品よく美しい。

一寸富士に似た形貌の富士岩、其の脚下に音立てて渦巻く怖ろしい地獄瀧を覗き、道を進んでは天狗岩の壁立を仰ぎ、俯しては瓢箪瀧の純白な、一大花崗岩盤へ溢る溪水の紺碧を懐しむ。瓢箪瀧には養老瀧と謂ふのが落ちてゐた。十二時半。

鞍掛山から出る唐音澤が對岸に注ぎ、それから、曲淵、小瀧などと、限らない奇景を觀賞しながら、中小屋の河原へ着き、河原の左端を辿つた。流れの端で、一匹の河鹿を採集する。

河鹿

(Polypedates buergeri Buerger) 兩棲類、無尾目赤蛙科。大いさ雨蛙位でやゝ細長く、雄は雌より著しく小さい。背は暗灰、腕は淡灰、肢の各指端に大なる附着盤を備へ、後肢は特に長い。本州九州四國の湖畔溪流等に棲息する本邦の固有種、美音を以て愛育される。

女夫瀧を右に眺めて行くと、日向八丁尾根から注ぐ金山澤の落合へ出た。嘗て重石を採掘した事のあつた廢坑が、その澤の奥入りに在つた。

此處で左岸に移つて、溪を左方に執り、流れの幾階段にも落ちる梯子瀧を過ぎて、サルオガセを吊したカラマツ、コメツガ、シラビソ、トウヒなどの梢の間に、遠見ノ瀧を愛でて、噴水瀧に着く。午後二時半。

淵には、瀧が落下して、水は恰かも噴水の如く、飛躍逆轉してゐる奇觀さへあるに、對岸には花岩と稱して、その懸崖にかゝる盤面が、地衣類や風雨で錆付き、紅白黄紫で染められた一大輪の如く、麗はしく河津に映じてゐる。

水晶を溶いたかのやうな碧瑠璃色の水に洗はれた清淨そのものゝ如き石英砂を敷く河原に憩ふて、此の澄麗にして變化極まりなき大自然の鏤刻や裝飾に陶酔すれば、心身はおのづから漂渺として、暫し無爲無念の幽境にさ迷ふ。何處かできつゝ、いきがキョツキョツと啼いてゐる。

啼聲でそれが赤けらであるらしいと想像をめぐらしたりする。

噴水瀧から右岸へ移り、更に歩みを運ばせれば、右本谷と左黄蓮澤との落合に着き、奇岩獅子岩を右手、左岸に望んで、其處に生えてゐるイクザクラ、ヤマハ、コ、ピラシジ、ヤマオダマキ、シナノナデシコや、岩面に附着したセキコクランの花に憧れ、溪を左に執つて、細く高く懸かる千丈瀑を遠く眺め石小屋の所から、午後四時、千丈瀑の左に添ふて、残雪が作るスノウブリツヂを渡り、正面に駒岳中腹の有名な絶壁、南坊主、北坊主の美事な絶大な板状節理をなす裁断面を仰ぎ、背後に烏帽子、右へ大岩鞍掛の峰頭を回顧み乍ら、コメツガやシラベの密林中の急斜面を登れば、六時。遂に、黒戸山の西山稜屏風岩の鞍部へ辿り着くのであつた。

鞍部には、登山小屋が二軒建ち、小屋番が居て食事と寢具の用意をしてゐて呉れるから、何の世話も要らない。

黒戸山の西山稜の低地であるから、餘り眺望はよ

くなかつたが、それでも南に大武川の溪谷を距て、淺夜峰(二七九九m)の美しい翠藍色の頂稜を望み、北は尾白川の溪谷を間に、鋸岳(二六七四m)烏帽子岳(二五九三m)大岩山、鞍掛山の山稜の起伏、南坊主の絶壁等を眺める事が出来る。

下駒ヶ岳

翌日も引續いて好天候であつた。溪を震はせる駒鳥の歌に眼を覺まして、午前六時半には小屋を出發した。

小屋の直ぐ前は屏風岩で、絶壁は約五〇m程の高さで屹立し、花崗岩の裁断面は、何處を攀ぢ登るのかとも思はれるが、幸ひ木梯子や鐵の太い鎖などが下げられてあるから、容易にその上へ登る事が出来る。

それから尙暫らく頂稜の危険な小道を、鐵線などに縋つて進む。そして八時半。七丈ノ小屋へ着く。其處は、シラベやコメツガなどの針葉樹林中から脱

した山稜で、あまり廣くはないが、眺望の素的に佳
い處である。

南には淺夜峰、高嶺、鳳凰山、地藏岳の一脉が高
く、青黒く屹ち、東は富士山、甲府盆地、金峰山の
一帯を眺め、北は八ヶ岳山羣を望み、脚下は、左右
に大武川、尾白川の兩溪谷を擁して、登高者の快心
を、いやが上にも湧き立たしめる。此の小屋にも小
屋番（七兵衛老人）が居て、最近増築し、夏季は常
に簡単な食事と寢具の用意がしてあつた。

七丈小屋より上は、シロバナシヤクナゲ、サウシ
カンバ、タケカンバ、ミヤマハンノキ、ウラジロナ
ナカマド、ハヒマツなどが逆茂木のやうに山稜に纏
まり、その間を分けて急な登りを續けるのである。
暫らくして山の斜面は拓け、短小なハヒマツが花崗
岩砂の地表をベツとりと逼ひ、コケモ、ウラシマ
ツ、ジ、アオノツガザクラ、コメバツガザクラ、ガ
ンコウラン、ミネズワウ、タカネヒカゲノカズラ、
コスギラン、イワベンケイ、シナノキンバイ、ミヤ
マダイコンサウ、トウヤクリンドウ、チングルマ、

ハクサンイチゲ、ヨツバシホガマ、セリバシホガマ
チヨウノスケサウ、チシマギキヨウ、ウスユキサウ
キバナシヤクナギ、コゴメヘウタンボクなどの高山
植物がお花島をなし、多くは可憐な花を咲かせて、
美しく山の斜面を飾つてゐた。

ハヒマツ

(Pinus Pumila Regel) 松科。匍匐性喬木。葉
は濃藍青色、針形で五箇づゝ叢生し、果實は長
卵形の毬果で彎曲しない鱗片から成り、種子は
翅を備へてゐる。本邦中部以北の高山並びに北
海道、樺太にこれを見る。

風雪の爲め常に地上に匍匐し、山頂の露出地
程低く、枝は多く常風の方向に従つて靡いてゐ
る。成長の程度極めて遅く、細き樹幹にも既に
數十年を経てゐる年輪を數へる事が出来る。而
も樹皮薄くして損傷し易く、登山者が一度踏ん
だ丈けでも其の枝は枯れると云はれてゐる。
青綠色の毛氈を敷き擴けた如き偃松成生の景

觀は、本邦高山の情景に一種云ふ可からざる氣
品を添へてゐる。

貴重な高山植物の一として愛護の要を忘れて
はならない。

シロバナシヤクナギ

(Rhododendron Fauriae Franch) 石楠科。常
綠灌木。高地に産し、高さ四、五尺以外で多く
蟠屈し、葉は革質細長橢圓形、表面は滑澤、裏
面は褐色の毛茸を生ず。七月梢頭に少しく淡紅
がかつた五裂合瓣の白花を開く。

キバナシヤクナギ

(Rhododendronchrysanthum Pall) 躑躅科。常
綠灌木。本邦中部以北の高山に産し、甚だ低少
の灌木である。枝は常に地に匍這し、夏日枝頭
に三乃至六個の黄色な美しい花を着ける。

コゴメヘウタンボク

(Lonicera Konoii) 忍冬科。落葉小灌木。外形
くろまめのきに似て細枝密生し、葉は小にして

毛なく、二個づゝ白き筒状花を開き、果實はや
や瓢箪の形をなし、赤熟して果柄は殊に長い。

七丈小屋から約一時間の後、立派な石の鳥居の建
つ所へ出た。

「大日大聖不動明王」の大きな石碑が立ち、更に一
層展望の佳い所である。

山頂はなほ高く、花崗岩の大岩塊を亂杭の如く並
べた脊尾根を搦んで、小道は登りに登つてゐる。

石室の野營地を過ぎると徑は二つに岐れ、左は險
絶惡絶の地獄谷の中腹を摩利支天へ通じるもので、
駒岳山頂から、約三千尺の高度を以つて大武川の峽
谷へ引落した花崗岩の板狀節理をなす裁斷面に、一
條の横に刻まれた罅隙を傳はつて行けば、その素晴
らしい壯觀と峻嶮さに、身心は極度に緊張して、お
のづと身震るひが湧いて来る。

手を掛けた岩頭にナンキンコザクラの淡紅い花が
咲き、足を踏んだ崖にタカネヒゴタイの藍紫色の花
がふるえてゐる。其の他、クロユリ、クルマユリ、

ピランジ、タカネナデシコ、ヒメシヤジン、タカネツメグサ、ハクサンイチゲ、ミヤマダイコンサウ、ニヨホウチドリ、コフタバラン、アヲノガリヤス、リシニカニツリ、ヒメハナワラビ、ハクロバイ、カイイワヤナギ等の植物が山體を綴り、雲間棲黄蝶、高嶺日影蝶、裏金小灰蝶が翩翩と舞つてゐる。この造化の神の巧妙さとその壯絶とに魅惑せられては、いさゝか眩暈をさへ感じられる。

ク ロ ヨ リ

(Fritillariid camtschaticensis Ker) 百合科。本邦高山に自生する多年生草本。莖の高さ凡そ一尺位。葉は輪生し、地下に鱗莖あり、花は暗紫色ヤマユリの如き芳香は無く、寧ろ一種の悪臭がある。

ピ ラ ン ジ

(Silene Maximowiciana, Rohrb) 石竹科。山地に自生する多年生草本。莖高さ四五寸、莖葉共に細毛があり、葉は披針形、又は線狀披針形で兩端は尖鋭、夏日花莖を出し、白色で上端二裂

の美しい一花を開く。花の大形なのをオホビランジ (Silenkeiskei Miq, F, major Takeda) といふ。鳳凰、駒、仙丈、白峰にて発見する。

ヒメシヤジン

(Adenophora verticillata, Fisch, forma) 桔梗科。高山に自生する多年生草本、ツリガネニンジンに似て甚だ小形、葉は披針形で互生する。武田久吉氏が鳳凰山獨特の珍品であると折紙をつけたホウオウシヤジン (Adenophora howozana Takeda) は辻村満丸氏が鳳凰山に於て発見し、これよりも稍々大形で共に紫碧色の鐘狀花を開く。

タカネツメグサ

(Alisme arctica Fenzl) 石竹科。高山に自生する多年生草本、宿根から一寸程の莖を叢生し、葉は線形に對生する。夏日梢上に一箇の白い花を開く。

ニヨホウチドリ

(Orchis pauciflora Fisch) 蘭科。山地の陽影に

生ずる多年生草本。莖高さ四五寸位、チドリサウに似て、花莖の小葉腋に長い距を有する大形の淡紅紫色の愛らしい花を開く。

カ イ ヒ ゴ タ イ

(Saussurea Kai-montana Takeba) 菊科。多年生草本。葉はアザミに似て刺なく、小枝を分岐して藍紫色の小花を球狀に攢簇して咲かせる。大小と葉の影に依つて草本帯に生ずるものをタカネヒゴタイ、以下に生ずるものをミヤマヒゴタイと區分してゐる。甲斐を巡る高山に生ずる稀品である。

ハ ロ ロ バ イ

(Potentilla var. manschurica Maxim) 薔薇科。小灌木。多くの枝ありて葉は羽狀複葉、各小葉は廣披針形をなす。キンロバイ (Potentilla tur-tosa, L.) との相違は、花の黄に對して白、莖の褐色に對して灰色をなし、花梗の綠色に對して淡綠青色、矮少なる點芽である。十一時。摩利支天の峰頭を左にして、白く崩れた

石英砂の急斜面を登り、正午、駒岳の絶頂(二一九六六m)に登り着く。

花崗岩が、方狀節理面を突立て、残雪のやうに崩壊した山頂には、一等三角標の石が置かれ、なほ石崖を積み、石の玉垣を巡らして、中に木祠や銅製の神像を祀り、その他登路の此處彼處や山頂には澤山の石碑が建て、あつた。

遠近の地勢が悉く一眸のもとに集つてくる。

北から東に廣大な裾野をもつた八ヶ岳火山群と茅ヶ岳火山、奥秩父の金峰山、甲武信岳の峰巒、南方には近く古生層の淺夜峰と花崗岩の鳳凰山塊が低くうづくまり、灰白色の峻嶒白峰、鹽見岳、荒川東岳等、日本南アルプスの主峰が、いづれも残雪なほ白く、西南に仙丈岳は灰白色の山體を淡褐萌黄に彩り、奇怪なカールを見せて、美しく大きく控えてゐる。その右肩へ遠く紺碧に浪打つは木曾駒の連山、更に遠くその背景を限るものは、殊に残雪の多い北アルプス連峰の偉觀である。何時までも展望を楽しみ乍ら、嬉しい山上の晝食

をとる。

聽て、冷たい風が身に觸れたと思ふと、戸臺川の方面から雲が昇つて來た。

歡聲を擧げて山頂を降る。午後一時。

今度は地獄谷の徑を執らず、その上の鋭い山稜を絡む道を、自然の石室から石ノ鳥居に降り着き、七丈小屋を経て午後三時半、屏風小屋へ戻つて來た。

小屋から少しく登つて黒戸山の北斜面を搦み、石の下にヒカリゴケなどを覗き乍ら、シラベ、トウヒコメツガの密林中を前屏風の頭（一八七三m）へ出て、急な北斜面を駈けるやうに降り、笹の深い、笹の平の水場で休む。四時半。更に歩度を速めて、柳澤登山口との岐路を左に取り、潤葉樹の山腹を、右手から尾白川畔に降り着いて渡り、前日辿つた道に復歸して、前宮駒岳神社や竹宇の里落を過ぎると、夕陽はやうやく淺夜峰の彼方に沈んでいつた。七時過ぎ、つひに臺にケ原へ歸着したのである。臺ヶ原からは葦崎驛へ、汽車に連絡する自動車を通つてゐた。

大武川

大武川

一大武川

葦崎驛前のバスに投じて、牧ノ原で乗換へ、約二キロの柳澤の村家へ入る。(日野春驛からバスが通ふのも近いうちだ)

駒城登山案内者組合の事務所へ寄つて、前に打合せて置いたポータアと會し、簡易な荷物を分擔して午前八時。此處を出立する。

上組の出端れから、大武川の磧を左に沿ふて細い山道に入り込み、それを進めば、行手に甲斐駒の稜線が近く大きく仰がれて、山麓の登山口らしい四邊の情景が、灼きつくやうに、山を戀ふ者の心眼を魅惑してしまふ。

左に續く淺夜峰、高嶺、地藏岳の頂稜が、大武川

の奥を襖の如く巡らして、辿り行く山路は、何處迄も奥深く、山の核心にまでも喰入るかと思はれる。

石空川(イシウトロ川)と大武川の間の山裾の平地の桑畑やクヌギ林の中をぬけてゆく。

赤松の木立、グミの樹が特に多いらしい。大藪鑛泉に來てゐる無聊に苦しめられた客達が三人五人、グミの實をあさつたり、クヌギ林に「かぶと虫」をいぢめたりしてゐる。

其のグループに誘はれて、路傍の大きなクヌギの樹に近寄つて物色すれば、その鱗の背のやうな樹肌には、翅をしばし休めてゐた美しい「るりたては蝶」がスイと素速しく飛びのいたが、後には雀蜂と青金ぶんの二匹が残つて、餘念なく樹汁に吸ひついてゐた。

不圖戯れから「西遊記に模らへて、是等の動物を今や高山の絶頂に不文の經文を得べく出かけを山旅に現れてくる疑似的怪物と見立てると、即ち甲虫は天狗、瑠璃立羽蝶は妖精、雀蜂は赤鬼、それから金ぶんは夜叉であらう。

そうなると、此の單なるクヌギ林と雖も、仲々容易には通過する事は出来なかつた。前途になほ惱まざる可き妖怪變化は、決して尠くはないらしい。

そう考へてゐる裡にも、「みやまかみきり」がギンギンと齒ざしりの音をして、何處からともなく飛んで來た。脚部にまとふ數匹の蠶蚊は血を吸ふ怪物に違ひはない。一國一城の主、ひとすぎまいが、殿様ならぬ郎黨の青蛙と共に、木ノ葉の裏に止まつてゐる。

梢の「のびたき」は何と云ふ妖怪か、美しい姿をして餘り人を怖れずに近付ける故、誑鳥の俗名がある程油断のならぬ怪物である。

それから間もなく路傍に於て、眞の醜惡な怪物に出會さなくてはならなかつた。蛇盤山の惡龍ならぬ

一匹の青大將が、赤蛙を口に咬へてのろ／＼と籤の中へと入つてゆく。

少々膽を冷して行けば、南無三叉もや大きな「あかずむかで」を、すでに脚下に踏まうとする。

「このあたりには追剝が出るのでね」とポータアが云ふ。ギョツとして見れば草の葉影に大きな「やまなめくじ」。成る程彼れは一糸纏はぬ裸體であつた。これではとても遣り切れない。「西遊記」はもう止めにする。

約十分ばかり道草して、九時半。大籤鑛泉を左に見、右に大武川の橋を渡り、河原の小松林の間を溪奥へ迎る。

奥大坊、駒岳鑛泉よりの道と會ふ處は大武川溪谷の入門とも云ふ可く、山は急に迫り、針濶混合樹の斜面を掻き合せて、流れは白く花崗岩に激してゐる。雪のやうに崩れた駒の頂と、突兀とした淺夜の頂稜を仰ぎ、中央に宮ノ頭(二一六七m)の黒木立の尖峰が据座して、谿は一面に淡蒼い嵐氣を孕んでゐる。

篠澤の磧を渡る。横手堰の取入堰堤があつてちよつとした隧道記念碑が建つてゐる。其處を過ぎれば小流れの極をこえて、「大武川溪谷」と記された標柱から左へ入り、蔭濕な灌木林の下をくゞつて、本流の左岸へ出た。此處のみは兩岸とも岩壁で大門淵と呼ばれてゐた。右手大きな花崗の盤石の上で休む。十時。先には砂防の堰堤が在り、眼を舉げれば、赤薙澤ノ頭(二五四〇m)の黒木の頂稜が仰がれる。

此處で右岸に流れを渉る。そして左手の良く踏まれてゐる小道を辿つた。左より注ぐ一ノ澤へ十五分位。そして、左手の磧の河段丘を歩いたり、又左へ山を捲いたりする。磧の流れへ突出してゐる岩を振返へる。獅子岩などと命名されてゐた。

又、左へ山を捲いたり、その小高みを進む。

ブナ、イヌシデ等の樹々にアケビが纏繞してゐる。左手に、小さな山ノ神澤を溯る。そして尺位の石祠を祀る、山ノ神の小丘を左に捲いて下つて行くと、二ノ澤となり、本流と合流して、落合瀧を懸けてゐる。此處を魚止めと呼んでゐるが、大武川の淡水魚

「やまめ」の棲息地は此所までである。

此のあたり溪谷は、兩岸岩壁をなして、流れは奔騰し落下してゐるので、二ノ澤を渉つて、左の山腹の木立の間をへづつて行かねばならなかつた。二丈ばかりの落差ある勘五郎一ノ瀧を瞰下して、山民勘五郎の居住した石小屋から山の斜面を登ると、樹立の下には笹が現れてくる。十一時。次いで二ノ瀧を見る。勘五郎三ノ瀧は二本となつて落ちる。高さはいづれも同じ位のものである。

此處で、山の斜面を河原へ降れば、三ノ瀧の上流へ出た。

駒岳と鳳崗山の山體を構成する花崗の裂罅を浸蝕する岩盤の上の流れは、清冽に透徹して、油の如く瀧頭に激してゐる。イタヤカヘデ、シラカンバ、ヤシヤブシ、ブナ、ドロブ、ヤマウルシ、クロモジ等の濶葉樹は、兩岸の岩壁を這つて、そこに深く幽玄の氣韻を込め、何處迄も懐しまれる溪谷の態様である。峽谷は、其のまゝ進行出来ないので、右岸の山腹へかゝつてゐる木梯を傳はつて攀ち登る。そし

て赤薙澤の合流點の直ぐ手前で、急な岩壁を鐵線と梯子で谿に降り、先をへづつて、直ぐ左手から左岸に流れを涉つた。谿の下流は恰も穴底へ流下してゐるやうに見える。

赤薙澤合流點、十二時十分。赤薙澤は大きな支谿として、左手に注流し、其處に約三十米突もある美事な瀑を懸けてゐる。堅致な岩盤を浸す水の力は、瀑壺へ如實に表現されてゐる。廣河原峠の徑は、此の谿を溯つて最低鞍部を超え、野呂川の廣河原へ降つてゐる。そして大樺澤合流點に在る登山小舎には柳澤から一日の行程である。八町横手や其他、袋澤に到るまで可成り險惡な谿の小徑を印してゐる。

十二時半、本流を直ぐ左に徒渉し、そして岸を捲き、右に一板岩を見て河原の左の岩をへづり、小さな流の上で右へ徒渉する。なほ小流がその上流にあつて、河原より上へ登る邊りに、對岸には無名澤が落ちる如く注いでゐた。

更に右に捲くと、谿は大淵、小瀧、流れは階段状となつて、下一條瀧と稱ばれてゐる。その奥には上

一條瀧があつた。

右へ避けて登る。右岸瀧澤と云ふ瀧ばかりの小澤が注いでゐる。午後一時。陽差石があつて、下に一人二人は野營する事も出来る。

十五分で谿にヒョングリ瀧が現はれて來た。此の瀧名は、溪流が岩盤を河蝕の甌穴へ奔下して、噴出逆轉してゐる奇觀により命名された瀧である。所が現今は浸蝕が進んで逆轉、即ちヒョングリ返らず、單なる急瀧の形式となつてゐた。右は岩壁で潤葉樹が程よく纏ふ。

右岸へ樹立の間を登ると、大きな天然の石小屋があつて、約二、三十人は野營出来る。

道は石小屋の下を過ぎ、右にヒョングリ瀧の岩をさけて山へ登り、そして間も無く積へ降る。河中の大石に流れは細く瀧を寄せ懸けてゐる。其の先きの岩床の處へはカラ澤が注ぎ、カラ澤の奥には宮ノ頭(二一六七m)黒滑の頭(二一六〇)の南に面した大岩壁が、暗く物凄く眺められた。觀るからに崇巖な谷である。

此のあたりの岩壁は、イワタケの産地として、三十年以前までの横濱より輸出した好況時代は、岩茸取りが盛んに、網を下けて岩の表面を物色したものである。

此處の河の中に大石が二箇立ち、石小屋があつて二、三人は野營する事が出来る。一時四十分。谿は岩崖が迫つて狭く、カヘデ、モミヂ、シホヂ、カツラ、カワグルミ、カワヤナギ等の滑葉樹が繁く覆ふて、それが少しく紅黄葉に染め出されんとし、岩と植物の配置が程よく、最も幽翠な美しい景觀を見せてゐる。左へ水が落ちてくる。流れは水量少く、左に涉り、又右に涉る。更に左に涉り、左手の崖にかかる梯子を登つた。

溪は左へ屈曲し、其の奥が鶴ノ首瀧となつてゐた。花崗の堅致な岩盤を浸蝕して、三段の瀧壺を作つてゐる。

この瀧の右岸高所から、梯子を傳はつて瀧の上部の積へ出る。一時五十分。北に宮ノ大岩を仰ぎ、谿は急傾斜をなし、その先きに左手より無名澤が注い

でゐる。右へ涉ると無名澤、ナギ澤の小流れが注ぎ、積に石碑の如き長方形の大きな自然石が立つてゐた。左へ涉り、岸を登る。それは茶褐色の岩崖が對岸にあつて、流れは岩屋に激瀨をかけてゐるのでこれを避け、そして又積へ降つた。

左岸は岩壁が大きく、それに紅黄葉が配置されて美しく、水が雨の如く、不斷に岩盤を流れ落ちてゐる。

右手に涉り、左岸を少しく捲いて積へ下り、そして左に涉る。左より前栗澤が注ぐ。駒の摩利支天の岩峰が素晴らしく高く眺められてきた。

右に涉り、岸を捲いて積へ降り立ち、また一寸捲く。左から奥栗澤が注いでゐる。積は二箇の石が合重して、その下は二、三人野營が出来る。

駒岳の絶頂より落ちる赤石澤地獄谷の合流點へ出た。午後三時。

地獄谷は駒岳の頂稜から東南に向つて開かれた深玄な斷崖の岩谷であつて、奥はうす暗く、灰白の板狀節理の岩壁を、魔のやうな山霧が常に物凄く絡ん

でゐる。

山頂まで高度の差約五千尺、それは正に、花崗岩が構成した立體面の總合であり、大自然が生んだ悪の藝術である。

此處から大武川の本流を避けて、地獄谷に入り、直ぐ左手のザレを登つて、左の尾根に取り付き、それを登つて行く。ツガ、カラマツ、ゴヨウマツ、ミズナラ、ミネカヘデの木立の下に笹が生えてゐる。水の無い小澤から又尾根のやうな所を登る。もう疲労を來してゐる上に此の登りであるから、相當に苦しい道だ。

登り詰めて左へ一寸した白砂のザレ地を横切る。視界が急に展けて、早川尾根(二四六三・四m)あたりの頂稜を飾る秋色の美しさ。針葉樹が蓋黒に装ふ山腹の大きな斜面へ、カヘデ、モミヂ、ナラ、ハンノキ、ナ、カマド等の黄葉が織り込まれて、更紗模様などといふ形容を踏えた錦繡の美を觀せてゐる。空には雲が多く、それでも時々青空を覗かせる。それからツガの樹立の中をへぶり、本流からは高

る頃、炊煙は石の家根を掠めて谿の方へゆるく流れていった。

二 浅夜峰

空には雲が少しく遙つて、サデの大岩に霧が捲いてゐる。午前六時半に此處の石小屋を出立する。

サデの小流れを涉つて、その先きの水無澤の急傾斜面を登つて行く。六町立と稱し、本谷は見えないが、左手には低く六町瀧の急瀬飛瀑を連り懸けてゐる。この登り約二十五分。針葉の樹下はミズゴケが掩ひ、シラカンバ、ヤマハンノキ、ミネカヘデの霜葉がバラ／＼と散つて、四十雀の聲がその間から小唄のやうに聞えてくる。

山稜へ出ると、本谷の河原は直ぐその下で、八町瀧の急勾配な悪場が想像される。

此處に眞新しい岩の崩壊があつた。山人等は、山の崩壊に對して常に、オサキ(山稜の出張り)谷口は危険であると警戒してゐる。道は明らかに踏めて

く隔てられた山腹を進み、サデの大岩下の澤へ入り込み、道を少し上つた所に在る石小屋へ着く。四時半。今日の宿營地である。

位置は、摩利支天の南稜、サデの大岩の大絶壁を背後に負ひ、前面は高く、よく展けて、浅夜峰に續く幾多の塊頭を間近く仰視し、遠く地藏岳の山容を重見する事が出来る。

大武川上流の秋は今や酣であるらしい。針葉樹の黒いまでに茂る山肌へ、濃く染め出された霜葉は、只だ忙然と佇む者の視覚を、吸ひつくやうに奪つてしまつた。

人夫は活發に働いて薪を集める。カワヤナギやシラカンバの太い幹が氣持よく伐られたりした。

少しばかり倭樹の纏ふサデの大岩は、如實に石の壁をなして谷の奥に控え、そこからの小流れは直ぐ傍の凹谷へ細い瀧となつて流れ落ちてゐる。石小屋は自然に巨石が家根をなして、その下へは十人位收容し得られる。可成り結構なものである。低い石の下へ絲立を敷いて、ゆつたりとした氣分で座席を作

ゐて、横にへぶり、本谷の河原へ出て涉つた。もう水は極く少く、足を濡らす程もなかつた。

道は河原の左手の林を通じ、右に摩利支天の岩壁を仰ぐ。そこより注ぐ小支流があつた。

谷はその先きで、右にくの字を描き、左より其處へ支溪を合せ、本谿の先端の水源は、摩利支天峰の西面を北へ向つて、駒岳と小松峰(二七四〇m)へ一直線に放射させてゐた。

登路は、この屈折地の少しく先きの谿より、左に仙水峠まで、木立の覆ふ山の急斜面を登つてゐた。

此の針葉樹の急な登りを續けてゐる時、コメツガの樹梢のどこかで、力なくめぼその鳴いてゐるのが耳に入つた。

めぼそ

(*Acanthopneuste borealis xanthodryas*) 燕雀目、鶯科。形、鶯位の黄色を帯びた可憐な小鳥で、チリ、チリ、チリ、チリ、と鳴くので一名、せにとりの方言がある。春は鳴聲は強く、秋は小淋

しく針葉樹の木立の中などに於て聞く事はよく登山者の経験する所である。

背後に、摩利支天の巍峨とした岩峰を顧み乍ら、約四十分を費して、八時十分。仙水峠の鞍部（二三五〇m）へ辿り着く。

此處は、V字形をなして、花崗岩と古生層の接觸變質した大小の岩石が累積し、ハヒマツが綴り、シロバナシヤクナギ、サウシカンバ、ヤマハンノキなどが縁邊に生え、カラマツの數本が強い西風に當てられて、枯枝を東に延ばしてゐる。雨後は鞍部の底所へ水を湛へる事があるので、仙水池の名が與へられてゐた。

岩石には蘚苔、地衣の類が夥しく附着してゐるのを見る。エイランタイやチズゴゲ、タカネゴケなどと雜り、薄蒼白いハナゴケの大群落が、黝灰色の岩石の間に粉を振り播いたやうに敷かれてゐる。タケカンバの黄葉が、朝陽を受けて明るく光る。駒や摩利支天の白い山肌を現はしてゐる山容の輝

やかしさ。續く小松峰（二七四〇m）や、城山ノ頭（二六四〇m）が古生層の山肌に黒木立を密生し、大武川谿の水源六方石澤はその急斜を見せて、褐色のサウシカンバを網の如く散らしてゐる。

西は、北澤の凹谷から仙丈岳の山容を望む事が出来た。

三十分休憩して、八時四十分。南に向ひ、駒岳を背後にして登つて行く。

仙水ノ頭（二七〇〇m）までの此の登りが仲々樂ではない。

峠より偃松をすぎ、コマツガ、シラベの木立を経て、又偃松叢を登る。白くフラ／＼枯れた樹枝を踏み、樹梢に縋る。顧れば六方澤の秋色は眞に深山幽谷の趣ゆかしく、駒岳摩利支天の絶壁は、また凄い程素晴らしく、百英の斷口粒を白く輝かせて、約六十度東に傾斜をなす顯著な數條の龜裂を見せてゐる。その内の一帯は倭樹を生じてゐるから、其處を通過する事は困難ではない。荒蕪な岩壁面に對して、山人は之を島と稱してゐる。東は、七丈小屋の

邊に遠く八ヶ岳の翠巒が浮び、黒戸山の黒頭、奥秩父の群嶺等は、甲府平原をかくす雲の上へ僅かに乗り出してゐる。

偃松の山稜の登りは良かつたが、十時、仙水ノ頭（二七〇〇m）へ達した。展望は潤けて遺憾なく、西は仙丈、白峰、鹽見岳、北は鋸、駒、八ヶ岳、間近くは辿り行くべき淺夜峰とその起伏する頂稜から地藏岳のホルン、鳳凰岳、薬師岳の連嶺迄一つ一つが強く視界にその存在を主張してゐる。三十分休む。晝食。仙水ノ頭から淺夜峰は甲斐駒山脈の主稜縦走に移り、岩塊を攀ち登つたり、偃松叢を掻き分けたり、大武川谿に面して何處までも續く急崖斷層崖を右にさけて進む。凹地や小平地などがあつて山稜は變化多く、岩角に蔓る偃松叢、タケカンバは既に落葉し、褐色の樹肌ばかり骨立つて淋しかった。

右手に瞰下する北澤は、今、紅黄葉の眞盛りらしい。小隆起を三つ程踰えて、十一時二十五分。淺夜峰（二七九一m）へ着く。其處は硬砂岩の亂積した狭い山頂で、三等三角標石が在り、南には崇高な

白峰北岳を中心として、右は野呂川最奥の溪、左は同廣河原邊の溪の蒼黒く粧ふ山の大きな向斜面を取り巡らし、右翼は仙丈岳、最左翼は鳳凰岳まで、與へられた風景は、山旅ならではの觀る事の出來ぬ清純な玄妙な美しさを示してゐる。

淺夜峰は、駒岳や鳳凰岳に對して、殆んど拮抗する程の標高を保有してゐるが、それらの山容に觀る豪傑さは更に無く、部分的には山骨稜々たる點が無いではないが、大體に於ておだやかな山の姿を備へてゐる。そしてそれが、甚だ高峻にして有名な甲斐の二つの靈峰、駒岳と鳳凰山の間中に介在してゐる爲め、殆んど世人の視聽に觸れず、山頂には祀られた山祠も無く、また古書文獻に徴すべき何ものも無い。

山麓民は無名の頂稜として、岳の山名を冠せず、普通アサヨ峰と稱してゐる。

それは、野呂川の溪に入つてゐた芦倉の山人達が往時、木曾の床屋中村儀助などに卒ゐられて、廣河原あたりに小屋掛けをしてゐた時、其處からは駒も

鳳凰も白峰も見えず、専ら淺夜の峰頭のみが僅かに仰がれて、朝の仕事に出立の際、それに朝日をみとめる所から、朝日ノ峰の名稱が生まれ、次いで夕陽がそれから消えると見れば、此の溪澗へは餘りにも早く夜が下りて來るので、遂に朝夜ノ峰となつたと云ふ。

併し乍ら、甲斐駒山脈の内、晩秋いち速く雪に白く化粧せられるのはこの山である。そして初夏の候、此の東北斜面に深く刻まれた。前栗澤、奥栗澤等の残雪は、いつ迄もこびり付いてゐて消え去らない。

殊にこの山が、稍々破風形の稜線を空に描いて、眞にその魅惑的美しさを現す時は、いつも夕陽背後に沈んで、淡藍色を紫の空に流す一ト時である。この時のフレストラインが示す魅力は、突兀たる大山岳の男性的なるに比して、もの柔かな女性的な親しみ深い惚々とする味を持つてゐる。

淺夜の名もなつかしい。此の山は登攀するよりも眺望して興趣深き山であるやうに考へられる。高山植物の草本数は、既に素枯れ盡して、精査する由も

の生えた山稜を上下する。潤葉の落葉がカサコソと乾いた音をたてる。十二時半、第四峰に着き、降りとなつてコメツガやシラビソの下を急ぐ。山稜の幅は少しく廣く、今迄よりは歩き易くなつて、伐開けは明かに小徑もよく踏まれてゐた。少しの登りを續けると、早川尾根ノ頭(二四六三・四m)の三等三角標石が在り、それからシラベ、コメツガの黒木立の中を二、三分降れば、右手に早川尾根の登山小舎が連つてゐる。十二時五十分。二間四尺の三間、トタン屋根の丸太作り、右手約二十間の大きな木立の中に水は湧いてゐる。良い宿營地だ。

大武川の石小屋、或は駒岳の七丈小屋を發し、荷が重い、メンバアの多い場合は、此處までを一日とするのが適當の行程であらう。人夫と二人だけの氣易い山旅は、天候の變らぬ内にと歩行を急がせて、二十分の後、落付く間も無く此處を立つた。

小高い山稜を踏えて降れば、午後一時半、廣河原峠に出る。甲斐駒山脈の最低鞍部で、野呂川の廣河原澤を登つてゐる山路は、此處から少しく袋澤ノ頭

なかつたが、ミヤマダイコンサウ、ヨツバシホガマ、コバイケイサウ、トウヤクリンドウ、ヤマドリゼンマイや、紫黑色をなしたイワカミ、赤い實を着けたゴゼンタチバナ、黒い漿果のコケモモなどを見ることが出來た。

鳳凰山へ向ふ。十一時四十五分。次ぎの隆起、第一峰へ着いて淺夜峰を振返る。山頂邊は偃松、野呂川への緩斜面は岳樺が繁く纏ふてゐる。行く手は鳳凰山まで未だ可成りの距離を以つて山脈は起伏してゐる。陽は暖かく、風、西より吹いて、折から野呂川溪に湧いた雲が廣河原峠の最低鞍部と、東大武川の溪へ流れてゐた。

第二峰が十二時。それより、山稜は降りとなり、偃松や白檜の倭、樹巨樹の中の急斜面を下り盡くして第三峰へ登る。偃松の瘦尾根となり、みやまほ、じろやあをじのひと群れが飛んでゐた。

十二時二十分。大武川谿から甲府盆地は總て雲の海をなし、駒が中腹以上を現して、陽はうらゝかに暖かく、風も風いだ。偃松を主として、石楠、白檜へ向つて登つた所から、赤薙澤の右岸山稜を降り、袋澤の合流點を経て、赤薙澤の左岸を大武川の道へ聯絡してゐる。

偃松の蛇の如く延る山稜を袋澤ノ頭(二五四〇m)へ向つて登る。この登りは案外遠く、その頭と思はれる頂稜が五、六ヶ所もあり、木立の中を少しく平に行つては、又登り、又登る。偃松叢を掻き上る。午後二時五分。破片岩の累々たる袋澤頭に着き、それより又も木立の中を降り、十五分で白鳳峠の鞍部へ出た。葎崎白鳳會の道標が、白檜の樹に吊されてゐる。そして白峰登山道は、之を野呂川の廣河原小舎へ降り、北岳へ導く。それは、鳳凰山北御寶の小舎から廣河原小舎或は大樺池小舎、翌日間ノ岳石室と宿營を重ねるのが順路である。

白鳳峠上から、今迄の山稜の古生層と、鳳凰山の花崗岩が著しく接觸變質した、大小累々たる岩石の斜面を、高嶺に向つて攀ち登れば、岩石の間を偃松が逼ふ。山稜はゴロ澤に面し急崖となつて左に曲り、午後三時五分、やうやく高嶺(二七七八・六m)

へ着く。

地藏岳へかけて岩石鬼嶺として屹ち、偃松、タケカ
ンバの倭樹にカラマツの古木が生え、その淡黄な秋
色が黝灰色の岩石に配合し野呂川の瀬の音は風に送
られて山の上まで聞えて来る。古生層から、輝白色
の花崗岩砂を踏んで、岩塊を右、或は左にからみ、
三時五十分、アカメケノ頭へ出た。花崗岩には往々
鐵が含まれてゐて、かやうな岩は空氣に曝露される
と酸化して褐色を呈し、分解し易く崩れ易い。これ
が野呂川へ崩れて、赤拔澤の名をなしてゐる所以で
ある。

縦走の行路に於て、今まで常に視覺の伴侶となつ
てゐた駒、仙丈、白峰等の景觀は、こゝに一先づ墮
斷され、東に、怪奇な岩塊のホルン、地藏佛の突出
つ地藏岳、賽ノ磧へ向つて降る。

賽ノ磧は、頂稜の平地に、花崗岩の磨爛した小粒
の眞白い砂磧をなして美しく、其處は如何にも淨地
らしい高潔な氣品が流れてゐる。

鳳凰三山を縦走するには、此處から絶嶺の觀音岳

まで一時間半、薬師岳まで一時間弱、それより中道
を舊青木湯跡（一五四八m）へ降るか、南御室の山
小舎へ宿營。或は強行して辻山、杖立峠を経て芦倉
へ下山するか、いづれも青木鑛泉よりの一日の登山
路とされてゐた。

三 鳳 凰 山

鳳凰山地蔵岳に立つオベリスクの巨岩、地藏佛（芦
倉で云ふ大日岩）は、天然の建造物としては、北ア
ルプス槍ヶ岳のホルンと共に甚だ珍らしく、それが
登高して仰ぐ度に、いよゝ深き興趣湧き、觀賞の
價値を高められてゆくやうに思はれてくることは、
妙であつた。之を遠く山麓から眺むれば、恰も崇巖
な佛體の空遙かに高聳してゐる如く仰がれ、山容に
數段の偉容と神秘とを添へてゐる。爲めに、信仰と
結びつけて、その山名は普ねく古來より遠近に識れ
亘つてゐた。

子授け地藏の信仰は、何時頃より始められたもの

か詳かではないが、恐らく地藏岳の出名起因の頃と
懸隔は無いと考へられてゐる。

子實の無い人々は、この山に登つて祈願をかけ、
子を授ければ、願果しと稱して再び登り、高さ一尺
未滿の石に刻んだ地藏尊を持參して、山頂に祀るの
が法則であつた。往古は三岳を信心して、地藏、觀
音、薬師、いづれもこの小石佛をその山頂へ祀つた
ものである。併し乍ら、最も多く祀られて、現今に
遺存されてゐるものは、地藏佛下の賽ノ磧と、鳳凰
山觀音岳（二八四〇・九m）の低い背とに於てであ
る。

賽ノ磧には今なほ約三十四個の刻像が立つてゐる
が、そうした事は漸時類れて、爲めに餘り新しい物
は見當らず、之等の佛像は、激烈な風雪の浸蝕や砂
礫の磨滅を受けて、壞れたり、いたく形を損じたり
してゐた。

地藏佛の巨岩は、深造岩の多岐多様に龜裂浸蝕崩
壞された跡に残された一種のホルストであつて、峻
険な方狀節理面を見せ、賽ノ磧よりはなほ約二百尺

も高く疊築聳立してゐた。南は十片より成る鱗狀の
大岩石を積み、絶嶺に約五十尺程の巨岩地藏佛の實
體を乗せ、蓮莖の花瓣の如き五箇程の岩塊が之を擁
して支持してゐる。地藏佛は二つの巨岩密着して一
箇の如く、一は稍々長方形をなし、他は紡垂狀をな
して僅かに高い。

賽ノ磧から此の岩壘に攀ち登り、地藏佛の直下に
於て、これを圍ふ左端の岩との間を通り抜け、その
裏に廻つて、更に裏側に在る左端の岩との間の狭長
な裂罅を、身を横にして、やうやく潜り抜け、南側
に到ると、其處に小さな石祠が在つて、小石地藏が祀
られ、傍らの石碑には「鳳凰山大神」、なほ物色すれ
ば、「大日經王、天文十一年」「鳳凰山天照皇大神、明
治廿年」「大日如來、明治廿一年」等と記された碑が
建つてゐた。そして元の所に歸るのである。此の周
圍約五十間位と思はれる。駒岳が文政年間諏訪の人
弘幡道者に依つて闢かれてより、大己貴命、小彦名
命、其他雑多の神佛を祀る無數の石碑に比ぶれば、
之は亦餘りに寥々たるものである。

山頂に大日如來を祀るものはその例多く、白峰の北岳も亦その一つである。

鳳凰山は、峽中紀行の、則神鳥來栖處からではなく、祀られた大日が其の儘、法王、轉化して鳳凰の山名をなしたものでらしい。そして又この山が、早川の沿岸奈良田に遷居せられたる南都孝謙天皇の傳説と結びつけ、法皇を弓削道鏡であると誣ひ、棒狀の尖巖を地藏佛に見立てて、授産を掌るものと思はしめ、信仰を生じた所以を輕視してはならない。か様な信仰は、往時本邦の到る處に於て卑俗の間に盛んに行はれてゐたものである。

山麓の住民は、此の地藏佛の巨窟を全く神聖なものと信じ、之に登攀したり穢したりする事はいたく忌み嫌つてゐる。併し、崑には殆んど手掛りらしいものは無く、容易には登れないものとしてあつた。

然るに一九〇四年(明治卅七年)の夏、彼の Walter Westod は本邦に於けるロツククライミングの濫觴とも云ふ可きこの岩塔へのコンクエストを試み、西南面から狭いチムニーをカンカーレツヂに登り、錨網

を投げてクラツクのトップに引掛けて、遂に攀ち登つてしまつた。

次いで一九一一年の夏には、神戸在住の獨人 Daunt Garsden が四人のポータを連れ、東北面からクラツクを利用して頂上を極めた。

以後このアツセンドをなす者は少くない。

一見した所では、後者のドントルート (Coals Crack) は、前者のウエストンルート (Weston Crack) に較べて、オーバアハングをなしてスラブであるから非常に難かしいやうに思はれるが、前者の方がすつと厄介であらう。但しピレーイングピンを利用してザイルで降るには恰好である。

鳳凰山の山名に就いては、從來より興味ある異説が唱へられてゐた。

寛延三年の芦倉村對黒澤山高柳澤三ヶ村の山論裁定書には、見取圖が北から駒、高嶺(柳澤の天狗岳) 鳳凰、地藏の順列に描いてある。之は山麓村民の評定に依るから山名の解釋は異議なくそれに承服すべきであるが、元來この訴願は芦倉より起り、境界の

查定の策略上山名を標識とした形跡があるので簡單には認められない。現今柳澤方面でも一般的には地藏佛のあるのを地藏岳と云ふ。そして、柳澤の鳳凰山權現は今日殆んど廢滅に歸し、三本木にも神樹は伐られて、只だ石の鳥居と石の小祠が残されてゐる有様である。

其他の古繪圖にあつては、文政六年九月横手村名主彦兵衛作駒ヶ岳圖、天保十三年十月甲斐書林出版圖、文久三年掌中甲斐國繪圖、慶應四年水戸の鶴峰彦一郎作甲斐國全圖、明治十六年小野泉作甲斐國志附圖等、いづれも駒、地藏、鳳凰の順列である。

本邦山岳界の耆宿木暮理太郎氏は左の如く書いてゐる。

鳳凰山(二七五八m)は、慶長初年の作と思はれる帝國圖書館珍藏の「日本繪圖」にも變體假名にて「ほうわうさん」と書しあり、紛れもない名である。

元は大頂の大名を大日如來と崇めて法王山と呼び、後に鳳凰の二字に改めたものであらう。白峰北岳に大日如來を祀つたのも同じ信仰からである。然るに

徳川幕府の中世に至り、地藏菩薩の信仰が江戸から各地に蔓延するやうになつて、葦崎方面では是れを地藏菩薩に擬し(地藏菩薩信仰の起原は墮胎に關係があるから僻地よりも都會に發達した)岩を地藏佛と唱へ、山を地藏岳と稱するに至つたものであらう。とにかく、鳳凰山の名は動かすべからざるもので、柳澤方面の稱呼が正しいのである。強いて地藏岳をあてるならば、たゞ別名として存するに止めなければなるまいと思ふ。(日本地理風俗大系六冊二三八頁)

右の記事の如く、地藏佛の岩塔の在る山が鳳凰山なる事は確かであつて、郷土の各登山團體も亦全て同じ意見であるが、但し別名として絶対に地藏岳であると主張してゐるのである。即ち鳳凰山地藏岳なのである。

信仰から起つた此の名稱は、「地藏岳の地藏佛」であり、又別に「法王山の太日岩」なのである。故に、假りに地藏佛なる岩塔の山を地藏岳とは云はず(芦倉方面)單なる鳳凰山である、とする説からは、そ

の岩塔は大日岩であつて、それを地藏佛と稱する事は根本的に誤りとなる。

柳澤や山高邊に於ても、現今は岩塔を地藏佛と稱へ、山を山地藏岳（鳳凰山中の）と呼んでゐる。鳳凰山大日岳の説は主として芦倉方面の稱呼である。更らに觀音岳（二四八一m）は鳳凰山であるが、芦倉にとつてはこれが地藏岳であつて鳳凰山ではない。又、藥師岳は鳳凰山であり、觀音岳であるとも云へる。

斯様に山名が紛糾してゐるので正しい認識を得られない登山家も少くはない。但し南アルプスの各登山には、現在殆んど一致して、便宜上陸地測量部製地形圖の鳳凰三山の稱呼を用ひてゐる。

因みに、地藏岳の信仰は、墮胎とは反對に、兒授け地藏として、古來専ら妊娠を望む者に依つて、厚く信心されてゐるのである。なほ次ぎに、駒岳並びに鳳凰山に關する、古い文献資料を掲記する事としよう。

「裏見寒話」

（享保甲辰より三十年間の後、寶曆二年十一月時の甲府城勤番の士、野田成方の著にして、六卷より成り、約百八十年前の文献である。）

駒ヶ岳戊方 聖徳太子金蹄駒に召され、此の絶頂に登り賜ふ。その頭山の形駒に似たりと、是信州境の高嶺なれば人跡絶ると云ふ。地藏岳西戌方此の山自然と地藏の形なる大磐石あり、天氣快晴なればその形府下より見ゆ、麓の村々よりは縁日なりて半途迄は登る。駒ヶ岳に並びて峻嶺なり。

鳳凰山前同方是も亦峻嶺なり、偶々嶺に到りて見るに金毛の鶴栖む故に鳳にたとへてしか云ふとなり。亦昔法皇都より遙に此國に下らせ賜ひ、山中に入りて還幸なし、と又いつの頃かも法皇甲州へ下らせ賜ふ事を聞き亦弓削道鏡都より下り法皇也と僭して國民を欺きしとも云ふ。

「甲斐名勝志」

（天明壬寅二年三月、甲斐の國學者、萩原元克

賜ふより法皇ヶ岳と云となん。

「甲斐國志」

（文化甲戌十一年十一月、甲府城勤番支配、松平伊豫守定能、竊に幕命を承けて脱稿獻進せるものであつて、原本百二十三卷より成る浩翰の書、當時の甲斐の地誌としては、良く詳細を盡してゐる。其の第三十卷山川部から轉載する。約百十五年前の文献である。）

〔駒ヶ岳〕横手、臺ヶ原、白須、諸村ノ西ニ在リ椎蘇スル者山租若干ヲ貢ス山上ヲ甲信ノ界トス大武川ニ沿フテ南ノ方山中ニ入ルコト若干里ニシテ石室二所アリ下ヲ勘五郎ノ石小屋ト呼ヒ上ヲ一條ノ石小屋ト呼フ此ヨリ上ハ絶壁數丈ニシテ攀援スベカラズ樵夫ノ山伐ノ者ト雖モ至ラサル所ナリ遠ク望メハ山頂窟窟ノ中ニ駒形權現ヲ安置セル所アリ尾白川山上ヨリ發シ瀑布ト爲リ懸崖ヲ下リ級ヲ拾ヒテ潭トナル是ヲ千箇潭ト名ツク奇勝殊絶ナリト云又釜無川、大武川皆此山ニ發源ス峽中紀行ニ云、山之不毛者三成、似ニ

の著述にして、三卷より成り、約百五十年前の文献である。）

駒岳、信濃國高遠領の境なり、往昔名馬出でしと云傳ふ。高遠にては前岳と云ふ、峰に數千仞の岩あり、そを圍りて絶頂に到る十歩許り、平地あり石佛の觀音一區有、此山の西に木賊川とて高遠へ流る、川有、風土記に巨摩郡西ハ限ニ木賊川と云ふは是也。又甲斐の方に流る、川は釜無川と云。

鳳凰山、地藏岳、藥師岳と云ふ山有て鳳凰山を峰つゞけり。是を三嶽と云、麓の柳澤と云所に宿り、山中に一夜伏して翌日又柳澤に歸る。諏訪の湖水見えて佳景なり。絶頂乃岩の上に黄金にて鑄たる三寸許りの衣冠の像あり、鳳凰權現と云ひ、是奈良の法皇の御影なりとぞ、むかしより動もすれば盜賊ありて此像を取らんとすれど、重きこと磐石のごとし。故に盜む事不得猶岩の上に有とぞ。土人云ふ、むかし奈良の法皇當國に流され賜ひて此の山に登り都をしたひ

焦石疊起者、崑稜角歷々可數、形勢犖然、不似前此芙蓉峯容相迺者、相傳豐聰主所畜驪駒、飲是溪而生、山上莫有祠宇、山操木客、往々而逢、以故土人不敢登、昔有二一人、鬚而勇、齋三日糧、以躡絕頂、有二老翁、相責曰、此上仙福地、非若曹所涉處、粹其髮、放崑下、則恍然已在三已家屋山後矣ト云々。

〔鳳凰山〕駒ヶ嶽ノ東南ニ在リテ芦倉山ノ北稍西ニ在リ東面ヲ御座石山ト稱ス。西ハ能呂川ヲ隔テテ白峰ニ對ス。絶頂ニ高數丈ノ崑アリ遠ク望メハ人物ノ狀ノ如シ州人多クハ誤認メテ是ヲ地藏岳ナリト云ハ非也、鳳凰山權現ノ石祠アリ祭日ハ九月九日ナリ、神主小池氏柳澤村ニ住ス此山柳澤ヨリ西南ニ當レリ村ヨリ壹里ニシテ雄山神社ニ至リ又壹里ニシテ三本木ノ石祠ニ至リ又貳里ニシテ精進瀑ニ至ル此ヨリ峻嶺ヲ攀ヅルコト又壹里ニシテ絶頂ナリ其絶頂ニ詣ラント欲スル者ハ必ス八月九月ヲ以テ候トス、必ス此瀑水ニ沐浴シテ然ル後始メテ躋ル者トシ、大淨穢火

トシ之ヲ農手ト稱ス、峽中紀行ニ云、間ニ鳳凰山、則神鳥來栖處、字或作法王、法王大日也、現ニ瑞山上或曰、法王謫東時、陟此山望京師、予疑其爲道鏡、按ズルニ道鏡ハ下野國ニ謫セラレテ藥師寺ノ別當トナリ終ニ彼國ニテ死セシ事國史ニ詳ナリ此國ニ來リシ事ナシ。
(文中峽中紀行とあるは約二百二十年前、寶永年間に萩生徂徠の著作したもので、農鳥、農手鳳凰、地藏、駒岳、次第遞列とあるが、其他には山名の有力な考證となるやうな文章は記されてない。)

賽ノ河原へ午後四時に着いた。地藏佛の賽路に約三十分を費した。雲霧はこの巨岩を捲いておごそかに山神の姿を陰現し、霧の彼方に蔭黒く、スツクと屹つ有様は物凄いまでに人の心を威壓した。靡爛した花崗岩砂は、少しく酸化して褐色を雜じへてゐる。此の砂走りの急な斜面を駈けるやうにして南へ下れば、四時十五分。

ヲ禁ス又六七月ノ間ニ登ル者アレハ疾風暴雨シテ寒氣早ク至リ秋稼ニ大害アリト云、一説ニ絶頂ノ祠中ニ掛鏡アリ往時盜アリテ之ヲ竊去ラントセシニ祠前ノ崑間忽窄マリテ行クコト能ハス畏レテ立歸リ鏡ヲ舍ケハ路復開ケテ始ノ如クナリシト云、是ヨリ東南ノ方ニ對峙スルヲ地藏ケ岳ト云相距ルコト壹里弱山脊少シク低シ其次ヲ觀音ケ岳ト云其次ヲ藥師ケ岳ト云地藏岳ヨリ此ニ至ル亦壹里ニ近シ皆東南ニ連リタル一脈ノ山ナリ、其佛名ヲ以テ山ノ分名トセルハ各處ニ小石佛ヲ置ケルガ故ナリ土人地藏、觀音、藥師ノアル所ヲ三岳ト云又藥師ケ岳ヲ或ハ乗鞍ケ岳トモ呼フ乗鞍ケ岳ヲ南へ下レバ砂拂ト云處アリ此ヨリ芦倉村へ五里許南稍々東ニ當ル御室、燒山堀切、秋立、苜合、清水等阪路特ニ峻惡ナリ凡ソ此山ノ絶頂貳里許ノ間砂白クシテ海濱ノ景色アリ奇石、怪崑、琪樹、瓊草、一々名狀シ難シ又此山ノ面ニ春三月頃ヨリ雪消エテ消エ殘リタル雪自然ニ手ノ形ヲ作ス處アリ土人望ミテ農候

左手の針葉樹林へ小徑は通じ、小尾根の下り十五分で石小屋のほとりへ出た。地藏小舎の新設地である。

それからムロ澤を横切り、なほ十五分にして北御室の登山小舎へ着く。今宵の山の宿である。明日はドンドコ澤を青木鑛泉に下つて葎崎驛まで、極めて樂な行程であつた。

小
武
川

小武川

鳳凰山北御室の登山小舎は、低平なムロ澤の針葉樹林の中に建つてゐた。

それでも高距は約二三〇〇m、地蔵岳の山頂へ登り一時間、位置を選めば、その奇怪な岩塔、地蔵佛の屹立を、窺見する事も出来る。

水は小舎の近くを流れ、薪は豊富に採集し得られて極めて安らかな山旅の宿營が求められる。ムロ澤のほとりのミヤマナ、カマドの葉は、もう眞紅に紅葉してゐる。シラビソ、トウヒ、コメツガの針葉樹に雑じるサウシカンバの梢も、すつかり紅葉して、風もないのはらくと散る。山の色彩は、全體に華麗な調子を示してゐた。

夕景には雲が頻りに立ちこめて、雨さへ落ちるかと思ふまれたが、その事も無く陽は暮れていつた。平和な楽しい夕餉が済んで、その日の日記もソコ

ソコに、毛布を冠つて焚火に近く横臥すれば、晝の疲勞は一時に襲つて、前後不覺な熟睡に落ちる。

夜中フト眼を醒ませば、小舎のトタン屋根を叩く小さな音が亂れて聞える。

おやつ！ 雨かな、と直感して、小舎の扉の隙間から屋外を覗けば、空は何時しか良く晴れて、藍黒の秋の夜空に、無数の星をちりばめてゐる。安堵して又寢に就けば、屋根に當る小さな音が終夜、斷續して聞えた。

かうして山の一夜は明けた。

小舎の外は既に明るく、忠實な人夫は、もう朝食の準備を了へる頃であつた。

毛布から這ひ出して、ムロ澤の水邊へ走り、寒冷な眞水で洗顔すれば、身も心も一瞬にして、覺醒し淨化されるやうに思はれる。

小舎に戻れば、此のあたり一面に、散り敷くカンバの紅葉で、點々足の踏む隙間も無い程である。昨夜の屋根を叩いた音は、正しく此等の木ノ葉に他ならない。

小舎の近くに、地上から二本に岐れた大きなサウシカンバの樹が立つてゐる。

そして落葉はその梢を離れて今もなほ、恰も深山の秋を告げ顔にパラ／＼と限りもなく散つてゐた。

サウシカンバ

(*Fetula Schimichtii* Regel) 樺木科。一名ミネ

バリ。山地の落葉喬木、樹皮は赭黒色、鱗狀木皮で厚いコルク層に變ずる。葉は卵形又は廣卵形で尖り、縁には稍々不齊の細鋸齒有り、初夏黄褐色の穗狀の單生花を同株に付ける。果實は長さ二寸位の穂をなし秋に成熟する。木質は極めて堅い。

北御室の登山小舎を出立したのは午前八時半。小武川の一水源をなすドンドコ澤を降る。十月下旬の

朝の気温はC一二度である。

小舎から直ぐムロ澤を涉り、左岸の水無澤を横切つて、付けられた小道の急な降りをつゞけると、約十五分位で、右手に五色ノ瀧がかゝつてゐた。道から僅かに溪の方へ入ると、花崗の岩盤を細い流れが一匹の布の如く落ちてゐる。高さは五十メートル程もあらう。

岩の肌と、それに生ふる潤葉樹の霜葉と、瀑の飛沫に映る虹の光彩と、いつも乍ら五色ノ瀑は、珍しく優美な景觀である。

其處からなほ針葉樹中の急勾配を下つて行くと、北御室の小舎場邊に少しく似た所があつて支流の澤を横切る。そして又降り、大岩を左にして、水のなしい澤へ入つて、痺せた細い鞍部を辿る。一ノ木戸と稱して、ドンドコ澤に於ける唯一の通路である。

其處を過ぎて、少しく下れば、右手に當つて白絲ノ瀧の標識が有つた。九時半、生濕な苔むす針葉樹林の中を右手へ入ると、溪流に瀧が懸つてゐる。二丈位の高さのものであるが、他にも數段をなし、蔭

は極めて峻険であつた。鳳凰山の溪谷は、流れに添ふてそのまま登降する事は、すべて全く不可能であるとされてゐる。

ドンドコ澤の登山路も他に無い可成りの急峻で、慣れない登山者であると膝頭を痛めてしまふ程である。

白絲ノ瀧を往復して、なほ下降を急ぐと右手に自然の石小屋が在つた。此處で右へ伏流して水の少ないドンドコ澤の磧を渡り、針葉樹林を下つて又再び左岸へ流れを涉り返した。この下部は直下七十メートルの南精進ノ瀑である。

この瀑の下底へ到るには、もつと道の下方から、横に逸れて進まねばならぬ。

左岸の道には、巨石が自然に屋根をなして、雨露を凌ぎ得る石小屋が在る。九時五十分。

なほ道は針葉樹林の中を降る。小流れを横切り、更に又、小支流を涉ると、三度び路傍に石小屋の存在が眼に付いた。その陰暗な樹叢のかけから、やましぎが一羽舞

ひ立つた。頭上のハウチハカヘデの樹で、が／＼鳥が鳴きたてる。

かくして、山の側腹をドンドコ澤の河原へ降り着くと、十時十分。

もう今迄のやうな急勾配はなくなつて、あたりの林相も多く潤葉樹である。

溪谷の左端を行く。燕岩の下あたりを過ぎると、砂防工事の堰堤が築造されており、青木鑛泉の湯ノ水が、竹管に導かれてゐる。恐ろしく鹹滋味のある鐵鑛泉である。

二つの道の分岐點へ出た。左は青木鑛泉を経るもの、右は經ずして小武川を辿る道である。

右を執つて、ドンドコ澤の流れを渡る。橋が架けてあつた。十時四十分。

それより十五分にして、丸澤の溪を溯る舊青木湯跡並びに薬師岳或は南御室への道と合し、小武川の上流がなす廣い溪澗に生ふるハンノキ、ミズナラ、シラカンバ、ドロブ、ヤマウルシ等の樹林中を、小道は明らかによく記されてゐた。

願れば鳳凰山の観音岳、薬師岳の高い灰褐色の頂稜と、辻山の藍黑色の圓頭などが、溪奥を壓して大きく迫つてゐる。

河原は花崗岩の砂礫が美しく、上流の急斜な支溪から轉送して來た岩屑砂礫は、この邊に於て堆積し去り、爲めに河床はやゝ緩やかな勾配と、なほ一〇〇m餘の高原を保つてゐる。

青木鑛泉の湯釜の煙りを近く左手に望んで、それへの道と合し、丸澤の橋を渡り、コア澤から鳥居峠を超えて葦崎に通ずる道の右に岐れる所に着いた。十一時二十分。

新たに開通された小武川溪谷の道路は、これより左手にとつて、沿岸を下流へ何處までも進むのである。

溪は、ナラ、クヌギ、シラカンバ、カヘデ、ハンノキ、ズミ、ヤマナシ、ウルシ、レンゲ、ツ、ジ、ノリウツギ、ハシバミ等、多くの潤葉樹の内に、アカマツ、ツガ、モミなどの針葉樹が雜り、氣分は明るく開けて、深い幽邃な趣きは感じられなかつたが

それでも、白い砂地を洗ふ清い流れと、巨岩に激する溪水の様態とは、それが鳳凰山の溪谷として、他に較べて決して何等の遜色を持つてゐるものではなかつた。

小武川牧場の柵を超えると、下湯澤の注ぐ手前で御座石ノ湯へ到る小道が左へ入つてゐる。そこまで約十町、御座石鑛泉は新築の湯宿で、青木鑛泉と殆んど同じ程度のものであつた。

こゝに御座石の地名を生んだ傳説がある。

御座石

續日本記事蹟考に、人皇四十六代孝謙天皇落飾シ法華寺ニ入り給フニ及ビテ、大政大臣禪師道鏡ヲ嬖幸シ給ヘリ、御子アリテ之レヲ奈良法王ト云フ、光仁天皇踐祚シ給フニ及ビテ道鏡ヲ下野ニ流ス。寶龜元年、此ノ時法王亦甲斐ノ國大草ノ郷湯島ニ謫セラル、王、奈良ヲ開發シ、又鳳凰山ニ登リ、遙カニ西方ヲ望ミテ都ヲ慕ヒ給フ、とあり。寶龜五年、奈良法王が今の鳳凰山に登り、遙かに西方南都の空を慕はれ、次い

で山麓の郷に來遊されると、郷人は小武川溪の此の地に在つた長さ二十歩、横二十九歩ばかりの大石の上に茅草を敷き之を招じ奉つた。依つて山を法玉山(鳳凰山)と稱し、此の石を御座石と呼ぶに到つたと云ふ。次いで、太平記二十九卷師冬自害ノ事、付諏訪五郎ノ事の項を参照するに正平五年三月廿五日、鎌倉の元氏と高播摩守、師冬不快に依り、師冬没落して甲州澤の城に立籠る。六年正月十七日諏訪下宮祝部、六千餘騎を以つて征め寄せ、三日三晩の激しい合戦をして師冬は自害した。依つて其の殘黨は高岸絶壁を遁れて鳳凰山の麓に落ち延び、子孫は漸次繁榮して、遂に御座石千軒と稱せらるゝようになつた。所が或る時、御座石鑛泉に盗人があつた。降雪の後とて、直ちにその足跡を尋ねて之を「捕縛し、郷人は夫れを殆んど斃殺しにした。その祟りか、間も無く村内に悪疫が流行し遂に御座石千軒は没落するようになつてしまつた」。

と云はれてゐる。

御座石の湯場は最近に改築したもので、湯は酸性明礬泉、皮膚病其他に特効があると謂ふ。

小武川牧場の、牛馬の放牧してある中を突切つて行くと、あたりの樹々に、つぐみの群れがとまつて居り、その飛び立つた後へ、追ひかけるやうに「あと」の一群が、サツと風音をさせて下りて來た。候鳥は今や、南下の移動にいそがしいらしい。

大きなホルスタインの牛が追はれて、クヌギの樹影に遁け込むと、其處から「さんかのごゐ」(やまさぎ)が一羽舞ひ立つて下流の方へ飛んでゆく。

右手に少しく道を逸れると、小武川電力第三發電所の取入口が設けられて、堰堤に溪水が濃藍色を溶いてゐた。番小屋へ寄つて茶などを飲んで貰ひ、晝食をとる。十二時。附近は第二發電所の設定地で、更に上流へ第一發電所も建設される事になつてゐる。

二十分の後、尙先きに進めば、左岸に上栗澤が注ぎ、それから溪谷は大分右手に迂廻してゐて、溪湖

は急に狭められてかた。流れに來かる上等な木橋を幾度か渡る。

溪はU字形に折返してゐて、左手から下栗澤が注ぐ所、第三發電所が建てられてあつた。

水量四四ヶ、落差七二九尺、發電能力約二千キロの設計である。

その直ぐ先きには、第四發電所の取入口の堰堤を兼ねた、コンクリート橋架長さ九〇メートルの鐵橋が、鐵欄も美々しく溪澗を横斷し、流れは此處に大きく湛へられて、濃い藍色の水面へ、靜かに山の姿を描いてゐる。白く塗つた小形のボートなどが、一隻そこに浮かべてあつた。

自然的環境へ、よく人爲的施設を加へた風景の典型である。小廣い道路は緩やかな傾斜をなして溪間を下る。「く」の字に折れて、右手に曲れば、河原はすつかり展げ、左方に新奥の村家を眺めて、第四發電所の傍らを過ぎる。それは水量五五ヶ、落差三四一尺、發電能力一〇〇〇キロを算してゐる。

前方に釜無川東沿岸の七里岩の高臺を眺め、左手

に八ヶ岳の翠巒を、前面に枯草色した舊火山茅ヶ岳を望見する。

午後二時半、遂に溪谷を出て、釜無川の谷盆地、上圓井へ着いた。

上圓井からは韭崎驛まで三里弱。乗合自動車は汽車の發着に聯絡してゐる。

荒川

荒川

新緑に飾られた五月の溪谷の旅、噓るやうな若葉の香りに、心ゆくまで浸つて、この大自然は、斯くまでも素晴らしく崇巖に、眼覚めるほど佳麗にめぐまれてゐるかを、しんみりと感得する喜びは、如何なる形容を以つて喩えてよいものか、その術をさへ識る事は出来ない。

今、此處に、白峰の胸奥深く抱かれてゐる峡谷、荒川の流域を訪ねて、若き力みなぎり、溪谷を一杯に濃く流しかくる黄緑りの色と、山稜の岩石を綴る多量な残雪の白光とに親しく浸潤せんとして、山麓の僻村芦倉の里へ入つて來たのは、五月上旬の或る日、生憎早朝より、山澗には雲霧が頻りに立ちこめて、遂に細雨さへ蕭々と、煙るが如く降りかゝるのであつた。

芦倉大曾利の、一軒すらない山家の小宿、青木久

次郎方の、鄙陋な二階の一部屋に落付いて居ると、眼下には、小曾利其他の里落が、薄白く流れる御勅使川の、遙かに低い溪底へ並んでゐるのが眺められる。

溪澗は觀る限り一面に、溶いて流した黄緑りの、燃えるやうな青葉若葉の溪である。アカマツの藍青カラマツの青緑、ケヤキ、コナラ、シデ、カヘデ、クリなどの黄緑り、桑畑の畔に、桐の花も紫に咲いてゐる。

背戸の桑畑で、ほゝじろが、初夏を迎へる喜びを歌つてゐる。鶯も、何處か其處らで鳴いてゐる聲がもれてくる。

家の前のケヤキに、「おなが」の一群れが飛んで來て急に喚き立てた。

夕景より、幸ひ小雨は上つて來た。そして雲は盛

んに山の方より東に向つて流動してゐる。これで天候は漸時霽れてゆくものらしい。

薄暗のかゝる村家の軒端を、蝙蝠が小淋しく飛び交ひ、裏の山の上の社の森あたりで、みづく、の、ホウ、ホウと氣味悪く鳴く聲が聞えてくる。

芦倉の泊りの一夜は明けた。此處の夜明けは時計は見なくても、夜具の中にくるまつてゐて、あのとても早起きな、小鳥達の歌を屋外に聞けば、それでも午前四時を過ぎた位の事は、確實に認識されるのであつた。

人夫一人を伴つたまゝの、極く輕装な山旅は、天候の不定を氣遣ひ乍らも、少しく遅れて、午前八時芦倉の登山口を發足した。

大曾利から、御勅使川の河原へ降りて、支溪金山澤の道へ入り、間も無く左へシヨ澤の溪に面してこの山麓の道を何處までも溯る。

シヨネ平には桑や麥の畑が拓かれ、道の左側に車地藏と呼ぶ小さい石祠が在つた。

路傍には澤山のヤマブキの黄金花やコナシバラの

れ、ミズナラの林となる。

東南の楯形山の上に富士を望み、甲府盆地を隔てて奥秩父、大菩薩、御坂の各連峰を一眸の裡に納め白峰南半の笹ヶ岳さへ、すつと右手寄りに見えてゐる。峠の上へ來たのだ。

熊笹の茂る小廣い山の頂、それは甲斐駒山脈の主稜の一端で、一寸した凹地なども有り、それを過ぎて、その西の突端に駈け上れば、一時に全神経を双眸に集めて、雄大な残雪なほ白皚々たる白峰の全容が岌然として西面の空際を壓してゐるのに對した。

山嶺の白雪は、皚々として露出された崖鬼たる黝灰色の山稜と縞を成し、中腹に纏ふ針葉樹は藍黒色深く、山麓野呂川の溪谷は、既に潤葉樹が若葉の黄緑を一面に流してゐる。北岳と間ノ岳の東側に在るカールの下に北岳の登山小舎が小さく見えてゐる。

此の小舎は、山稜から降り二十五分、登り四十五分を要し、水は尙その下方約十分の所に湧いてゐるので、多少不便であると共に、雲霧に捲かれた際は頂稜からは其の發見にさへ困難である事がある。

白い花が咲いてゐた。ほゞじろ、ひよどり、もず、うぐひすなどの山の鳥の歌が盛んに聞えてくる。寧ろ八釜しい位である。

そして、漸時夜叉神峠の登りにかゝる。

空は少しく晴空を見せて、雲足速く、天候はあはよく回復してしまふらしい。

九時二十五分。高谷山の方へ向ふ道が左に分岐し右に山腹を捲いて登つて行く。アセビが白い花を着けてゐた。

シラビソの木立の一叢が在つた。鳳凰山の前宮の跡で、今は石崖積みなどが其まゝに残つてゐる。潤葉樹はこのあたり、漸く芽ぐんだばかりである。

峠道の登り、その歩調は極めてゆるやかに、急がず、焦らず、又休み無く登つて行く。これは少しく山に慣れないと、出て來ない登高の調子である。

道は紆つて、小尾根を辿り、右手に大崖頭(二一八六・一m)を眺めると、右へ鳳凰山、杖立峠への道が岐れてゐた。

山腹は一帶に潤葉樹の若木が多く、クマザサが現

間ノ岳ホソ澤のカールの雪溪は、甚だ美事なもので、恰も立山に於ける猿又のそれに彷彿たるものがある。

農鳥岳東面へ鳥形をあらはす残雪は、初夏の最初は、芦倉で云ふ農馬の形をなし、恰も南に向つてゐる小馬の姿である。但しこの雪は漸時消えて、纏て農鳥の形を成すに到る。黒河内岳の左肩へ、東岳の雪白な峰頭が覗く。峠上、十時四十分。十一時、野呂川の溪を指して此處を降りにつく。

登り道に比べると、この降り道は極めて細く、又恐ろしく急峻である。木立は尠く、若葉は未だ芽ぐまず、笹が黄褐色に覆ふてゐる。ミツバツ、ジの紫、オホカメノキの白い花などが僅かに山腹を飾つてゐるのみ。北岳は何時までも、峠の降路から眺められた。

纏て、野呂川の溪谷を満たす、潤葉樹の若葉の林に入り、そして正午、河畔の鮎差の新設された小舎へ降り着いた。

此處では、元製板なども盛んに行はれたものであ

るが、その小屋は先年焼失し、やうやく最近に到つて、再び小舎が新築されたのである。

鮎差の地名は、元野呂川の當所あたりまで鮎が差した事があつたので、斯く命名されたと云ふ。但し現今の魚族は、いわなとやまめに限られ、「やまめ」は上流の廣河原の附近までと、支流の荒川に棲息してゐる。

もうかれこれ十年以前の事である。鮎差の小屋に宿營してゐて、朝夕の食膳へふんだんに、「やまめ」の御馳走を提供された事があつた。

そしてこの小屋へは時々かわうそが、色々の妖怪となつて出てくるなど、山人に威かされた事もあつた。

直ぐ對岸に、炭焼の、茅で拵へた小さな山小屋が二、三建つてゐる。橋を渡つて此の小屋へ寄り、晝食をとる。

炭焼は芦倉の村人である。中に登山案内組合の者も居たが、もう六十餘日の炭焼生活で、顔は炭で黒く汚れ、話に聞く昔日の、綠日乞食の荒熊も恠厭や

下に達し、山道に比較して、別途のやうな立派な釣橋を渡つて右岸に移る。左岸のこの絶壁は、仰ぐだけに美事なものである。往時、鷺がこの岩壁の裂罅に巢を作つた事があるといふ。岩の根は、溪流が白沫を上げて奔下してゐる。

右岸の小徑は、二つの小澤のガレを横切り、岩をへづる。そして午後一時五十分、荒川の合流點へ達した。

水量は約野呂川の半量を注ぎ、荒川に架かる立派な釣橋を渡れば、對岸の山脚に新設小舎と天然の石小屋が在り、池山を経て北岳に至る吊り尾根の登山路は其處から山へ登つてゐた。野呂川の上流は、荒川渡の奥で一度左岸に移れば、廣河原まではその東岸のみを辿り、廣河原に於て西岸に徒渉するやうになつてゐた。荒川溪谷へは荒川の釣橋は渡らず、その下岸を荒川の上流へ指して進むのである。

流れは、やゝ白濁の水が奔下して岩を噛み、濃い黄緑りの、眞新しい若葉に包まれた奥に、薄氣味悪く、凄いやうな暗い氣分の峽谷を彫刻してゐる。

うではなかつたかと思はれ、先程のいたちの顔も聯想されて、但しそれは如何にも山人らしい、罪の無い多分の愛嬌を示してゐた。

午後一時、此處を立つて、左岸から野呂川の溪流に沿ふて、小徑を溯る。

河流は、初夏の融雪期に際して、白峰の雪解の水を加へ、恰も降雨の後の如く、但し非常に綺麗な藍青の水を、瀬の音高く亂舞させてゐる。鮎差邊の新緑は正に酣である。

兩岸を蔽ふ樹梢の黄緑りのあでやかさが、白くたぎり落ちる流れと映發して、えも云はれぬ典雅な景觀を呈してゐる。

溪澗の新緑を通して、白峰間ノ岳の殘雪の頂嶺を望む

きべりたては、こみすぢなどの蝶があたりを翻りと舞翔する。

左岸の山道は、乏しい險路である。河岸にのぞんだ岩をへづり、上つたり下つたり兀々として進む。

三十分の後、鷺ノ住山の南面に當る大きな岩壁の

徑四寸位の太いヤマブドウの蔓などが、小徑の手に纏繞する。

河中に、方形の大きな石の在る所で、此の石の裏から、對岸へ初めて徒渉する。

大きな流木に助けられて涉つたが、それでも股の邊まで濡れた。二時二十五分。

そして左岸の少しく高所へ上つて辿ると、兩岸は岩壁となつて、河中に二丈位の瀧、その上に又三丈位の二本の瀧が磊々たる大岩石の間に懸つてゐる。

河原へ出て、左岸の岩の上を渡り、それから徒渉して右岸へ移る。そして又左岸へ渉る。水は股の上まで浸り、雪解の水でその冷たいこと甚だしく、痛い程に浸透する。

其處の河原から、小高い臺地の大きな岩の根は、ペデの天然石小屋である。この岩の下には、雨漏り無く、約十人位は野營する事が出来る。冬季の根據地としては最もよい。

河原からは、直ぐその上流左岸に、美事な忽滑たる大岩盤が觀えて、それに約八十メートル位のケム

リ瀑が、水量はやゝ少ないが岩盤を一直線にズリ落ちて、煙のやうに飛散するのが眺められた。駒鳥の唄が聲える。岩燕が飛んでゐる。煙り瀑の岩盤の滑面は、常に水垢が附着して艶やかに光り、イワザクラ、イワカマミ、クロボスゲ、ハゴロモグサなどが生えてゐる。此の大岩盤の下を、瀑水の飛沫に少しく濡れて過ぎる。

對岸に、ヒカゲサワラクボの澤があり、河原はやや潤けて岩壁なく、ハンノキの若木が林をなし、其の黄緑りの若葉の色は、特にもの優さしく美しかった。

下流を顧みれば、溪は巨大な洞穴のやうに、低く岩と岩の間へ流れを吸ひ入れてゐる。

累々たる大石を超えて、右手の河原を行くに、ウドやクマワラビの軟かなのを採集する。ヒナタサワラクボの手前で、丸太材を渡して右岸に移り、左手の岩岸の上へ出て山腹をへづる。脚下は荒川峡谷の奔湍である。そして魚止ノ瀧と稱ばれる急瀬が懸り

大きな淵に藍青の水は渦巻いてゐる。三時四十分。

溪を傳ふ小逕は、甚だ乏しく危いものであつた。高所の横へづりから河原へ下れば、又徒渉をしなればならぬ。木を三本ほど伐つて流れの狭い所へ橋に渡し、そして左岸に越える。それから間もなく、又も右岸に涉り反す。サネアタマ及びケラトアタマの涉りと云ふ。流れは股まで浸つてしまふ。下流の溪間には大崖頭山をかへり見る。

崩壊した岩盤の下を過ぎ、此處で始めて残雪に遭ひ、そして其の上を渡る。

溪は北へ折れて西に向ふ。其處へ支溪北澤が注流してゐた。

北澤は極めて狭い急な溪である。北岳と間ノ岳との間の東斜面より發して、池山澤、ボウコン澤を併せ、本谷にやゝ比敵する程の水量を持つてゐる。然し本谷は北澤の溪より上流に於ても、さして水量の激減した様子は現はさず、相らず變岩石に激奔してゐた。

空は晴れてゐたが、淡褐色の雲の一團が浮遊して

ゆく時、ばら／＼と不時の雨を降らせたりした。そして山より東に向つて頻りと移動してゐる。

溪は愈々急斜を加へ、左手に絶壁を見て進むと、其の先きで又も左岸へ徒渉し、やがて又々右岸へ涉り返す。そして右岸の流れに沿ふて岩をへづり、次に左岸へ涉り返せば、其處はもう、今宵の野營地である荒川溪の廣河原であつた。

小廣い河原を辿ると、その浸出した小流れの水溜りに、ひきがへるの卵がうざ／＼する程生まれてゐた。正しくそれは蝦蟇がま仙人の御曹子である。

上流は、本谷と、唐松平から出る南澤の差挟む山脚が、茶褐色の崩壊を見せ、其處から本谷は右手に折れて、深く山皺を刻んでゐる。

下流は、池山の尾根に閉塞され、壺のやうな溪底の、その右手に小高い河段丘が在つて、そこに獵師の小屋が建つてゐた。

樹皮で屋根と壁を造り、二坪に足りない位の小さな山小屋ではあるが、山旅の宿營にとつては、何としても結構な掩蔽である。

午後五時着。ハンノキ、ヤマハンノキ、ナ、カマ

ド、カワヤナギ、ブナ、などの、まだ芽ぐまない細い木立の中に、豊富な燃料を集め得て、焚火の煙りがあがる。飯盒に白米が磨がれる。空は全く晴れ渡つて、淡い金茶色の一團の雲が、下流の山の端しに少しく覗いてゐたが、それも何時か消え去り、七時頃漸く積に暗が降りてきた。夕食の用意が出来る。そして今宵は、新鮮な山菜が小鍋の中で煮えてゐた。

山 菊 料 理

山の料理は簡便なもので良い。贅澤や、七面倒臭い事をしなくとも、激しい労働後の空腹には何んでもおいしく食べられる。

平野のキヤンパアのやうな餘裕や裕長さがあ
る様では、まだ／＼眞に山に同化し突入しては
ゐないのだ。

登山家にとつて、野營の山菜としてはウド、
コマミワラビ、フキ、フキノトウ、タラノキの
嫩芽などがある。

ウド、フキ、フキノトウ、タラの芽は、よく

水で洗ひ、鍋或は飯盒の湯の沸立つ中へ入れて蓋をせずゆでる。そして味噌、醤油、二杯酢（酢五勺に醤油三勺を加へたもの）三杯酢（酢五勺醤油三勺砂糖三勺）ソースなどをかけて食べる。初夏の山旅に於けるウドの香氣と豊饒な味覺は又格別である。コッミワラビの多肉な軟らかな味も結構だ。さしてあくが無く、そのまゝウドと同様、汁の中へ入れて煮る事が出来る。汁のだしは、粉麩がどうさもなくてよい。豚の脂肉の安價な所でも持参すればなほ上等である。

何時か空には、半月が冷たい光りであたりを薄明るく照らしてゐる。

後、月は白峰の裾の山の端に隠れて、濃藍黒の空間に星が散る、焚火の炎がめら／＼と、終夜廣河原の暗に踊つた。

翌日は一點の雲も無く、良く晴れ渡つてゐた。溪流の音。駒鳥の唄は、駒の嘶くやうに、力強く溪澗

に響く。

午前四時に起床、気温はC五度、いくら寒さを感じない。何と云つても、もう五月の気温である。朝食はウドの味噌汁で済ました。豊饒な新鮮な味は、山でなくてはと想はれる。

午前六時に廣河原を出発する。

南澤の合流點を左に見て、直ぐ右に河原とは離れて山を攀ぢ登る。

南澤の左の、大きな崩壊の中程の岩に、一頭の羚羊が立つてゐた。最初はそれが何んであるかを疑はれたが、人夫の注意に依つて眺めてみると、そろり／＼と動き出したので興味深く眺められた。

本谷は、南澤から急に右に迂廻して、兩岸は恐ろしく絶崖を形成し、其の奥に有名な三ツ瀑の嶮を秘めてゐるのである。其の儘溪谷を遡る事は絶対に不可能なので、其の左岸の山腹を攀ぢ登り、約三十分位で少しく左手に逸れて溪谷に近付くと、三ツ瀑は全く前面に暴露されてゐた。

岩盤は物凄く屹立して、流れは深く地底を穿ち、

本谷とホソ澤の合流する所に、いづれも美事な布瀑を聯ね、本谷は落差約六〇m、ホソ澤は同じく五〇m、そして合流してからその下に、なほ約二五m位の瀑をなし、少しく離れて下流には、カラマツ谷の小流れが、約九〇m位の瀑を岩崖に垂れ懸けてゐる。滔々たる瀑の繁り、瀑の都、岩燕はしきりに群れて飛び交ひ、カラマツ瀑には不斷の虹が映つてゐる。

岩壁の美、それは大自然が創造した凡ゆる悪の妖美である。水の飽く迄奔放に狂騰する状、それは非常な天才のみに與へられた限り無い壯麗である。

此の時、この景觀を撮影する爲め、防けとなるコメツガの大木を伐つて溪に落したが、伐木は風を切つて落下し、溪底の岩石に激突して粉碎飛散するよと見れば、萬雷のやうな音響が、俄然溪澗を物凄く、嵐のやうに震撼させるのであつた。

七時十五分。此處を後に、なほ暫らく登ると、ホソ澤の瀑の、すつと上へ出た。熊平と稱する熊笹の茂つた小平地である。

こゝを横切り、ホソ澤に入つて、その小さな溪を

登る。雪解の跡の斜面に、バイケイサウが葉を抜き出し、カワラヨモギ、コッミワラビ、キバナヘビイチゴなどが新葉を萌え出してゐる。ホソ澤の溪が北へ曲折する所から、左に山稜へ取付き、即ちホソ澤と本谷の差挟む。此の山稜をそのまゝ登つて行く。

右手にホソ澤を望めば中途へ三丈位の瀧が懸りその上流は多量の残雪がカールを眞白く埋めてゐる。いゝ加減登りを續けた所から、今度は山稜を左に切れて、急斜面をなす山の中腹を、横へづりに漸時本谷へ入つて行く。

かうして本谷へ接近すると、左からアスナロ澤が急峻に合流し、更にその奥へは、農鳥澤が合流してゐるのを見る。其處は、夏は荊蕪草莽の茂る五軒小屋の野營地である。

往時ガワ師が曲げ物の工作の爲に、此處に小さな山小屋を五軒建て、又上流アレ澤の邊に二軒建てた事があつたので、五軒小屋、二軒小屋の名稱が残つてゐる。九時半。

農鳥澤は急峻で、なほ多量の残雪が堆積されてゐ

る。本谷には二丈位の瀧がある。そして上流は益々急傾斜をなして、残雪と岩石の白峰の頂稜へ遠く延長されてゐた。

十時、五軒小屋を後に、瀧の右側をへづつて、本谷の左岸へ一步踏んで入れば、右手の岩壁スレートに割目があつて、岩燕の群れが頻りに往復してゐる。彼等は今や營巢に、その全力を傾けてゐるらしい。

礫磊たる急な石河原、五分位で、右手に自然の石小屋が有つて、四、五人は宿營が出来る。

愈々残雪が現れてきた。それは白く河原一杯に堆積し、その裁断面から、流れは奔下してゐる。左手の幾多の小谷をなす山巒にも、雪は眞白く残つてゐる。本谷の残雪は斷續し、岸は針葉樹が生え、溪は高距を増して、一步一步に視界を展げてゆく。みそさざい、美しい聲で鳴く。

アレ澤が右手より注流する所で晝食にした。十時五十分。アレ澤の奥には残雪の白斑をなす間ノ岳が見え、左に迂曲した本谷の奥には、岩峰が黒く雪の縞を織つてゐる。

雪田に埋り、風の關係でその頂稜はバルコニイを作つてゐる。背後に、辻山や鳳凰山の頂きを眺め、農鳥岳の東山稜の上へ富士を仰ぐ。

かうして雪の急斜面を登る苦しい勤勞の後午後二時十分、間ノ岳石室の鞍部頂稜へ到着した。

石室は、バルコニイをなす積雪の背後に在つて、並ぶ二棟の内、南のものは完全に雪に埋没されて居り、北のものもトタン張りの屋根と、北の入口の扉とが、約三分の一程現れてゐた。頂稜の西斜面は、雪は殆んど消えてゐて、岩石や偃松が現れてゐる。間ノ岳への山稜も雪は可成りに良く消えてゐた。

今宵は、雪を掘つて石室の中へ入り、偃松の燃料に雪を解かして一夜の宿營をするのである。が、陽はまだ高い。初夏の太陽は西の碧空に、くるくると廻つて輝いてゐる。

此處から間ノ岳へは登り一時間半。降り一時間では樂であらう。暗くなるまでには、なほまだ四時間半もある。人夫の荷は其處へ残り、二人は午後二時半に間ノ岳指して出發した。

休息した所は本谷の入口で、溪はやゝ展げ、流れのほとりには、ミネザクラ、サウシカンバ、ミヤマハンノキ、ナナカマド、オニシバリなどが生え、水

は細く、唐松平の頂稜を下に眺める。気温はC二〇度で、陽はうらゝかに風さへも無い。脚にくろくさありがのしてきた。あたりをかなあぶが舞ふ。

十一時二十五分。本谷を登る。本谷は此處から山頂に至るまで、總て一大雪溪をなし、雪の表面は波状を呈して固着してゐる。

靴にはシュタイグアイゼンを附けた。

雪の反射は強く、顔は忽ち雪焦けにかゝるらしい。半日の雪中登攀でも、弱い皮膚はもう少しピリピリとする。

羚羊が一頭雪溪の遙かに上方を横切つて行つた。羚羊や野兎のトラックが、雪の上に幾條も印されてゐる。

高距は増して、雪溪は更らに急峻を加へてくる。

農鳥岳の北面から入る雪の大きな溪を左にして、石室の鞍部へ向つてひた登りに登る。山の斜面は全く

その山頂は直ぐ眼前に見えてゐ乍ら、歩いてみれば、磊々たる大岩石が亂立してゐて、仲々容易には進めない。そして山頂邊は、大きな量の残雪ですつかり掩はれてゐた。

東面のホソ澤やアレ澤の雪溪は、瞰下しただけでも長大なものである。

聳立する残雪の北岳の偉容、仙丈岳の巨大、甲斐駒の奇嶺、残雪豊富な赤石の連峰、更に木曾駒や、暗白な北アルプスの遠景など、山の景觀は極度に高調していつた。

間ノ岳の廣い山頂から、やゝ三國岳に向つて降れば、山稜に面して、白峰間ノ岳遭難者の追悼碑が建ち、半は残雪に埋もれてゐたが、牛奥富昌君の題字と、維時昭和二年七月十六日の傍書が現れてゐた。

今、此の石碑に對すれば山の貴い犠牲を想ひ、萬感交々胸に迫るものがある。

間ノ岳の山頂は銀光の雪に埋れ、中腹は針葉樹で藍黒く、山麓は新緑の色が華かに萌えてゐる。

その時、黄緑りを流したやうな野呂川の溪谷から

一陣の寒い風が、心あるものゝ如く襲つて來た。
北岳の山下廣河原には、更に先年の一月、痛ましいアクシデントが語られてゐたのである。

雪の降る日

それは、慶大山岳部のスキー登山の一行が、大樺池の附近草滑りに於ける遭難である。彼等は俄然雪崩れに遭ひ、皆なはさしたる事も無く助けられたが、一人野村青年のみは、不幸にして左足を折り、更に、内臓にも及ぼす程の大きな打撲痛を受けてしまつた。

依つて、一行は苦心して彼を廣河原の小舎まで連れ降り、急を山麓の村へ告げて救助を求め遭難者を強力に背負はせて、野呂川から芦倉に下山せんとしたが、もうその時彼の氣力は殆んど盡き果て、危期は刻々迫つてゐた。

そして、多くの人々の奔走と、同輩の心からなる看護も効無く、つひに深澤の合流點のほとり、ハラ／＼とか細く降り積る雪の上に、毛布

を敷いて横臥し、今まで頻りに水を求めてゐた元氣も消えて、彼れの呼吸は遠くなつた。

「何か言ふ事があるか」と、口を寄せて叫べば、

「……何もない」とかすかに答へる。

「ロツパイ、しつかりしろ。」

「……コツカン、あゝ、もう……だめだ」

かうして彼れの若い生靈は、遂に遠く遠く逝つてしまつた。

葦崎町旅舎清水屋の二階には、愛息の安否を氣遣つて、大阪より來られた彼の母は、落ち付いてはゐられない風情に、山からの便りを待ち侘びてゐた。

其處へ人夫の飛脚に依つて齎らしたものは死去の悲しき知らせである。

既に父無く、殊更に脆弱なこの母親の心へ、愛兒の悲報を勇敢に告げ得る者はいにくそに居なかつた。

「どうかなつたのではないでせうか。」
彼れの母は幾度か側近者に答ひかける。白鳳

會の柳本氏などは、その度にいたく快惱されずにゐられなかつた。

「何に、大丈夫らしいです。」

心にも無くつい一時遁れを云つてしまふ。然し何時迄もそうしてはゐられない。死體は擔架で運ばれてくる。關係者は鳩首協議をした上、

一步先きへ歸つて來た彼れの實弟に、このことを依頼するのであつた。部屋には、母親と、その女中と、柳本氏とのみが座つてゐる。東京支店長と、實弟は、兄のその哀しい他界の事をどういふ風に告げようかと迷ひ乍らも、勇氣を勉まし、母の前に直立して對したが、彼れの弟の緊張した蒼白な顔の口唇からは、たゞこれだけが、やうやく叫ばれるのみであつた。

「……お母さま、しつかりして下さい……。」
一座は、顔を上げ得る者も無い。聲を出し得る者もない。只だ暫く涙をのんで靜まり反つて時を過ごした……。

かうした数々の山の遭難、その原因は何であらう

か。山の施設が悪い爲めか、山の知識と用意が不備な爲めか。それは其のいづれにあつても、確かに一つの重大な起因をなす事であらう。そしてそれは、おろそかに出來ぬ一つの大きな問題であらう。

然し乍ら、何處までの施設、何處までの知識と經驗を要するかの點に及べば、結局それは表象的の言葉に終るものである。

遭難は今後益々防止し得る事は出來ても、絶對の安全は保證の限りでは無いのである。

此等山の遭難者が、吾等に齎らせる貴い犠牲的精神は、何を意味するものであらうか。理論は色々に構成せられる事であらう。

然し彼等が、山の犠牲者として、各々吾等の胸奥に眞面目に甦へる時、即ちそれだけ其處に、重且つ大なる貴さと、意義とが無くて何としよう。

間ノ岳の山頂を後に、宿營の石室に戻らうとすれば、折から、西に傾いた夕陽は、野呂川の溪に湧く濃密な水蒸氣に吾等の影を映じて、此處に忽然として二つの美しい御來迎を現出させたのである。

御來迎は、越中の立山に於ける、所謂「彌陀三尊の御來迎」である。空中に人體が黒く映寫し、其の頭の周圍に虹の環が丸く、佛像やクリストの像の後光のやうに見える光學上の現象である。

スペインの士官ウロアが南米に於て觀察し、これを始めて發表したので、ウロアの光環と稱せられてゐる。又ドイツのブロッケン山で發見せられて科學的に説明を與へられたものに、ブロッケンのお化け *Brocken Gespenst* と云ふのが有る。但し後者は光環（*コロンバスの卵*）を伴はず、單に黒い入道のやうな空中の映像を指してゐる。

御來迎は、本邦に於ては、つとに文化年間に於て既に之が記録となり、野崎雅明と云ふ人の「立山記」の中には、

少頃陰霧、已失望、霧中又忽焉生如車輪者、圓徑人尺許、輪邊五色如虹、中有物髣髴、是山中所謂三尊來迎者也。

の文章が掲載されてゐる。吾人にとつて御來迎の名稱は、實に權威あるものでなければならぬ。

一八六五年七月十四日、エドワード・ウインバア *Eduard Whympfer* がマツタアホルン *Matterhorn* の初登攀に際して、下山せんとして計らずも四名の同伴者を失ひ、茫然と自失して佇む時、恰も今失はれた山の友が何事か答へるものゝ如く、遙かにリスカム *Lyskamm* の高峰に面つて、三つの十字架の大きな光環が現れた、と云ふのは有名な話である。

今、白峰の間ノ岳に於て、いたく夕陽を浴びて東面の空に現出した怪奇な美しいリング。それは此處にあえなくも逝かれた彼等二人の山の同志の靈が、吾等の前に忽然として、何等かの意志を告げんとするものではなかつたらうか。

よしそれは、例へ單なる光學上の現象に過ぎないであらうとも、この人寰に穢れたる吾が醜き姿を照射して、清淨佳麗な光環の内に示現して呉れる、其のアルピニズムの貴い靈氣に向つて、吾等は何時でも限りなき熱禱と禮讃を捧げ得る用意は、決して忘れ得ないであらう。

御勅使川

御勅使川

甲府平原から西を望めば、甲斐駒岳山脈のやゝ中央に一大溪澗ウオリアキヤツがあつて、その稜線は甚だしく低下し、此處に、その奥深くひそむ白峰主脈、豊島岳と間ノ岳のギツフェルを展列させて、その水源は恰かも白峰の山脚を洗つてゐるかの如く想見せられるのであるが、其の實、白峰を巡る水脈は、すべて野呂川の溪に限られてゐて、それとは何等の關係もなく、北は辻山（二五八五m）千頭星（二二三九m）南は櫛形山の頂稜の奥仙重（二〇五二m）との中間に介在する山峽の支溪を集め、御勅使川は峽中の大盆地に向つて流出してゐた。

河川の大きさに比して、此の溪流の構成した扇状地程、壯大な扇状地は仲々に珍らしいものと云はねばならぬ。され、口碑を按ずるに……

御勅使川の命名

今より約千餘年の昔である。溪澗の芦倉村字大會利の前面にある八田山と云ふのに大崩壊が起り、溪を埋めて、其の上流は、一時大きな湖水をなしてゐたが、暫時にして急に缺壊し、大洪水はどつと甲斐の盆地に流出して、沿線の村落を全滅せしめつゝ、釜無川の廣い積を押し切り龍王、甲府、石和を経て、遠く一ノ宮邊にまで到達した、と云はれてゐる。

今、甲府郊外の東光寺に祀られてある一基の石地藏は、芦倉村のテラン澤に立つてゐたものであるが、この時流されて偶然島上條に到り、次いで其處へ移轉されたものである、と芦倉の村人は主張する。

時は淳和天皇の天長二年四月、國守、文屋秋

津より、この未曾有の大水害の悲惨事を、直ちに朝廷にまで奏上したので、長くも御勅使の御差遣あり、依つて以後この川を御勅使川と呼ぶやうになつた所以である、と語られてゐる。

國幣中社、一ノ宮の淺間神社では、今でも毎年祭典に、五里餘を離れた龍王釜無川畔まで、盛んな神輿の行幸が行はれ、之を大御行、又これは川除祭と稱へられてゐる。

土地の者は御勅使積と云ふ。荒蕪な廣い地積に、大小の石や砂礫をうづ高く推し出してゐる有様は、如何にも河川の暴状を標示してゐる。

甲府驛前を出立した有野行の乗合自動車は、困難な治水事業に、偉大な遺跡を残す龍王の「信玄堤」から釜無川を渡つて、この廢河川に作られた道路を走り、約四十分で、有野の入口に着いた。

其處の松原の端に降されたルックサックを肩にして、赤松の枝越しに行く手を仰げば、御勅使の大きな溪が山の間に刻み込まれてゐる。右手、千頭星山

ウと叫んでゐる。

積は少しく狭められて、左から右手へずつと彎曲してゆく。路傍に在る峽西電力の發電所は、金山澤合流點の少しく奥から取入れて、水量二十五個、落差六百尺、發電能力一五〇〇キロワットと設計されてゐた。

其の先きに、芦倉の内の新倉の人家が見えて來た。古屋敷の村家の前方で右手に橋を渡り、芦安村役場と小學校のあたりから、小曾利を抜抜けやうとする所で、左手に桃ノ木鑛泉、ドノコヤ峠、或はシヨ澤を溯つて夜叉神峠方面へ登る道が岐れてゐた。有野から此處まで、徒歩約二時間の行程である。

御勅使川入りに加へて、廣大な野呂川奥入り全部を併有してゐる芦安村は、面積は二萬三千五百餘町歩。その大部分は恩賜縣有林、並びに御料に占められ、民有は僅かに二百町歩弱しかないといふから他の山村の例に倣つて村民の生活は相當逼迫したものでなければならぬ。山は固より自分等の物と昔から教へられてゐた山民が、登記の設定を無視して生活

へかけて、潤葉の樹々が黄緑りを呈し、五月下旬の山の若々しく凝らした衣裝が美しい。

路傍の草叢に素ばしこく遁けかくれたひばかりの褐色の背條を見送れば、小さなとかげ迄が氣味悪く金緑の背をてかかると光らせて、道を一さんに横切つて行く。有野の村家を過ぎ、漸次峽潤に入つて行くくと、大きな柳が數本並んでゐる所に、休茶屋などが數軒あつてあたりに荷駄馬が二、三頭つながれてゐる。

御勅使の河流を横斷した砂防の堰堤に、流れが幅廣く瀧となつて落ちてゐる所などもあつた。

駒場の里落を抜けると廣々とした積へ出て、對岸には、甘利山の太笹池より發する御庵澤の山壁が大きく眺められる。

積の行手を塞ぐ山稜は丸山(一六〇〇m)である。

春裝の綾衣は、潤葉樹林の濃緑りに、ヤマブキやヤマツ、ジ、レンゲツ、ジの裾模様を見せ、溢れるばかりの若やいだ山の幸を盛りこぼしてゐる。そして山の端で、初夏の青葉にむせながら、筒鳥がボウボ

の必需から、野呂川の沿岸、鮎差を根據地とし、大規模な盜伐を敢行した事は有名な話である。結局山民の生活を理解してやらぬ事柄に依つて演じられた社會的の深刻な悲劇は、もう三十餘年の昔語りとなつた。

現今の芦安村は、舊武川條の芦倉村と、舊西郡條の安通村と合併して出來たものであるが、川一條隔てた南岸の安通の村家は、三戸残存してゐた人家が他郷に移住して、現今は眞實全滅し、唯一の名残りを残す氏神の伊豆權現社の杜に杉、櫟の老樹は亭々として繁り乍ら、神殿は今や朽ち果てるにまかせてゐる。

安通の話

大磯の美姫虎御前は、もと安通に生れた者であつたが、相州の長者に呼び迎へられてその養女となり、長じて曾我十郎祐成に嫁した。間もなく、祐成は將軍頼朝が富士の卷狩の一夜、敵工藤祐經を討取り、次いで仁田四郎に殺された

ので、虎御前は出生地である安通に歸り、氏神社に曾我兄弟を合祀して世捨人となり、後世を此處に過ごしたのであると云ふ。

で、安通には、三十年乃至五十年毎には、頗る美人が出生すると謂ひ傳へられてゐた。

所が、往時此の村に、人身の痺れる不思議な悪疫が流行し、遂に村家を壊滅せしめるに到つたのであるといふ。

御松の節句

蘆倉の人々は、舊曆十二月の十三日に、舊正月を迎へる爲めの松飾りなどをする。御松ノ節句と稱して、山へ仕事に入つてゐた者達でも、此の日は全部が一先づ村家へ歸る可き習慣となつてゐた。

所が、此の夜、一人の柚が、金山澤の山小屋へ残つてゐて、その夜を明かす事となつた。

眞夜中のことである。向ひの山の中腹に當つて、大きな聲が呼びかけた。

「今夜の肴は何にする？」柚は自ら努めて氣を引立て乍ら答へた。
「うぬの眼のこ玉だ。」
翌日になつて、この柚は夢遊病者のやうな姿をして村へ歸つて來た。そして病床に呻吟する身となり、間も無く此の世を去つてしまつた。

狐

狐につままれた老婆の話である。

今より約五十年も以前の事だつた。大曾利のニヨウライ婆あさんは、春、蕨取りに山へ入つた儘、幾日立つても家へは戻つて來なかつた。
山々谷々、村人は總出で大騒ぎして尋ねあぐんだが、その年の晩秋の或る日である。村の獵師が不圖した事から、野呂川の支溪深澤の、少量の水の落ちる岩罅に、死體となつてる婆さんが發見したのである。狐につままれたとも、又天狗様にかどわかされたのだとも、山人達はとりどりに、其の不思議さを噂し合つた。

小曾利の商家の前から、道を左に執つて行く。午前十時であつた。

御勅使川の本流に架けた橋を渡り、右岸の崖壁に沿ふて溪を溯れば、右手の高所に、大曾利や香澤の里落を眺め、對岸に注流するタツン澤を合せた金山澤の峽澗から、大崖ノ頭(二一八六・一m)あたりの翠緑を仰ぐ。溪間は兩岸が高く迫つて、岩岸に水は激してゐた。

程なく、夜叉神峠方面への通路と、金山澤の合流する所で岐れ、左を執つて本谷を進む。山底は、やや平かに小砂礫が敷かれて、割合ひに小廣く、所々砂防の石堤が設けられてあつて、流れは其處に白く瀧を懸け、兩岸を掩ふ潤葉の樹々は、あざやかな新緑に萌え、ヤマブキは黄金色に輝き、ヤマツ、ジは眞赤に燃え、頭上のツガの梢では、くろつぐみが賑やかにみどりの唄を歌つてゐる。

溪沿ひの山道を、木炭を付けた駄馬が四、五頭やつて來る。
左から桃ノ木澤が注ぐ邊に桃ノ木鑛泉があつた。

十一時。小作りな二階家の二棟、客も無いらしく、落付いた山間の湯場である。アルカリ性淡白色の鑛泉で、胃腸腫物リウマチス等に特効があると云ふ。河原を渡る。水量は少なく、平な細かい砂礫の河床を道は細く長く通じ、サワアザミ、ギボウシユ、タンポ、の花などを見る。新緑の樹々の梢の色は、飽く迄も美しかつた。
また石堤がある。木炭を引降す鐵索線が山の上から張られてゐた。

右手からアイウチ澤が注ぎ、幾本かの丸太を架けた橋を渡ると、左手から北荒井澤、對岸に高谷山から出るをも瀑つた井傳澤が注流してゐる。十一時二十分。川烏が流れを飛んでゆく。
間もなく、兩岸は迫つて急流となり、崩壊した岩壁の下を溯れば、川瀬は太鼓を打つやうな響をさせてゐる所などもある。

五間程の棧道を過ぎ、石堤を下から上へ登つて行けば、河原は又平坦な砂礫の床となつて、一條の細い踏跡が、なほ溪奥を指して續いてゐる。